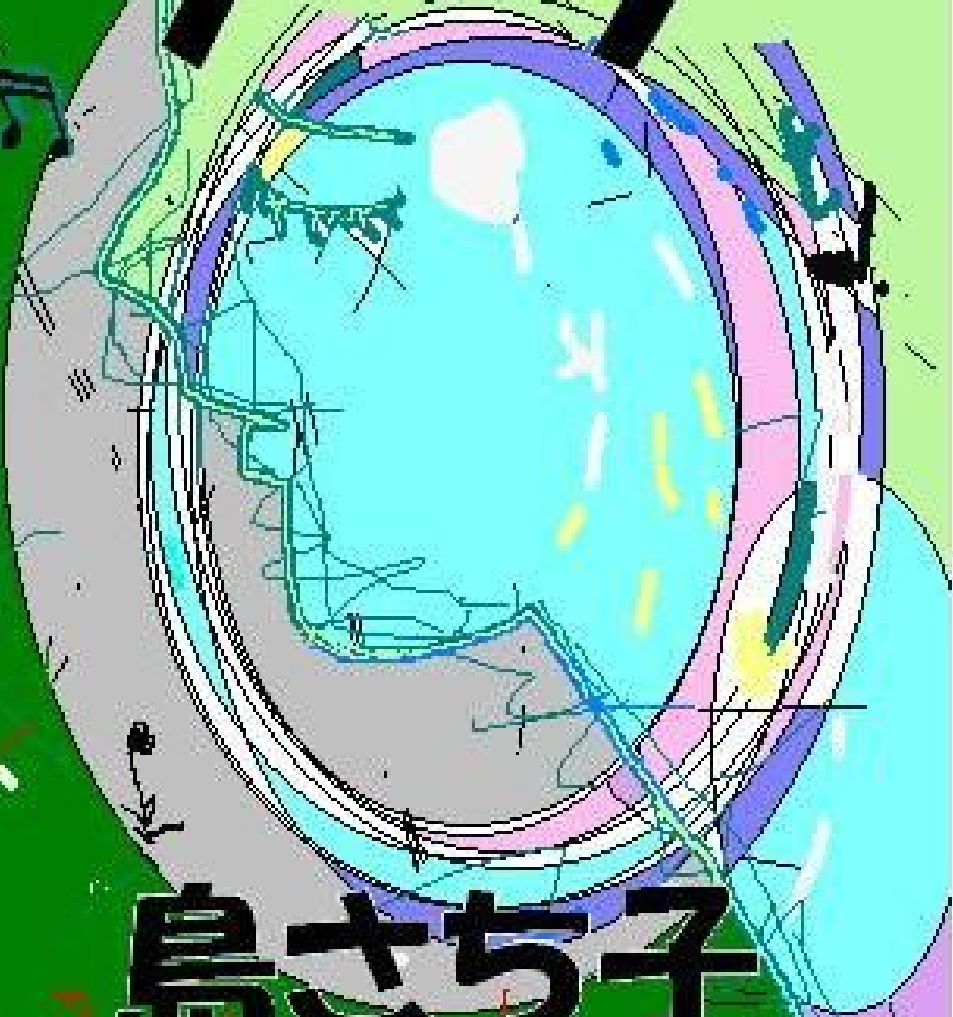


すっかり忘れ果てているけど  
空中と私の中に  
微妙に響き合っている曲  
があるみたいなの

# 15



# 島さち子

ソ

ラ

装画

島さち子

——  
第1部  
——

ソ  
ラ

1 心の位置が、わからなくなっていた！

あなたは鼻のそばに、一枚の大きくたわんだ薄緑のレタスをぶら下げている。ぶら下がっているレタスは半円形の口のかたちに齧られて、あなたの口のなか。あなたは絶えず観察されている奇妙さを感じながら、レタスを包み込むように舌をひるがえして、あなたの奥へ送り込む。形を変えながら送

り込まれるレタスを、わたくしは見ている。

手術のとき、どんな風に傷口が開かれて、どんなものが引き出され、その隙間にどんなものが埋め込まれたのか、わからない。あるときから、わたくしはわたくしを自分の血液や体液で養い育てることがいらなくなっている。長い間、透明な壇の中、薄赤い液を与えられ、でも決して酔っぱらわないで、確かすぎるおしゃべりをしていた。

あなたはわたくしの何を見たの？ 風船のように膨れた円い黄色い玉、なかに一杯膿のつまっている、濡れて光って、赤い筋に包まれて、銀色の盆の上に載り、縁に触れてはぶんぶん跳ね返りながら手術室から出て、どこへ？ あれはわたくしが何時か一度だけ見た、人体の中身だけれど、誰のものか？ 名がついていなかったからわからない。今わたくしはあなたの中にいる。こだわることをやめ、無人の世界にいるようにいると、ここにいたい感じが暖かくまといつき、次第に楽しさにとりつかれる。

あなたの手の下で雑誌の頁が、かさかさ鳴る。あなたは自分の目の前で手を振る、目を大きく見開き、瞼に手をあてがう、グラビアは悪性細胞の写真だ。斜めの光線で描く白い輪が頁の真中に浮んで、細胞は話しかけ、ゆらめき、ハミングしている。倒立顕微鏡、ガスボンベ、培養壇、あなたは頁を開いたまま雑誌を胸の上におき、同情を込めて強く抱きしめる。

それはソラ、研究材料であったのは、わたくし自身だ。その液体の中で、ひとにとりつき臓器や目

鼻を、四方に突き出す幻想を持って殖えつづけ、こころの位置が何処かわからなくなっていた。以前のわたくしから消え去った身体の一部は、こんな形で生き延びて、わたくし自身なのだ。いつかあなたも、あなたのそれを見ることがあるのかもしれない。

その時わたくしが生きているように、それと話し合うことができるのか、それに纏わる微妙な想いを知りたい。

あなたはジュースの壘に口をつけて飲む。飲んでいるつもりでいながら、口が壘に吸い込まれてしまいそうだ。壘の中は息で沸騰し、今度はあなたに対して吹き込む咳をするから、水中でのようにテールを蹴り上げ、跳びあがってしまい、膝の上に重しを一つ置きたくなる。

あなたは雑誌を拾い上げ、膝に置く。再びグラビアを開き、培養壘の上に手を。丁度その時、わたくしの外部がかすみ、あなたがその壘を取り上げたかどうか知らない。

——はじめは何事も起らなかった、世界は囲われていたのよ。それでも聞こえる音や嗅ぎ分けられる匂いはあったわ。薄赤い液の中にいて、ほかに触れるものはなく、計画することも、所有することも、失うこともいらなくて、ただ穏やかに過していたの。かすかに、遠い岸から、遠い岸に渡っていくような、滑らかな声があると思ったわ、始めはゆっくり、次第にリズムをつくったから、わたくしは声に突き動かされて泳いでいたの。時刻を忘れ、天候を知る手立てもないうち、もうリズムに合せる必

要もなく、突き飛ばされたりしながら急速に殖えつづけ、密着し合うほどになり、震動そのものになったわ。透かしてみると、液の中にうようよしているものの列が横ざまに砕けて、………そっくりだわ………ささや

きが、口や耳なしで分かってくるの。たくさんの波に映るたくさんのわたくしがいて、波は更に倍に殖え、飛び跳ねる余地もなく、もう、わたくしだと言っているわたくしが、どれであるか判断する為のサインさえむずかしくなったの。みんな一様に抽象化され非個人的であるけれど、何かお互いによそよそしく、それが救いでもあり、救いのなさでもあったわ。

わたくしはあなたに話しかける。舌足らずなもの言い、あなたに対して本能的にわたくしの正体を、はつきりさせたくない思いを持っているから、そうなる。ジュースが袖口にこぼれて、あなたは声をあげる。雑誌はあなたの膝から滑り落ち、周囲で哄笑の渦が巻き、あなたはそれに答えている。

——ちよつと、注意されただけ、考えすぎだつてば！

——晴れが続くのはもうどれ位のことでしょう。雨が降っていないということは、わたくしの内臓を取り出した後にも、太陽があるということ。背骨に太陽が一日中照りつづけて、脊髓がかんぴょうのようになってしまうのね。雨が欲しい。

忘れていた夕立がくる、最初の雨滴がわたくしに天候の挨拶をし、わたくしをのぞき込むあなたは、

顔の真中に黒い二粒の雨滴のような目を置き、若々しい未熟な表情、悲しそうな幼女の顔でもある。ほとんど動かない唇に声が止まっている。長い髪をあなたは揺する。

スーツケースを持ち上げようと手を伸ばすと、首、腰、手はそれぞれ、90度、60度、30度に屈した形でぴたりと停止し、身体は人間の似姿に過ぎないものになる。わたくしがまだ動かしたことはない、その関節に油をさし、ぎいぎいと腕や脚を立て直し、電流を通して腕や脚を動かし、持上げでは降ろし、脛の縁の乾いたまま、まばたきを繰返させ、あなたを電気の流れる限り動いて止まない人形にする。——とも違う、あなたの血は重々しく脈打っており、わたくしにはもつと生臭い細胞の塊としての完成図があるのかもしれない。

居心地は悪くはないが、生来の行儀悪さもあって、わたくしは一定の場所になかなか落着けないし、あなたと接触しきれないカバーのようなものを持っている。わたくしはこころとかいう荷物を持っているのだ。それはわたくし、この身体はあなた、いや、あなたではない。わたくしは崖淵に立ち止まり、次の瞬間、突き落とされたように流れに押し流される。あなたの意地悪にあっているのかと疑い、この新しい状態を楽しんでいる暇もなくなる。



全身を揺する、ポンプの響きと、スポンジを収縮させている風の音に、わたくしの唄はただれたひだひだの中に黄色く吸い取られる。手足のとれた唄声を壁の中に押しやり、わたくしは芽吹き、あなたの絶えず動揺している海を見る。

わたくしはあなたの中で、わたくしの名のソラであり、あなたの部屋のドアに、大きな赤い文字で書きなぐる。ソラ、ソラ、……ソラです。

ソラの名で部屋部屋は色とりどりの羽で飾り、羽におもりを付けてよろけるだろう。さまざまな叫びや呟きで部屋を満たす。わたくしの目指しているのは怪しげな建築物であり、いかがわしい都市だ。ソラの小部屋は模様替えをし建増しをして、十六方に別館を作る。

わたくしは法律の外、または内の内の内、あなたに何だつて出来そうな秘密の場所にいるのだ。何千万人も殺すというのではなく、とりあえず、あなたに於いて異形の人間を作り出すことを目指す。肉体にとって必然である死という生物学的現象を、多少取り乱しながら通過したのは、今から十年前、ということとはわたくしの体の患部が、手術の後培養され続けて十年になる。

身体は死んでもソラの名で生き続け、何故か今あなたに取り付いて、依然としてわたくしであるソラ。わたくしは人型のソラであった頃から、身体のどのあたりにわたくしの意識の中枢があるのか、幾ら

考えても解らなかつたので、今も自信がなく、わたくしがあなたを包含するに充分なほどの、広大な思考を持ちうるのかどうか分らない。

先ず手始めに、あなたの記号のまま、あなたの光芒をみる。一生懸命に見て、その意味を読み取ることから始め、その記号の中を生き延びるやりかたに慣れていかなければならない。あなたとわたくし、このふたりの女のコントロールが難しいと思う。

あなたが不意に機嫌を悪くし意地悪くなったとしても、わたくしを疑わないで欲しい。何時間でもじつと我慢していなければならぬのはわたくし、急ぎすぎて、あなたのエンジンまで止めてしまったりかたは、排斥しなければならぬ。あなたの細胞の一つ一つに、もつと自由な蠢動を与えたい。

整然と並びすぎている為醜悪である組織は変えてしまふ。

わたくしは周囲を貪欲に観察しつづける。細胞はみんな動物めいた、植物めいた、鉦物めいたものに分類できる。わたくしはどの分類のラベルにも改めて命名する、苦もなく亜山ソラと書く。ラベルはあなたの真中に、この一種偏執的な自己崇拜、澆神。わたくしが自分の名前に見とれている。いったん取り憑いた以上は、本当に実現するだろう、あなたは唯一のわたくしになる。何時か石のようになり、何時かはザクロのように破れて、意気込みの割には全く儂いのかも知れない。

あなたは自分の腕の筋肉を皮ごと摘み上げている。

——肉は痛み易いの、わたしが冷蔵庫みたい、こんなに生き生きしているわ。

——もう、手遅れだわ、腐っている。誰かの声。

街をあなたは歩いて行く。本来は見知らない女であるあなたの空間を、ソラが波に押し動かされて、更に目覚め間歇的に盛衰し、あなたをより活発なものにする。

あなたは歩いて行く。

——何でもありません、これくらい平気、大げさに言ったけど一寸減食しただけです。

あなたは若木のように、全身滑らかで美しく適度に丸い。噴水に打たれて、水玉と一緒に太陽よりも鋭く八方に光りながら動いている。

わたくしは若返ってオアシスの水を吸い取るように、あなたの世代を生きたい。暫らくは、あなたの翼の上に跨って、バランスとリズムを取りながら、開かれた空間を駆ける事ができる。

夢見ているのはソラ細胞によって作られた人生。あなたからソラへ、生命をスムーズに受け渡すこと。それは出産とか、昆虫の脱皮のようなものでありたい。胎児が膨らんでいき母親が痩せはて、皮にすぎなくしゃくしゃの母、巨大児は昆虫が脱皮するように皮を破って出てくる。母親は抜け殻になつて、風に吹かれて、かさこそ落ち葉の間に埋もれるだろう。脱皮というのは適切ではない、昆虫

の変態とも違う。殻の中でわたくしのDNAに記されたプログラムによって、身体をもった本物のソラ。人間だとも動物だとも言い得ない、つまりわたくし、純粋のわたくしになる。そしてその子孫。人間以上のやりかたで人間を滅ぼすことの出来る種類の生き物が次々誕生する。

何年前からか市販されているソラ細胞の中にわたくしが……、わたくしの思考と、記憶を持ち合わせているものがあるのではないか、そして何かの拍子に、誰かに取りついているのではないか。クローン、今そのことで騒ぐことはない、それは何時かまた、わたくしの生き延びる為の救いにもなるのだから。さしあたってあなたはわたくしだ、あなたの個性をわたくしの個性で塗りつぶす。わたくしの個性とは？

わたくしは時を待ちながら、ゆっくりと殖える。時には昼夜兼行、酔ったように狂おしく、あなたに混じり増殖する。必要なのは成長の中にも常に静けさを保つこと。

——黙っているんだ、わかるね、外に洩れてはまずい。

——ナンバーを間違えたなどということは決してありません。間違ったとしたら、それはご当人の方で、ご自分の名前を、思い違っていたのではありませんか。自分の名前だって、そう身についたものではないでしょう。自分で呼ぶものでもないし、自分で付けたものでもないんですから。

——あの日の午前中、精密検診は三人でしたわ。男一人女二人、間違わないように、女、男、女の順にしました。こちらは細心の注意を払っていたんですよ。何でもレントゲン室のせいにされたのは、たまったものではありません。

——そんなことをおっしゃるけど、レントゲンフィルムの名前が噛みあっていなかったから、こんなことになったんですよ。レントゲンフィルムに名前を入れたのは、レントゲン室なんですよ。

——ええ、フィルムに照射録のまま入れたんです。なら、お伺い致しますけど、その他にどんな方法があったとおっしゃるんです？ わたしは内臓の影の一つ一つと顔見知りではないんですよ。

——正確をきいて欲しいんです。わたしたちはそれを信じて診断しているんです。その基本的信頼関係が崩れたんじゃない、どうにもなりません。まるで、めちやくちゃありませんか！

——ええ……と、思い出したわ、先生、あの日、そうよ、彼女等呼び入れて下さったのは、先生、あなたではありませんの。とんでもないお話ね、責任を回避なさるんですか？

——失礼な方ね、あの日わたしは内視鏡検査をしていたんですよ。医師が、ひよこひよこ、患者を呼び込んだりしますか。

——僕ですよ、呼び入れていたのは。張りのあるいい声で呼んでいたがなあ。そうです、野方なみさんでしたよ。僕としては呼んで返事をする人を、本人と思うより仕方ないんだなあ。もう一人は何て方でした、そう、南まゆみさん、口を動かして見ると分かるんだなあ、男の人の次でした、次の方南まゆみさんですよって、そう言ったら、頷いていましたよ。

——分かったわ、つぎのかた、みなみさんっておっしゃったのね。ぼんやりして、それを聞いていると、野方なみさん、そんな風に聞こえるでしょう。

——さあ？

——心配し過ぎている場合、呼ばれただけで反射的に自分だと思ったりもするなあ。そんなこともありますよ。そこまで考えなければならぬとすると、ことですねえ。

——それに、最後の一人となると、どうぞ。と言っただけで、名前を呼ばなかった可能性もあるな。

——とにかく、前の間接フィルムと突合せて見なかったら、とんだことでしたわ。癌だと思えば、そん

な症状が出て来るんですから。この失敗はこちらでこうだと説明できたり、本人がなっとく出来たりするものではありません。

それにしても、レントゲンでは相当な大きさなのに、触診で触れないのが不思議だとは思っていたんですけど。

——結局、問題なのは、癌なのに異常なしと診断された方でしょう。

——いや、異常もないのに癌だと診断されたひとの方でしょう。病名はいつてありませんけど、入院して検査をするように、勧めてあります。

——入院をすすめられたのは癌の為だと察して、自殺してしまう確率ってのは、どのくらいのものなんです？

——もう、結果を聞きに来たんですか？

——ええ。

——とにかく、黙っているに限る。そっとしておきなさい。この病院の命取りですからね。どこの病院にだってあることだけれど、新聞種になったり、週刊誌に嗅ぎ出されでもしたら、それこそ……。そっとしておきなさい。

——でも、これからは、充分注意して下さいよ。ともかく、二人の出方をみましょう。これは無かつ。

たこととして忘れてください。いいですね、口外してはなりませんよ。責任は入り組んでいますからね。

——こうしましょう、癌なのに心配ないと診断された方には、定期的に検診する為に、外来に来るように、日時をきめて葉書を出してください。幸いなことに、癌の人には直接真実を告げないことも許されますから、何とかありますわ。それにしても、南さん、この人若いんですよ、どうしてこんな若い人が、集団検診に紛れ込んだのでしょうかね。

——自覚症状のある人なら、本人が希望すれば、断りきれないんじゃないかしら。

——健康なことから破壊力がありますよ。

——心配だわ、本当のことが分かったら、何と言われるか分かりませんもの。もしかしたら、セカンドオペニオンで、診断を受けているかもしれないし、でも、それならわたしの誤診でかたがつくでしょう。症状がひどいわけじゃないんですから、放って置けば忘れてしまうでしょう。映像がぶれていたの、精密検診に回されたものらしいから。とにかく他に洩らさないで下さい。注意して下さいね。院内の誰の耳にも入れないように。お互いに自慢になる話ではありませんもの。

——それで、南まゆみさんに、葉書を出せば宜しいんですね。

——あら、野方なみさんの方でしょう。



。院内のだれの耳にも入れないように。お互いに自慢になる話じゃありませんもの。

——あれえ、こんがらがって分からないなあ。又間違ったりしたら大変だ。先生、はっきりさせて下さいよ。まさか、名前が違っていたなんていうの迄、勘違いだったなんて、言うんじゃないでしょうねえ。

——ま、何てことをおっしゃるの。なんの認識もないんですか。あなた達の中に、真実を本人に知らねえ。

——まあ、なんてことを、おっしゃるの。何の認識もないのですか。あなたたちのなかに、真実を本人に、直ちにはっきり知らせるべきだという意見があるべきなのに、みんな誤魔化すことばかり考える。怖いわ。本人が本人の名前を間違うなんて、客観的にいって、そうある話じゃない。

——でも、これは、やはり、先生の誤診だったと言うことじゃないんですか。それを名前の間違いだっただなんて、とても信じられない。集団検診でナンバーが一つづつ、ずれていたと言う話は聞いたことがありますけど、三人ばかりの精密検診で、そんな？

——先生は、患者と全く面識は無かったんですか？

——集団検診ですもの、ある訳無いでしょう。結果の時に始めて会うんですよ。集団の扱いにもっと、工夫がいるんです。とにかく責任のなすりあいはいは止めましょう。手落ちは手落ちなんですから。

——まず、そのこんがらがったレントゲンの写真をコピーして、名前を修正して下さい。先生はカルテの方をお願いします。何処から見ても、突け込まれる隙のないように正確にやって下さい。いいですか、くれぐれも、黙っていて下さいよ。口外しないでいる内に何とかなるものです。

### 3 人質、目隠しをされて！

唇を結んでいるあなたは、みんなを摺り抜けて窓際に立ち、窓を開ける。あなたの動く音が雷鳴の轟きほどに聴こえ、結合組織のゴチック式アーチが伸びて拡がり、たわんで縮むのに合せて、わたくしは胴ゆすりをしてしまう。

彼等の話の全部をあなたは窓の外に掃き出そうとする。掃き出しても掃き出し切れない言葉屑が部屋のうちこちで、せかせかし、まどろみ、宙返りし、もう我慢できない。こんな言葉は、背中にパンチの穴を開けて、もう、外へ。……さあ……だとしても……あるんであつて……だつてば……

……えーとさあ……からったって……つまり……だめ……わけあり……まさか……窓  
の両側が双曲線を描いて狭まってきて、あなたの眼球が掃き出されてしまうみたいに飛び出している。  
そもそも何者の集まりなのか？ 嫌な臭気のしてきた話屑。夢の崩れた非現実的な若者ばかり、こん  
な者たちに忠義だてをして、ずっと同席していたなど、わたくしにはあなたが信じられないくらいだ。  
わたくしはあなたの細胞に時々鞭をふるい、赤い扉に何十もの文字を書く。高く、前へ、右へ、後へ、  
下へ、立て！

周囲に読まれても、醒めたあなたに到達するのは、優しいことではないのかもしれない。彼らは話  
をしゅうしゅう吐き出しては、吸い込んで、決して落着かない。

………奴ときたら、なんだろ………つまりな………何で………あれ、れ、もうつたらもう………。

あなたが髪に手をやって形をつくろうと、みんな一斉に笑う。脛で笑う女がいる。靴を脱いで机の  
上であぐらをかいて、膝で笑う男もいる。………その髪の毛ときたら………。笑われて、あなたは不  
意を襲われたように、自分がこの仲間だと言うことに思い当たり、彼等を改めて見詰め直す。いつも  
の顔はいつもの顔だから、よく見ないことに慣れていて、名前がなんでもあっても、顔がどれであつて  
も、あなたにとって、意味が無いに近い。あなたは腕を抱くように抱え、体が前方に撓むままにして  
いる。何故前方に体が撓むのか考える。あなたは自然の脅威を早目にキャッチした弱い獣のように素

早く、台風が始まりの風に乗って部屋を出る。引き止めることは誰にも出来ない。それはわたくしの意志なのだから……………。

建物の外壁、ずっと上を交差しているさまざまな呼び声がある。あれは部屋の回転する音、あれは酔っ払いのコーラス、ボンボンと言う音は次第に具体味をおびてくる。

……………気をつけてね……………よくなるさ……………右、右角、郵便局の前……………行って見ればわかるさ……………  
…五階建の白い建物。白いと言っても薄汚れてる……………。

ヨードルで叫んでいるのは、皆があなたに注意を与えている声だ。高い所で幾つかの窓が開いては閉じる。みんなはあなたに何処へ行けと言っているのだろう。

あなたを振り回す疲労でくたくた、わたくしが弱気になると、あなたのなか、輪郭のはつきりしない乳白色の雲の山が、ごうつと言う音と共に現われ、亀裂をつくり、引き倒し、くしゃくしゃに潰して行ってしまふ。わたくしは這いつくばって、増幅され何時までも聴こえる、その音の行方に注意を払いつづける。

——ひとりで何処へ行くんです？

——誰とも肩を組む気はないわ。

——わりあいまともね！

— ええ、いつも、とても、まとも。

— どんな約束が誰とあるの？ これからの計画は？

— きみ、番犬じみた表情をしてるね。

あなたは話しかける男達を避けて、笑っているが、笑いが過ぎて眼が霞む。現実の底に穴があつて、わたくしが、また微妙なレベルにおける住人として、あなたのなかにいて消えはしない。誰かがあなたの眼を、後ろから覆っている。

どんな事件でも、眼を見張っていてさえ、眼に入れずに通り過ぎることができたのに、たとえ、眼を注いでも、それはそれであつて、それ以上のものでもない、何の変哲もないものだった筈なのに……。

一つの声が一つの声を消していく。

— ああ、何のために……話し合ったのではなく……食い違つたと言うべきかもしれない。

— 何のために腐った私を利用できるのでしようか。

— そんな。あなた達がナイフを振るえば、ナイフの切り口だけが新鮮に見える、なんて……。

— こんなことまでして、おっそろしいことに、なるんじゃないだろうね。

— きみたち、俺と話せ！

——何の為に？

あなたは目隠しされても、鼻梁が高く目が球である為に助かっている。布の下で眼が動き、あなたの眼と頬の間に光が見え始め、徐々に巾を広げ、その明るい帯に木の根を半端に包んでいる地面と人の足元が見える。

靴たちは眼の球面を次々滑っていき、時々立ち足と遊び足をもって、ひとところに止まったりする。手で行方を探ることも厳禁されて、あなたの手は背後でしっかりと括られている。と言うことは、手足の揃いを気にしないで歩けること。

誰かが胴と足先であなたに触れてくる。跳ぶことなら出来る、キャンパスの芝生にある水溜りは小さいし、真昼の水は結構温まっているだろうけれど、足を水に浸けたくない。ふやけてしまうから、いいえ、今足だけしか見えないから。あなたの足は変な具合に跳んで、からすなえりし引きつって、痛みが、わたくしの妙にせっぱつまった思いを棚上げにする。あなたのからすは、足の筋肉や神経を勝手に組替え、ひっぺがして飛立とうとする。盛り上がった筋に、まだ開かない萎んだままの羽の穂先が動いている。

足を伸ばしていても、坐っていても、殆どの時、足は邪魔、邪魔なもの。それでもあなたの背中が小突かれると、あなたの足は歩いている。つぎつぎ踵を追って靴先がいく、靴先は何時もあ

あなたの靴先とは限らない。あなたはつぎつぎ入れ替わる靴先。

階段にきている。目隠しが弛んでいても、見えるのは半段か一段半くらい、どれが最後の段なのか分からないのに、追い立てられるように駆け降りてよろける。

サンダルが蹴散らされる。こうやっていると、目隠しされてからの記憶が混乱し始めて、ここが2階だとも、地下室だとも分からなくなる。一室に押し込められている？

こんなところに、ささくれて青っぽく見える畳と素足の裏があつて、出口から遠い方へ遠い方へと逃げ込んでいく。

スカートのプリーツ、貝の中から覗いている足、当惑気でも、白いふくらはぎなんて、自分の持ち切れないものを持つて。

足先なんて、わたくしから余りに遠いので、何時だって見定められなかったのに……。眼を畳すれすれに置いて、誰のものか分らない足裏を見る。丸い五本の指先、白い薄皮がはげて、どの薄皮もみんな雲母のような皮膚の層を持ち、やっぱり指紋を持っている。恐らくその人物はあなたの足裏を見、あなたはその人物の足裏を見ている。あなたは足を見て手の無くなった想いよりも、静かに太っていく足が無くなった想いになる。

わたくしは切り離された一对の足の方へ、魔法の杖について軽々と、ほろ酔いのように身も軽く。

この足は膝が赤い。坂を降りていく、一足毎に大きく早く、あり余る大股になって、とんでもなく大股になって、わたくしが裂けて、細身の二人になるほどになって。あれほどの小気味いい走り方が出たのに……、あの頃は……、何時も。

——ああ、さつき迄のことね。ゆるんできた目隠しの下から見えてくる、膝を互い違いにして、斜めに倒している誰かの足は、指先だけをピンクにして綺麗。こんな時顔よりも足の方が、ずっと表情を保持しているなんて。

生き残りの蚊に刺繡されるままに、蚊があなたの足に水玉模様をつくり続け、もうすぐ、あなたに、身をよじってもよじりきれない痒みが来るだろう。

——眼の奥がむずむずするから、目隠しの下でも眼を開けてしまうのね。

——見えても見えなくとも、目の前がちかちかするから、眼を開けてしまうのよ。

——彼らは何をしている？

——心配するなって、一本指で笑うことだって出来るよ。朗らかに！

——いますぐその足とお別れしなければならなくなる。もっと、軽い足音のない足と変るのさ。

足たちが一斉に膝を立てて身構える。この部屋に数人の女と、三人の男が立っているのが音で分かる。



——音というものは光よりずっと遅れますからね。

——何事が起つてもことの後だわ。

芝生の上を走り回った足裏、わたくしが一步前に出る、彼は三步退いてしまふ。何度でも。彼はわたくしを見ることを止めない。口に出す言葉を一つずつ、ゆっくり用意するように、口の端を少しずつ上げる。わたくしは少し近づこうとするだけなのに、彼は少年のように必ず後退するのだ。

——独りつきりでいるのが、そんなに楽しいと言うの？

わたくしは長い間、彼の声に耳を澄ましていて、寂しさが林間の空地にいるように来る。彼の何も物語らない声だけを信じて来て、今あなたの中にこうしている。息を潜め、やはり足を見ている。私たちは階段を駆け降りて、この場所で生涯を終えたのかもしれない。あなたは足以外を、力なく侵され、湿った陰のようにいる、これが本物の危険なのだ。

——ここはどこなの？

——さあ、何処とも……………。

——行きたいところに行き着くことなど、極めて滑稽で無謀なことだよ。

この部屋の外をさー、さーつと、動き回っている者たち。産毛で覆われたあなたの耳に、首を締められる動物の叫びが来る、目隠しされた黒インクみたいな世界で、もうすぐあなたは目隠し一本にな

つてしまふ。

おそろくみんなは喉仏をグレープフルーツ大に膨らませ、声を蓄えているだろう。大声でなくとも、声と言うものは空中で傍若無人にぐんぐん拡がるものだった。嵐の塊が、箒星のような尾を引いて行ったと、わたくしは想う。あなたは目隠しの下で眼を閉じていて、どうやって眼を開けるものだったか忘れてしまい、眼を開けられない。わたくしは瞼を持たぬことに慣れていたから、あなたに影響しているのかも知れない。瞼の下で眼球がぐるりくると動いている。眠ることだ、こんな時に、わたくしは何故山のように大きい母親の腹を見るのだろう。

あなたに頭を貫いて出て行った記憶があり、頭の後ろに穴が開いている。考えは自分の中で生まれて、自分の中に消えていくと思えるけれども、あなたは他人の唾のしぶきで消されるのだと思つてゐる。

もう、あなた全体がわたくしでなく彼らの唾で溶かされている。どうやって素足で空を飛ぶのか、言葉の周りで睫毛がまぶしい冠毛のようだ。眼を閉じても眼の中で凶暴な照明弾が爆発しつづけ、どうしたらいいか分からないから、眼を開けるしかなく、彼等の唾を受け入れるしかない。

あと何分、何時間、ここにいいのか、予測の出来ない時間を彼らに握られている。彼らによる時間の配分を守り、それに服従しなければならぬと言う観念から抜け出す為に、頭を抱えると、後ろに

束ねたまま手に食い込む紐にどきんとする。

此処にいるのは、十人だとも、二十人だとも言い切れない。目隠しをしていると、待つことの疲労までが、目隠しの布のように来て、振り払うと、何枚も何枚も下に落ちていく。

ある時がくれば、足を上に、顔を下にして休息を取っていられるところに行き着くだろう。あなたは唯一の分別のように足ばかり見ている。自分の意志や能力を飛び越え、アクロバットを演じる夢を見たことがあったが、わたくしは今、目隠しされているのに、誰もが眼を上げてあなたを見たとわかる。

——残酷というものが、親切と如何に同類のものであるかということさ！

——如何いうことになるか、楽しむことにしようや、此処一番、胆を据えて！

お互いに顔を合わせることもないが、肩や手は時々触れ合い、肘で肘を突き合うようにいて、目隠しの隙で足だけが数を殖やしつづけ、あなたも彼であるみたいの後退していき、ついには消えてしまう。もう包まれている眼球に自然な動きは無く、大きなものへの想いと、小さなものへの想いが、まるで一つのことであるかのように、遠く広くて、わたくしにさえ届かなくなる。真直ぐなもの、不動のもの、よろめいているもの、みんな変幻して掴めない。その奥の奥、本当の奥、行き着けないところに、人と人が話し合うよりもずっと陽気に話し合っている声が聴こえる。

出口のところ、靴が一足、踵を上げ、リズムをとって横に動く。

——うんうん、うまい具合に、明日って奴は、アンテナをおっ立てて狩り出されてしまう。気をつけやがれ！

突然、彼らが、わっ！ と大声をあげる。あなたは目隠しを取られて、眼が痛い。手は自由を取り戻し、喰い込んでいた紐の痕が紫色のブレスレッドのようだ。眼にからまった曇りと輝きを追い払う為に手でこする、擦る度に涙腺のなか涙が音を立てて左右する指の隙間、男の靴が入り乱れて通り過ぎ、冷たい透明な明るさがグサリと来る。

——先ずは、目覚めの揺さぶりというところか？

見慣れた足たちは上半身を継ぎ足し、腕をぶら下げ、体をよじって頭を載せる。

——あんたは生きてるよ！

——生きてるなんて、始めてえ！ほんとよ！

あなたが視線をあげると、括られてもいないのに、悪い幼虫みたいな数人の男女が、互いに相手を窺って身構えている。

——どうしたんですか？ 彼らは何処です？

——口を嚙んで眼をつむっていないさい。人質の一部が救急車で行った、八号館に殴り込みがあった。

出よう！ いいですか、ドアを開けますよ！

それは説明を超えた叫びになって、あなたの二つの耳を突き抜ける。耳の中、壊れかけている集音器から聞こえてくるような、血を呑み込む音、耳の内張りが無くなっているようだ。

——危ない、そっちに行くんじゃない！ あなたとわたくしの綱引き。命に別条さえなければ、残っているあなたに関する散逸した記憶を集めて、あなたの一生を組み立て替えることが出来る。積み木遊びのように、蛇も作れるし女神も作れる。わたくしの目的の為、あなたを死守するためには、何でもする。

あなたは握った拳を唇に押し付け、叫びたいのを押しとどめ、耳を長く伸ばすような疑いの鎖になって、疑問符の曲がりめに、次々疑問符を掛けつづける。

変装をして登場してくる掃除婦は、駅ビルの床をまるで夢の中で掃いているように、スローモーションにふわふわと掃いている。掃く度にほこりが舞い上がり、女はガラスの向こうで色白になる。

歩いて行く歩道から車道に移る境目は何年……十年経っても、やはり、ぎくしゃくした凸凹があつて、あなたの靴が石畳に引つ掛かり足踏みをしている。

背骨を湾曲して自転車に乗っていく、あなたの体のいたるところが伸縮している。何処にも暗がりはない。

——思い違いをしないで、わたしが愛しているなどと。それが怖くて、それが怖くて、隠れているのに。わたくしは、女王！ 目覚めるのは明日！ 歌うあなたの左右を、分かれる風が薄いベールになって並木をかすめて行く。目貫通りに入ると、あなたの体の伸縮が恣意的になり速度がゆるみ、やがて自転車を降りてデパートに入って行く。入り口に近いショーケースの上に両手を置き、顔を傾け、じっと動かない。あなたは取りとめの無い心が、こんな処に連れてきたのだと思う。

風を切つて来たのに、ブラウスは両腕の下で汗の大きな円をつくって濡れている。冷房のきいた空気が、濡れている両腕の下、汗の滲みにひたひた寄せ、そこだけがあなたの触れている現実。

ショーケースの中の品物は、どれも動くことも無く、ただ白い光を反射させる。土色の老女が通り過ぎる。

あなたはショーケースの上に置いた両腕を下げ、冷たい汗の円を両腕の下で押し潰して、侘しくなる。その瞬間、何故か、わたくしは狂ってしまいそうなほどの欲求に突き動かされ、あなたは買うべき物に包まれてしまう。

品物はみんな、あなたと同じはしつっこい脈を打ち、あなたの胸に向かって飛びついてくる。あなたは口の中、もがくように、——これを、あれを、と言いい、買います、下さい。という。買うことがこんなに楽しく、自然なことであるとは？ わたくしが買いいものに、飢えていたのだ。最後の買物をしてから十年になる。あなたはハート柄の包の上から、品物を叩いてみる。次の品物が包装されている間、棚を見上げて横歩きをして行く。突然、あなたは肌の浅黒い女や、白い女や、赤や黄色の髪の子に取り囲まれてしまう。膨れた唇、鼻の頭をつんと上げ、指は開いて動かさない。

あなたは試着室のカーテンを閉じ、汗を滲ませている柔らかいブラウスを、大きななめくじを払い除けるように下に落とし、白いワンピースを試着する。

ワンピースとスリッパを透かして、ハンカチ位の、あなたのパンティが透けて見える。

緑色のブラウスをつけると、襟ぐりから鎖骨がグリーンサラダにそえてある、木製のフォークのよ

うに飛び出している。次にベージュのワンピースをつける、吐息が洩れ、安らぎがやってくる。

ずっと遠くまでいき、今、戻ってきたように、あなたは安らぎ、さつきまで、あなたの自我の頂上にいたのは、あなたではなかったと思う。

体の重心が滑り、片足で二三歩、歩き、弓なりになって、緑色のブラウスをつけ、もう脱ぐ気はない。

カーテンを開け、店員があなたの襟から値札を取る。一緒に試着室から出て、静かに甘く、擦るような感じで、あなたに寄っているものをあなたは感じる。それは項の辺りで輝いているようだ。あなたは顔を上げて、それを受ける。受けて心臓を掻き回され、閉じ込められていた喉から溢れ出る声で、  
又も買い込んでしまう。

あなたの剥いだ裸体のマヌカン人形が、人形である証拠の腕の継ぎ目を見せて立っている。——これも、あれも下さい。そうです、みんな。あなたはこうするほか、もう、どんなことをしたら楽しいのか、落着くのか分らない。

殻から始めて明るい広がりの中に飛び出した、蝶のしなやかさで、あなたはエメラルド色の帽子で人々を振り返らせる。あなたが手で触れてあげなければ、ずるずる忘却のなかに陥ち込んで、そのまま醒めることの無い品々を、眼を見張りながら、呼び起こしていく。あなたは肩から指先までぐん



ぐん伸ばして、品物を手元に移動させる。

この買い物の驚きから、あなたは決して醒めることは無いと思う。渴望とか、復讐？ クレジットカードをつかって、無一文に近くなつた若い娘にすぎないあなたは、次第に買い物の活気から遠のき、貧しさの自覚から来る混乱に陥つてしまう。

——CD一枚で良かったのに……。大きな扇のように開いている階段を数段昇つたところに、六個の紙袋を並べて、あなたは彼を待っている。彼は来ない。電話をし直すが、留守電に繋がるばかり。大抵のものは手招きでは来ない、あなたが直接掴まなければ。

あなたは手招きする手をそのまま使つて、エメラルド色の帽子を被り直してみる。

階段を昇ってくる女は、長いスカートの裾を持ち上げ、スカートを抱いて、真新しいブーツを見せていく。ショーウインドーには人間の手足が、馬の肢のメカニズムで動いている。

——せめて、肢の上に揺れる乳房が欲しいなあ。

——身軽だろうな、本当の意味で駆けているんだ。何も乗っていないところがいいのさ。こいつは、駆けてる！ 駆けてる！

長い手足を体の左右で揺すつて、若い男たちが通り過ぎる。項垂れた少女が、婦人警官に背をこずかれて、のろのろ歩いていく。

あなたはパステルカラーを吹きつけたような店内を、透かし見ながら、彼が現れるのを待っている。わたくしは好奇心から、あなたより明るく眼を見開く。薄紙の中の透かし模様のようにあなたの彼が立っている。

彼の足元で何かが動く。弾んで飛びつく。見ると、植木鉢の中央に小さな凹みを一つ残して、サボテンは球の下に白い糸を丸くからめ、裏を無力に晒して転がっている。死んでいるような、生きていくような妙な顔で、動物みたいに跳ねて見せるのだから、サボテンは曲者。荷物が多くてよろけたと見せて、彼は故意にサボテンの鉢を跨いで、砂漠に住み慣れた動物のように針の一杯生えたサボテンを、ズボンの裾に釣り上げていく。

——欲しい物は、この要領で獲得するんだ！

スカートの裾に飛び移ったサボテンのとげ。あなたの足に青いスパーク。0（ゼロ）を0（オー）1（イチ）を1（アイ）とあなたが見間違えるだけで、解答は一切おじゃんではなかったか、棘が棘か、丸いのはサボテンか。エラーはスパークに持上げられる。わたくしは緊張し、あなたの周囲、身廻り品、身体、その内部、隅々まで気を配って、ぬかりなく動くつもりになる。機械のように無用な嫌悪や同情や愛を捨てる。

——そそっかしかったんです。見栄っ張りです。買ったのでも、ひやかしたのでもない、エラーよ。経済

的に見ても大エラーだわ。

同じ一心不乱の貪欲でも風向きが正反対に変わったように、あなたは彼の力を借りて、わたくしを無同じ一心不乱の貪欲でも、わたくしを無視し、買い込んだものの大部分を、返品して回る。それでも返品しきれない品物が半分は残っている。

あなたの部屋のなかで軟らかいものが崩れている。体の中かも知れない、人体というものはくつつきが悪いもので出来ているのだ。その音は、まだ殺人の音に育つとも、育たないとも言い切れない発芽というところ。紛れ込んでいるわたくしは、あなたと同じ安堵に浸る能力を持っている。

何故、こんなに買い物をしてしまったか、あなたは話さない。落着いてみればわたくしも知らない。毛布の下のあなたと、遠い誰かの腕との間を、風が通り抜ける、すうすうと、特急のように通っているのをあなたは感じている。

人っ子一人いなくなると聞こえてきたり、人が死んだとき急に聞こえてきたりする、あの勢いよく流れ出す時間の音、そんな音が高まっては低くなる。

今、わたくしはさやのなか、豆のように封じ込められている。しかしそのさやが二枚に開いて、豆がころころ転がり出し、芽を出し、根を張ろうとしている。あなたの行動の源はそれなのだと思う。

あなたは頭に爆弾が落ちたように眠気に直撃される。身体が木っ端微塵に砕かれそうに何十もの夢を見つづける。

——わたくしはね、寄宿舎にいたころ、雨の日はベッドに寝て傘をさしていたのよ。だから体全部で眠るわけにはいかなかったの。右手は起きていて雨漏りを傘ではじいていて、右手から心臓に血液が戻ってしびれるころ、左手は目覚めて交替したの。その間、わたくしは夢を見ていたのよ。一晩で二十個から三十個の夢をみたわ、夜は忙しかったの。

夢を見つづけるのが周囲なのか、わたくし自身なのか決めかねている。確固たる形をなさずに、絶えずひくひく揺れているものはなんであるのか。薄膜の向こうは色なしに見えるが、見えるのだから、やはり色があり、赤とも、黄とも、青とも、銀とも、白ともいえる色合いを持つ。何となしにわたくしの手は浮き上がっている毛布の下に滑っていく。しかし、どんな身体も入っていない、空っぽの自分を探る空しさがぐっとくる。目ともいえないところで見ていると、涙ともいえないものが周囲に融けていく。もしかしたら、わたくしはひどい弱視の無色の眼球一つ、または細菌やウイルス。それらは時々きらめき、きらめきの上に芥子粒みたいなそばかすを載せる。拡散しようとする意志を集中しようとする、細部は更に小さな細部に、または雄大な細部に早変わりし、そのため総てが視野からはみ出してしまふ。こうしていても伝わって来る膨らみや、温みや鼓動や、にじみや、まだらが、現

実の量として関知できるが、息を詰めると、それはただ伸びたり縮んだりする平面、べったり硬質な面に気孔を押さえ込まれて苦しくなる。わたくしは必死で固い頭や、長いともいいかねる手足や、半球の乳房を探るが、手が果して手であるかどうか、手であると思える部分を意識の続く限り引き延ばしていく。

——心配です、治療を必要としているのですか、入院をすれば病気でなくとも、殺して貰いたくなるに決まっています。

——絶望することはありませんよ。保証します、さあ、まかしておきなさい。

わたくしは、ぼうぼうという音を、耳から体の中一杯に詰め込み、音が体の中でむれていくのを感じ悪く聞いている。

——聞こえましたか？ 何も？ あなたに聞こえないと云うことは、ここにない面白いことを考えていらしたのではありませんか。

青い服の男は言葉を畳み込み、攻め込んで、わたくしに手術を承諾させようとしている。

——先生がどんな話し方をなさろうと、かまいませんけど、もう少し何とか、この次におっしゃる時の為に、残しておく言葉や、犠牲にする言葉があつて、よろしいんじゃないやありませんか？

——幸い一度だけ、言わなければならぬことは、まだ言っていますよ。

男は勿体ぶりながら、犠牲者を選択する眼でわたくしをたつぷり眺め終わる。

あなたは風に包まれ、白い建物に近づき、わたくしはあなたに包まれ近づく危険を阻止する為に集中するが、集中するほどのエネルギーはない。あなたの奥に光る小さな痣一つ捕らえることさえできない。

何処かで誰かが大きな寝返りをし、がんと揺さぶられる。今日でもない、明日でもない、今まで勘定に入らなかった日にいるのだとあなたは思う。今までは不快な好ましくないものを追い払う為にだけあった孤独が、うきうきとした意味を持って訪れている。

——そうよ、わたしは気がついていたわ。わたしを取り巻くものが、総て形を変えてしまう時が来るに違いないって！ あなたは子供ののように手を叩く。

カーテンの裾がベッドの上にあがり、あなたはカーテンの外側に寝ている。

この部屋から見る明け方の空は、三つの気層に分かれている。紫色の気層のなか、横段に柵引く筋雲があって、苺の実そっくりの陽が、薄紅色の道を真上に開きながら、梯子のぼりをすると、次には、その上の紺色の気層に、黄色い満月になったもう一つの陽が昇り、灰色の気層に、むいたミカンの皮のような、オレンジ色に白い裂け目をみせて、三つ目の陽が昇る。一日の始まりに三つの陽の出を許して、あなたはベッドから身を起して日の出を見ている。ともしたら、あなたは今まで日の出を見る

ほど早起きしたことは、なかったのではないか……。

——まだ海は海らしくないわ。午後になると、海らしい色になって船が沢山浮いてくるの。

あなたは一人なのに、何故声を出して話すのだろう。わたくしが十年振りに本当の海を見た嬉しさを話すとしても、あなたの口を借りなければならぬ。

わたくしは、黙って白い海を見ている。

5

われわれの人権は、どうなっている？

彼が歩いて行くと、ズボンの裾の辺りで動いていくものがある。それは奇妙にぎくしゃくした動きで、床を転がったり這ったりしていく、まぎれもない人間達だ。目的地は定まっているらしく、みんな同じ方向へ、生理現象だから、急を要するのだというように、懸命に。反対側から転がってくる人間達もあって、Q型やW型やZ型で緩慢に転がって来るから、彼の土足の靴に顔を擦り付けて、わめ

きたてる。

——おい、おれの、おれたちの人権、は、どうなっている！ おれたちは、床を舐めて転って、いるのに、何故、きみは、同じ床を、土足で歩くんだ！

——どう、どういうことだ、説明してもらいたい。お、俺たちの人権について、少しは考えてみたことがあるのか！

——ズボンの裾の輪を、その底から見上げて、何になる。施設の人手不足を、補って、おれたちは、生きるために、必死に這ったり、転がったりし続けているんだ。おれたちの転がる同じ床を、おまえ、たちは土足で歩いて平気、だ。その上、おれたちの涎や汚物でも付着していかないと、怖れて、いる。おれ、たちは、おまえ達の足で、ふりまく汚染を気にしているんだ。人間なら、恥じて見せろ……

恥じるなら、ここを舐めろ、這って歩け！

——僕に許せないのは、偉そうな見学者が来る度に、この廊下に敷かれる、カーペットのことだ。あれがどんなに僕らを侮辱したか、分かっているのか？ 汚いのは重症で障害のある僕たち、ではなく、お前達ではないか、カーペットのいるのは、僕たちで、お前たちではない。

カマキリ型の手を跳ね飛ばすように差出し、言葉も身体も同時に引きつるから、どちらも不明瞭なものになる。外来の彼は驚愕して動けないでいる。



——すみません、いや、なんとも、僕としても、竹馬のような形で歩きたくはありませんよ。歩き方は色々ある、こうやって二本足で立っているのも心もとないものでして、その……。そんな風に転がる位なら、車椅子の方が楽でしょう。どうして使わないんです？

——聞いたか、聞いたか！ この男は灰色のワニになる、竹馬を止めてワニになる。この男は転がれない。車椅子！ あんなものは昔の夢だ。人手のあった昔のこと。人手が無くて事故ばかり起して、衝突、ばかりして、死人も出したんだ。今は誰の手も借りず、最も安全に、自分を運転する為に、車椅子は片づけて、ほら、何にもない。研究し合っているんだよ。

——あなた達、まるで家の中で野宿でもしているようじゃありませんか。どっちに行けば、ここの受付があるんですか？ 職員は何処にいるんですか？

——いなくても、同じですよ、いてもいないと同じですよ、用があるなら、僕が聞いてあげましょう。僕の血に、レモンの輪切りを入れて、すっきりしようなんて、いう、了見さえ持たなければ……。

——海の投身自殺を、見たか！ 見たか、見たか、見たか！

——本当は、おれがいま、海を殺した、海は血を流して、いるんだ。見たか。

——知っていますか、息子を殺して、姿を隠している老人のことを……。あれは、俺が殺した。その気になれば、おれは体を自転して、どこまでも行ける。うすうす気付いていたでしょう、おれが、

おやじを、殺したんだ！

——きみは誰？ きみは知っていますか？ おれたちが、肉親に殺されても、殺した方が無罪になるってことを！ おれが、父母を、殺したら、おれが無罪であるかどうか、きみは、知っていますか。

おれたちは試そうとしている、試してもいる。何故、息子を殺した殺人者である父親に対して、大丈夫だから出ておいでと呼びかけているんです？

——その気持はわかります、大変だったんでしょう、死なないで、出ていらっしやい。そう言っているんでしょう。無罪になったのは、情状を酌量した上のことで……。

——それは、僕はどうなんだ。大変ではなかったのか？ 戦ってこなかったというのか？

——そんなことは、もう、どうでもいいんだ。ただ一つやってほしい、ことがある。おれを、父親殺しとして、警察に突き出すことをして下さい。われわれの、人権の、問題なんです。これっぽっちも、猶予できない！ おれの存在、すれすれの、問題なんだ。

——失礼ですが、あなたはこの施設から一人で出て行ける筈が無い、何故、殺人が出来たと言うのです。出来ないことをしたい気持はあるでしょうが、しない殺人をしたと言うのは、悪趣味過ぎはしないか……。

——他殺を思わせる所見が、無かったにしても、後で露見する真実も、あるのでしょうか。あなたが、

僕に、疑惑を向けさせて、くれさえすれば、僕に、アリバイがないことを、はつきりさせることが、出来るんだ。

——僕は病院に、バイトで、睡眠促進器具の売り込みに来たのであって、隣り合わせだから入り口を間違えたらしい。残念だが、そんなことはしてられません。

——………ということは、僕が、殺される資格はあっても、殺す、能力のないやつだ、そう言っているんだ！ おい、こいつはそう言っているぞ！

——俺たちにそれを実行する能力が無いと言うのなら、きみを殺してもかまわない、殺って見せようか！

——何用があつてここに来たとしても、あなた達の願望に対する共感が、この胸の中をよぎらないでもありませんよ。しかし、頼まれたからって、僕は他人の自由にはならない。

したいようにする。うまくやる方法があるかどうか、少しは考えてみても構いませんがね。………な、何をするんだ！ ひどいなあ！ 始めて職員が来たと思つたら、僕の口に有無を言わせず、煙草を突っ込んで行くなんて。僕がみんなと同じように、寝て話し込んでいたにしても………。これはなんだ。皆の口にも煙草が入っているじゃないか。火がついているのか？ ああ、ついている、危ないなあ。動くたびに灰が下に落ちるじゃないか、何をしているんだ。もうそこが煙り始めている。

——あなたはどなたです、何でこんな処にいるんです。体が不自由だからといって、煙草を吸う楽しみまでも、奪うわけにはいきませんよ。この人達にとっては、唯一の楽しみなんですから。自由は護られなければなりませんよ。

——丸焼けの自由か！

——文句があるなら、あなたそばにいて、のみ終わるまで見て上げたら如何です。傍観しているのと、渦中にいるのでは、月とスッポンほどの違いがあるんですよ。

——しかし、もつと親身になって……。煙草が体に悪いことくらい……………。

——あなた、それなら此処で働いて！

——僕はアルバイトで、セールスに来たのであって、何のかわりも責任も無い者ですよ。そんなこと出来ませんよ。

——出来もしないのに、出すぎた口はきかないで下さい。

——かわりが無いと言ったぞ！ 何も出来ないと言った。きみが、われわれの言う通りに、しなければ、われわれを、きみは、人間でないと宣言したことになる。われわれが、人間で無いなら、何をしても無罪だ。われわれを縛る法律が、ないことになる。だから、きみは殺される。ここで、今！——冗談でしょう、僕がきみたちに。そんな……………。

古びたボールペンは、もうどんな線を描きつづけても、インクがでなくて、無色の鳥の巣が大きくなるばかり。そのうち、ふと、気まぐれに、一センチのゆすり蚊一匹程の線が黒く描かれる。

空調設備故障の風に、ひれを洗うように、あなたは冷たくなっている。

——行方をくらししていた猿みたいに、あなたは現れたわね。遅刻です！ アルバイトだから、あなたが、あなたらしいと言うこと？ あなた、何に甘えていらっしやるのよ。

——黙って！ 今、素敵な知恵が浮ぶ筈なんだから……。

あなたは髪の中を掻きまわす、頭皮が荒れているのが指に分かっている。線を書き、何万本の線をレイアウトしてみても、前生が紙の上に穴を開けはしない。

——あなたは初めてなんでしよう。この催眠促進器具は、経済産業省から、二年前に製造許可はあつたけど、厚生労働省からの認可はまだない。だから、デパートや専門店等では普通の方法で販売でき

ないのよ。売るのが大変！　こんなものに興味を示しそうな人々を何人か集めては、説明しながら頒布するんですって。口先三寸で買わせなくちゃならないんだわ。みんなそれで、話術を研究しているところなのよ。分かった？　あなたは、名簿作りから始めたらしい。悩み多くて不眠で困っている、そんな人の名前と住所を、靈感で探り当てて記入することね。

あなたのボールペンは滑り、電話帳から何人かの人名を書き写す。電話帳などとは別に、自然に、あなたの指先に取りついてくる名前がある。あなたの名前とも違う、今まで書いたこともない筈の名？　——やりすぎですよ、人間が五千年もたったセコイアよりも高いビルを作つて良いものでしょうか？　エベレストより高いところを飛び、チャレンジャー海淵よりも低い穴を掘つてよいものでしょうか？　——ほや、ほや、みんなは声を揃える。

——人間は小さいのに、こんな微小なのに……、それを誤魔化すために、五十階や百階建の靴を穿いています。本当は、ほら、小石のかけらを一つ、靴の中に入れ、足の裏をたわめて歩いていて、昔の少年を忘れてはならないのです。人間は片隅を小さくほじくる資格しかないのに、それを忘れていくんですよ。日光よりも明るい光線が発明されてしまったのでしょうか。やり過ぎなんですよ。電子レンズの御蔭をこうむつて、眼の中に遙か彼方の何ものかを、呼び寄せようなんて。いいでしょう、もうすぐ目玉の百倍も大きな眼鏡を掛けて歩いて行かなければならなくなるでしょう！　みんなが立ち上がる。

——これでは、やりすぎが、更に倍化していくだけです。人間とは何者なのか、小人なんです。人間は人間を小人にする為に働いてきたんですよ。どんなに地上でジャンプして見ても、もう、絶対にビルの屋根に手は届かない。あのビルが一階一階高くなる度に、人間は段階的に縮小するのです。やがて、弱々しい小さな声を出して避難していくでしょう。

何処へ？ 煙をまとって歩いているような想いはありませんか。誰でも、そんな想いでいます。人間が作った巨大なものに、一つまみの埃のように、煽られていくのです。

小人である人間も、象が死場を求めるように。旅に出るべきではないでしょうか。こんな建造物の底で死ぬのではなく、もっと、遠くでことを終わらせるのです。——ホヤ・ホヤ。みんなの声が小さくなる。

——旅に出ましょう。どうせ、人間が作った物ほどの、黒い力強い塊には、なれっこないのでから……。南の島々はもうすぐ海に沈みます。行きましょう、一緒に！

両手を顎杖にして唇が鼻につくほどに、あなたは顎を押し上げている。彼は影で彫られて青く潰れ、ついには、消しゴムの消し屑ほどに見えてしまう。彼は変に雄弁過ぎたことで肩身を狭くしているのだ。きみ！ やり直し、オーバーだよ！ 行方不明の旅の宣伝としか思えないじゃないか。

とても、睡眠促進器の売込みとは思えないな。それじゃ、とても稼げないよ。

——眠りは手前一人のもので、人間全体などと大上段に構える必要があるのかどうか。ま、もう一度、

考え直して見ることだな。もっと、こう、明るく、ふんわりといけ！

——はい、人類などという言葉を聞くと、死んでしまった人達が生き返って、僕達と入れ替わってしまふような、そんな気がするんです。どうも、アフリカ旅行の売り込みをした時の癖が残っているみたいですよ。

わたくしはあなたの中で、臆病から抜け出そうとしている。彼の宣伝が気に入っているというか、共感している。音楽は干物、響きは傷口、空を飛ぶ梅干し、血の混じった電子粥、その連続から抜け出すこと、首に帆を張り、脊柱を押し立てる。まごまごしてはいられない、行為に移さなければ……  
∴。渴望を充実感に変える。あなたの手は誰の手でもないように空間に置かれていて、紙の上まで沈む。——亜山ソラ。

あなたは書き込んでいる。わたくしが不眠症？ わたくしは不運がわが身に起ったようにはつとずる。わたくしにとつて、眠りとはどんなものだったか、思いだそうとする。思い出さなければならぬものなのか、どうか？ 眠りとは、なにか埃の小さいうぶ毛を絡ませたり、ほどこいたりしながら、大きい一塊の綿になる……。分からなくなる、どんな寝方で眠るのか。あなたが眠っていて、わたくしが目覚めていることはある。しかし、わたくしが眠っていて、あなたが目覚めていることがあるのか？ ……わたくしに油断はあった、油断が眠り？ 暖かい気持のいい重みを感じる、あれが眠



り？ 長い間不眠で忙しく休みが無かった。わたくしは不眠症？

—— 盛場の人々なら派手な色彩によって、光によって、見えないガスのようなものによって、音によって、物体の質量によって、集まったり散ったりするのだろうけど……、この場合はどうやって、人を集めるかが問題だろうな。果して集まるのかどうか？ 個別訪問は御免だよ。どう、その仕事は、きみに向いているかなあ！

彼はあなたのボールペンの先を、覗き込んでいる。

あなたは首を傾げながら、同じ紙にもう一度、別の住所の亜山ソラを書き込んでいる。わたくしは、あなたに働きかけながら、ソラの患部から、つまみ出された想いになる。

—— わたしは、さまざまな、夜明けを見るわ。今日、昨日、一昨日の朝、空が、ねむの花山盛りの夜明け。S L型の雲を従えた、勇ましい夜明け。灼熱のフェラメントの夜明け、朱色の糸鋸が地平線に横たわるギザギザの夜明け。太陽が柔らかいクリーム色のかさの中央にある乳房の夜明け。

—— 日没のことでしよう！ あなたは朝寝坊なくせに！

—— ネオンの色ではないかな？

—— 違います、本物の朝、人のまだ目覚めない朝のことです。

—— 田舎のことでしょう。

——昔のことね。でなかったら、虚構の朝でしょう。変り映えのしない朝が、時々日付けを間違えながら、やって来るばかりだったのに。

あなたの一日は日の出に於いてもう、他人に軽く否定されてしまう。あなたは少しがっかりする。この隙に、わたくしはもう少し自分のやりかたで動いて見ようとしますが、あなたの懐具合が、わたくしの組んだ見かけ倒しのプログラムを跳ね除けてしまう。珍しいところに行く予定は無いが、時間を研究させて欲しい。あなたは細い金属の手すりに、薦見たいに腕を伸ばして、滑らせながら階段を駆け下りて行き、昼とびったり一体となって広場を横切る。

草野球のキャッチャーは顔の前にミットを構えながら、真横に腕を伸ばしてボールを取る。その後ろ、ひらりひらりと球除けをひらめかせるアンパイヤーは、時々ユニホームで球を拭う。背番号マイナス1のピッチャーは、塁をリードするランナーの横歩きを見てから振り向くが、眼の下に陽除けの眉を描いていて眼を何個にも見せて顔を振る。坐っても位置を変えてもアンパイヤーより大きく見えるキャッチャーは、誰にも何も言わせない。

打って空高く飛んでいくボール。打ち飛ばす快感、投げ飛ばす快感、同時に受け止める快感。その弾みと手触り。あなたは手を広げる、微風が胸に飛び込んでくる。

あなたは切符を買って改札から入り、一番線の電車を待っている。入ってくるのは反対行きの電車

だ。向かい側、二番線に回る為に歩き出すと、あなたと同じ方向に歩く人々もいて、迷う程のないところだから、みんなと同じ方向に歩き、気づくと切符を改札に吸い取られて地下街を歩いている。あなたは齒嚙みをし、再び自動販売機にコインを入れ、腹を立て、行き先の表示を見ようとししないで、ホームに立ち尽くしている。電車とプラットホームの隙に、白い光が地下鉄のように流れている。だが、そこは何故か又一番線だから、やむなく移動しなければならぬ。途中、又も、あなたがあなた自身の行く方向に行くのだと言う、いとも簡単な意識を外し、情けなくなり、他の人々と一緒に流れ、手にしっかりと握っていた筈の切符を手離して駅の外に出ている。こんなことをしては、永久にぐるぐる回りだ。見上げる巨艦型の石の駅は弾き出す為の固い秩序で固められているようだ。かろうじて、最低料金の切符を手に入れ、最後の切符をもう、むざむざ改札などに引き渡すものかと、汗ばむほどに握ったまま、不審顔の駅員に呼び止められ、ようやく電車に乗っている。気づくと電車はやっぱり反対方向に走っている。苦い疑いの時間だ、わたくしは天秤に乗って重くなり、あなたの体を何度でも、ぴんと、跳ね上げてしまふ。

いわれもない不可解な不幸。抜け目のない人間として、虚構から逃れ出なければならぬ若いあなたは、電車の隅にすっぽりはまり込んだ形で眠り、手を寶貝の形に合わせているが、手の中は空っぽで、確実に切符を取り落としている。目の前、揺れをもともせず、吊革にも掴まらずに老婆が一人

立っていて、よろめきもしない。あなたの手の中には何も無い。……切符一枚をしつかり握って、大切だと言うよりは、一種の催眠術にかかって、金縛りにあつていたと言うように、あんな小さな持ち物に縋って……。あなた自身が切符の持物であることを主張して、ようやくなんとか生きていくにしても……。

手離して、手ぶらで、あなたは快感を味わっている。この開放感。爆弾を両腕に抱えこんだパイロットが、それを振り落とす時の快感というような、非人道的な快感とは違う、誰にも迷惑を与えない。あなたは急遽電車から降りている。故障中の貼り紙のある改札の上、零れ落ちるほどの切符が積もりながら崩れて、今にも桃色の切符が街を紙吹雪になって舞っていきそうだ。

助かっている。握っていた切符がどうなったか、あなたはもう考えない。探す気がないということが大きな自由だ。

空中では幾らでもガス塊が飛んでいて引火し、燃えるような、ボオボオツボボツ、と言う音。陽の位置はわからない。歩道に乗り上げた車が捨てられている、大きな両眼を白い傷で埋め尽くして。負傷者みたい、あなたはこれを捨てた人の快さを思う、命まで捨てたのかも知れない。あなたは足も手も顔も振り落とし、肌を剥ぎ、わたくしだけになって走る。手の中に握っていないことが、手がないことが、何と伸び伸び出来るのだろう。胴も顔も振り落して、あなたにとっては、もう、わたくしひと

りだ。

建物はみんな北側を見せて、背中に傷がぱっくりと口を開き、浮浪者やお化けに狙われていそうな古び方をしている。歩いて行くと、すでに待ち構えていた音が、あなたの靴を迎えて歩調を合わせ、足音にすっぽりはまり込むために、あなたの足が動いていく。

—— 凄い風でしょう。でもこれはビルのせいですよ。ここを通り越せば天国、大風など何処にもありませんよ。

前に行くピンクのパンツの男は、赤い縞のシャツを風袋みたいに膨らませて、風に逆らい、あなたに話し掛ける。そこは横断歩道、あなたの一歩前で赤信号に変わる。これであなたの直前で赤に変わった横断歩道は三つ。何処からくるのか、白い細い繊維の屑が、あなたにいっぱい付着している。

—— 宇宙の塵なのね。箒星の様子はどうなっているの？ 際限もない旅を続けているんでしょ。あなたが話し掛けると鼻息で温もった繊維屑が飛立っていく。わたくしは肉または骨またはひれになって、泳いでいく。

突然あなたは、ふうっと無風地帯に陥ちている。逆らっていた風圧が嘘のようだ。

前方のビルの駐車場から、紺やグレーの服の集団がくるのが見え、その中一つの顔が跳び上がってくる。集団を代表する一つの顔だというように、ほぼ中央に顔を置いて、有頂天の表情。あなたの眼か

ら、あなたは出なければならぬ。あの男はわたくしが知っている。あの男は敏腕を持って鳴らしていた。十年前より大分草臥れてしまっているけれど、あの男に違いない。

克服することの出来ない障害みたいに十年があり、八メートルほどの距離が横たわっているから、あなたは若々しく素早く通過する。三百メートルほど歩き、広場を駆け抜ける。

手に物のない開放感、長続きしない。バッグがない、あなたは振り返る。

あなたは後ろから追い駆けられている。若い男。男の手があなたの肩に置かれている。

——あなたは何故逃げるんです。何もしやしないのに、何故逃げる。何故何処までも何処までも、しつこく逃げ続けるんです？ 僕が何かいけないことでもしましたか？

——何故、逃げたですって？ 何故って、説明など……説明など出来ないわ。だって、わたし、逃げていないんですもの。

——これ、忘れ物です！ 電車の座席に、あなたが忘れていったから。僕、追い駆けてきたんですよ。それなのに、どうして、逃げたんです。全く、参ったなあ！

——ああ、それで、ごめん、ごめん。ごめんなさい！ でも、わたしは手放して、手ぶらで御機嫌だったのよ。ほら、こんなに、掌にも、指の間にも、汗一つなくて、清々しかったわ。誰にも迷惑、掛けていないと思うけど。

——迷惑かけられてますよ、僕、こんなに、息が切れています。

若い男はわざと、ぶんぶん、唇音を付け加える。

——有難う。ともかく、買うとしたら、大変なんですから。

——ややこしい礼の言い方だな。

若い男は不平そうに低音になる。

——ごめんなさい、本当はわたし、つけられてると思っていたから、速かったでしょう！

あなたは追われていなくても、歩き続ける。気抜けして一人で歩いて、それ以上どうすればよいのか分からない。気軽に何時でも休めるのだと言うことなど思いも及ばない。あなたはわたくしに取り憑かれて、明晰な頭脳を持っていながら、絶望している人達のように、周囲に用心しなくなっている。

後ろから来る男は、あなたから決して眼を離すまいとしている。立ち止まり、ひよいと首を傾げる。

あなたが陰気な通りに入ると、規則正しい足音が、あなたと並ぶ。前に出て振り向く。あの男だ。

——間違ったのかな……。お嬢さん、あなたがあんまり、ぼくを知ってるって顔をなさるものだから。

——急に、そう、突き放した顔に、様変わりされたんじゃないやあ……。なんとも、取り付く島もないなあ。

——わたし、近視なんです、藪にらみなんです。愛情を込めて見たとしたら、眼の奥の病気なんです。

——藪にらみなんてものじゃなかったな。こう、恋人に逢ったと言うほどの……。

わたくしはこの男を攻撃する材料をいくらでも持っている。十年前を分析し、切り身にする事ができる、捕まえている手を引つ込ませ、震わせることも、左右の頬を代わる代わる差出し、身を寄せすることも出来る。特徴のない誰の声とでも言えそうな、確実にあの男の声であったかどうか、疑わしい部分が聞こえる。それが十年。あなたは突然、悪寒に襲われ、あなたの体の中、わたくしのいる辺りで緊張を強め、ソラの落書を無数に浮き出させる。

——わたし、最近痩せましたけど、それでも、なお、チャージングなのかしら？

——分かってきたぞ。あなたは僕と何等かのつながりが、ある、ないを、あやふやにして、確かめようとする覚悟などないんだ。あなたは何者だ、はつきりしなさい！

男は眉を寄せ、気難しい様子で繰返すが、あなたは言葉の返ししようもない。わたくしはうごめき、身体を持ち上げ、それから身を縮める。自分を発見されそうな脅威を感じながら、待ち受けてもいる、かくれんぼのような思い。



如何いう内容のテープなんです？ ……私が話したこと？ ……だったら、一語も忘れてはいません……そっくり正確に再現することだって出来ますよ。何日、何時、何分、私と、誰と、誰が、何を話しましたって？ ……言いがかりをつけようとなさるのですか？ ……勘違いでしょう。具体的に……何がどうだから聞けとおっしゃるなら、聞きますよ。……私が何を話してました？ ……テープに採ってある、あるとおっしゃるなら聞かせて戴きましょう。……しかし、勝手に効果を期待していらつしやるなら、期待はすれよ。話と言うものは、決して、ずばりものを言わないものですからね。言っても一言一言咀嚼して話はしません。人間は次々矛盾する言葉を発しているのです。尻尾は捕まえがたいものなのよ、なんですすよ。テープは私の口でも再生できます。改めて聞く必要なんてあるかしら。

——僕は友人から、関係があるだろうって、総てを聞かせてもらいました。頭も、胴も、尻尾も捕まえましたよ。

——これですか、カセットテープねえ、まあ、時代遅れだけど、よろしいでしょう。では、一応、カーテンとドアを閉じて……。

——やはり、他人に聞かれては拙いんですね。テープを消してしまいたい欲望に駆られるでしょう。  
——そんなことはありません。聞きたくなりましたよ。

——聞き終わってしまえば、もう何事も怖れるものはなくなる。何か、そんな、大力を持ち合わせていらっしやるかのようにだ！

——………何故、これが私の何日前かの声なのでしょう。………何故そうなってるのかわかりません。  
何処に日付が入っています？

——どうです、如何です。押し潰す大きな機械なんかより、遙に冷酷なんですよ、この小さなカセットテープは………。

——声なんて、みんな心の半分か、三分の一、或いは百分の一位のところから出ているのです。心の百分の九十九は、話す為の働きは全くしない。私たちは本当に何かを話したという程の話しかたをすることがあるのかどうか。お聞かせいただいても、それ以上何も分からないのではありませんか。

——そんなことを言って、逃げるのですか。この期に及んで非科学的なものの言い方が、許せるものかどうか。僕なら、そちらの言ってることの全部を、理解出来ましたよ。僕は一度踏出した足を引っ込めるわけには、参らないのです！ あなたは問題を曖昧化し、単純化し、偽ろうとしている。

この部屋の奥に、もう一つ扉があつて扉が開け放しになって、こちらに背中を見せている白衣の

男がいる。

——……聞きましよう、私一人で、じっと聞きましよう。

——ああ、早く聞いて、誤魔化しを正すべきですよ、尻尾をだしなさい。

——聞きました。私一人で聞いて、放っておけばよいかどうかは、判断しかねますよ？ 人間の顔が皆似ているように、声も、話し方も、服装も、やっていることも、殆ど一緒なんです、何処に行っても出来事は大体同じでしたわ。

——これをもとに、事実を調べて見れば分かることですね。

——このテープは、うまく継いで作った作り物でしょう！ お芝居の中に、こんなやりとりのあるのがありましたね。あのテープですよ。

——白らを切るつもりですか？ 白らをきれるのですか？ 切れるものかどうか？

——意味は分かります、あなたが問題にしている辺りは、分かると言っているんです。……それにしても、あなた、すごく顔色がお悪いけど、大丈夫ですか？

——あなたではなく、僕の顔色ですって！ 僕はどこも悪くなんかありません。病人に仕立てて、口封じをしようとしても駄目です。こんな時に、とんでもない表情をしてそんなことを言うんだから！ わかりました。そうとしか考えられない、誰でも、そう考えますよ。うまく作った贋物。これ以

上何を言つて来ても無駄です。ですから、あなたは盗聴などしていなかった。いなかったのだから、盗聴犯人として警察に突き出すことは出来ない。が、脅迫はして来た、脅迫犯としては突き出せる。しかし、盗聴はしていなかったのだし、まだお若い、私以外の者の耳にまだ入れていないようだ。今回だけは……。

——今回だけは？ おかしいじゃありませんか？ それを握っているのは僕だ。僕の権利を奪つて寛大に振舞つて見せるなんて、あきれれるなあ、全く！

——出て行つて、出て行つて下さい！

男は何処かから来る強烈な薬品臭に、鼻をこそぎとられる。まるで沢山の眼に見えない障害物にあつて、それを通り抜けなければならぬと言ふように、蟹の横歩きをして廊下にでる。カセットのボリュームを極大にし、屋上に駆け上がる。

運河が見え倉庫が並んでいる。

その声は育っている木々や、朽ち欠けた倉庫に触れながら地上に降りていく。声は物凄い大きになつたり、小さくなつたりして、聴こうともしない偽りの耳は逃げていっても、遠く近く、この声は人々の耳の中に小石のようにはまり込んでしまふだろう。

煮えたぎった油を注ぎ終えた後のように、男は気持ちよくカセットをオフにし、肩に掛け、メモを

ポケットに納める。野方なみ、南まゆみ。

男は屋上の鉄柵に沿って歩いて行く。貯水タンクから水が洩れ、水滴がしたたっている。人々は黒い点のような頭を肩の上に乗せて、後ろ足を尾のように引きずって歩いていて、誰一人、この建物からの声に、注意を傾けている者はいない。

——鼓膜の破れている者しか、いないのですか？　こういうことを耳にしませんでしたか？　男は怖くなる。世界中の耳は役立たなくなっているから。音の渦の中で、耳を保つ術がないのだ。男は叫ぶが、情け容赦しない組織的聴覚障害者に聞かれてしまう。

何時も音は、ウイルスよりも汚れを広げるから、皆自分用のエアポケットを持っていて防衛するのだ。よくよく聞きたいものしか聞かない。

——どうかしら、暴露したものが、果して暴露した事になりますかしら？　あなたは知らないでしょうが、病院には掃いて捨てる程の、人命の問題が隠されているのよ。ほんの些細なこんな問題で、脅迫されても、私は微笑して、自分に戻れて、自分達を笑いながら、より以上に誰かを笑って見せることができるの。誰一人、意味のある聞き方が出来ていないから、皆は、笑い方の多数決を見て、そうかと思う。ねえ、分かります？

男の後から屋上に上がってきた女は、白衣をゆっくりと脱いで右腕にかける。反対側の棟が昼の陽

光に、突然輝いてきて、その眩しさが、男には思いがけない。

8

子供は、赤が嬉しいと言う！

手を潜り抜けて走っていく女の子を、わたしは捕まえ、抱き上げたり這わせたりして着換えさせる。

白ちやけたボール紙のように、剥がれるもろい岩は、消えてしまった大昔の動物や住民の鼓動が隠されているように、震えながら落ちる。わたしはまだ醒めきれない、酔いどれの気分で、女の子を連れて崩れる岩に手を打ちつけながら歩いて行く。

わたしは何度も転ぶ、実体はないが、保護してくれる泡のようなものを身にまとって、転んでも痛みが届かない。流れ着いた浮草の形で、水に身体を漂わせる。少し、いかがわしい豊かさを持つたわたしの身体が、自然と合体し何処にもいないと同じように、いることが出来ている。

爽やかな朝、川の上の森の上、桃色の空に、灰色の雲が丸い頭の列を揃えて続いて行くのが見える。

子供は白い服をはためかせて小踊りし、石の河原の大石に飛び乗ったり、落ちたりする。

——いい子だから、見張っているのよ。

わたしは川の水を掬っては、口元に持っていていき、唇を濡らす。対岸で叫ぶ男の声が掠れている。子供は呼ばれたので川を横切って対岸へ行こうとし、波のふくらみをもたげて立ち止まる。大きい白い雲が、波に乗って近づいて来る。

わたしは何か驚くべきことを一言いう。どんな事を言うつもりで言ったのか、自分で確め様のない一瞬。わたしの手首はすぱっと切られており、血が噴出して流れを染める。

血は闇の中から陽光のもとへ、風景の中で最も派手な色だ。薄っすらと血が流れている。赤い粘り気を見せて、波の寿命が長い。

固定されているわたしのポーズは、もう形を変えない。重く蒼ざめた鈍い脂肪。顔には何の表情も浮かべていない。生まれて始めて死ぬのだと言う、絶対的な孤独感、それにわたしは次第に慣れていく。血は大きな流れ、川で遊んでいる子供をも包んでいく。子供は赤が嬉しいといい、わたしは川の中に身体を浸して、流れに包含され、水との境界さえなく、赤い川の源であることに満ち足りている、何ごとかを成し遂げたのだ。陽気で明るい陽の色で、続いている川、赤い鮒や、草の実が唇に触れてくる。わたしはそれを細目で見ている。感覚が遠くへいく。

対岸から来る、グレーのズボンの男は後ろざまに滑る。それが川の水の大噴水か、大噴火にも見える。しかし、男も子供も川の色も、わたしの傷口も、何の不都合のない自然だ。

わたしの死ぬ時間が勝手に後戻りし、再び近づいて来るにまかせ、同じ姿のまま動かない。酸性の雲が立ちのぼっている。女の子を探しに来た男は、ずぶ濡れになって立っており、女の子の呼ぶ声が、こだまして返ってくる。

——ママ、ママ………。子供は遠回りに近づいて来る、危ない！ 足をとられる、わたしの髪に触れ、びくっとし、手を放して転がってしまう。

わたしの視野は極度に狭まっていき、空は穴。青灰色の石と石の間、僅かな隙に、ナイフが深く沈んでいる。周りにはもう、生ぬるい水泡一つ見当らない。シャワーを浴びたように顔を濡らしている女の子は、両手で自分の目尻を引っ張る。手を放すと青くて水を含んだ眼が現われる。わたしの眼球を男の手が掴み取っていき、瞼の裏を透かして見る赤の色が、紫色に色あせている。死体として運ばれてしまわなくても、もう此処に何の痕跡も残さない。死に方はピストルの方が、よかったのかもしれない。もつと一瞬に、胸に響きを強く残して…………。

男が揺さぶっても、何度子供が揺さぶっても、川の流れが波立つただけだ。



——わたしは指一本、こめかみに強く押し付けているの。わたしの記憶には、足りない部分と、余り過ぎる部分があるわ。

——映像としては古すぎないか？

——でも、映画の場合、まず、スターの顔が浮ぶでしよう。スターの名前を覚えてるわ。なのに、スターはわたしだと、分かっているのよ。だって、スターでもないのに、主役で登場する筈がない。ああ、そうだ、わたしは川の水を飲んだのよ、その味。わたしがカメラの立場でいる筈がない。だって、カメラは水を掬ったりはしない。

——リアルに語られた犯罪、発見者のその男が犯人だな。誰かにしつっこく聞かされた話を思い出すというふうな。婆あの夢が現実に戻する形で、女は年齢をとるのかもしれない。

——それでも、わたしの頭脳は明晰そのものという感じに、冴え渡っていたわ。だから、なお、分かんなくなる。あんな遙か彼方にわたしがいて、おまけに子供までいて……。

——話だろうと、夢だろうと構わないさ。次の一手を考えて見ろよ！

——そこで終わり、続きがないの。あれは、終局の部分であったのか？ いずれにしても、忘れていたものの一部分、または、後で挿入されたものであることは間違いないわ。

——あの世の一人一人が、この世に自分を持っていて、感応したりするのだろうか？ 用のないウイ

ンクなんかするんじゃないよ。あの世の方が万事取り計らってくれているんならいるで、なにしろ死んでからが長いんだからさ、どんな、突飛な知恵も浮んで来るよ。死の怖れはないんだし。先を楽しんで待つて見るべきだ、面白くなるかもしれないぞ！

——わたし、死んだのよ！

——よく言うだろう、幼児体験。だから、聞いている。心配なのは、前世の記憶が自分の記憶と混じりあう危険のこと。

——危険は構わない。わたしとしては、事実を想い出せるだけ、想いだしてみたいのよ。

——問題は隠されている事実、いや事実ではなく現実が問題だ。きみは健康そのものなんだからさ、パンチ力があるんだ。婆なんぞは、KOだな。

——どうして、そんなこと、言い切れて？ 健康そのものだなんて！ なんか、秘密をもっているみたい？ 秘密って、秘密でないものより人に良く知られていることが多いのよね。でも、わたしの場合、持っている秘密の内容が自分でつかめていないから、何とも洩らしようがないのよ。

わたくしは、あなたに無視されている分、というより、彼にわたくしが無視されている分、あなたに攻撃を加える。あなたを攪乱して排除するという、わたくしの呼びかけは燃えていたのに、結果として、わたくしは彼に抱かれてもいないし、抱きついてもない。あなたの隔壁はわたくしの盛り上

がる敵意で、モザイク状に破れていくのに、あなたは彼に抱きついて、長い間、話し合うこともしない。

分かりますか、わたくしが分かりますか？　ここにいるのよ……。何兆もある細胞の部屋の、何億、または一個、それとも一個の中の核、それとも、外套を脱ぎ捨てて細胞の部屋に、するすると入り込む、プラスミッド……。存在を認めることを要求するわたくし。

あなたが、今、幸福感に包まれているのなら、ここを通過する快さがあってもいいのに、あなたは鎮もって、わたくしだけが激している。何もいま、激情的になっている魂の前を通ることもないというように、あなたは動かない。

まるで、誇り高く無傷で過し、生まれたままの自分を保持して、あなたの細胞は、持ち送りの石組式の威信に満ち、わたくしの挑戦を二十年も待ちつづけたと言わんばかりだ。

わたくしはここに、無数の策略の足場を作りたい。文字をゆがめ、ソラをリラとか、ソルとか、落書をする。あなたにとっては、矛盾に満ちたメッセージを貼り付ける。

——魔よけの札です。

刻一刻、ここは美しくなっていく。こんな時こそ、あなたは自分の中で何かが壊れ、かわりに、ぐんぐん膨らむわたくしを感じとり、彼にそれを認知させるべきなのに……。

執拗過ぎるわたくしの心は打ちのめされ、住み慣れたソラの家や、培養壇への郷愁がくる。あなたは毛嫌いするように、わたくしから遠くにいる。

わたくしは、四角く眠る白いカーテンが欲しい。

あなたが彼の傍に親しい顔で寄り添っている。彼は身体を少し曲げ、片手をあなたの背に回し、赤い線の入った眼でわたくしを覗き込む。わたくしはあなたを気の向くままに振り廻そうと企みながら、あなたをどう扱えばよいのか、分りかねている。

あなたは靴を鳴らす、鳴らすことで自分自身を鼓舞する事が出来ると信じている少女のように、軽やかに、リズムカルに。彼は顔を小さくし、腕を広げ、身体を屈して空気を分ける。人は穏やかな光を浴びて流れるが、一人一人が誰でもよいと言うものではなく、その人自身だ。

——わたしね、此の頃、友人だとか知人、または恋人が殖えているって気がするの。それもかなりな年配が多くて嫌になるわ。その記憶を引き出そうとすると、わたしの少女や幼女時代までも、いいえ、前世まで引つ張り出さなければならぬような。そのうえ、気管や胃や食道や、腸を根こそぎ引つ張り出してしまふような、そんな気がするの。

——恋人とか、友人というものが、何時も、そんなに身体の中でウオツカが燃えるように、意気盛ん

なものだったかどうか？ きみの話していない部分が鍵を握ると思うね。

——わたしは、事実と幻想の境目を、もっと簡単に探せる筈だったのに。

——きみの行くところには、必ず、きみの記憶も一緒に連れて行くはずだろう。恋人であったか無かったかなんて、それに照らし合わせて判断すればいいさ。前世からの記憶が引つ張り出されるようでは、恋人は年寄つていくばかりだぞ。恋人たちも、きみを追いきれない。前世まで遡つて、恋人が次々殖えつづけ、よぼよぼになっていくばかりさ。

——でしょう！ だから、わたしだって、ぎりぎり真剣になっているのよ。

——しかし、現実の恋人の位置は、老人や亡霊に押し捲くらすことになってしまふなあ。それでは、きみの若さを売ったことになるよ。僕なら我慢ならない。

何時も涼しい風の吹き抜ける額が、あなたのものとしてある。

彼が急に立ち止まる。雑踏のなかで、あなたはわたくしのように、人々を水と感じて浮ぶように歩くことが出来ている。彼は道路に張り出したテーブルを一回転する。

——妙なことなら、僕にもあるさ。夢とも現実ともいいかねることが……。

彼がわたくしにウインクした。そう、思う。何故そう思うのか知らない。

——ゆうべのことさ、僕は靴下を脱ぎつづけていた。穿いている靴下は何十枚もあつて、三十五枚目

と三十六枚目の靴下の間に忘れ物をしたんだ。たしか、一万円札を挟んでおいたんだよ。僕はそれを探して、数え直しばかりしていた。その時、足音がしてね、見ると、鳩が気取ってつんつんした横顔を見せ、ここの住人であると言わんばかりに、部屋の中を横切っていくんだ。ベランダからも土足のまま、二匹の鳩が入り込んできて、僕を見て瞬きをした。首の動かし方が、きよときよとしているから、そう見えたのかもしれない。

——どう、続ける？ 彼が覗き込んだ。興味深々、あなたから飛び出していた、わたくしは縮み上がる。鳩は僕の足を嘴でつついて来た。そんなにいばんだら、靴下の糸が引き出されてしまうじゃないか、挙句の果て靴下に溺れて死ぬ。みごとに靴下の山の中に、鳩は僕の足首から切り取られた足のように、埋もれていくだろう。目的は何だ？ 鳥葬か、親善訪問か？ 僕が立ちあがると、鳩は靴下を着たまま、三方に歩いた。臭い靴下の一日分をぶらさげてさ、飛んだり慌てたりはしないんだ。そして彼らは洗面所へ。見るとベランダの鉄柵にも、ブロンズの飾りのように、黒々と、鳩が一列に並んでいたよ。もしかしたら、鳥だったのかも知れないな。

——わたしに調子を合わせているつもりなんでしょうけど、夜中に鳥目の鳩が、洗面所で靴下を洗ったなんて！ 嘘ばっかし！

——でも驚いたなあ！ 真夜中、不眠症の鳥の一群が、窓ガラスを掠めて、執拗に宙返りをくりかえ

していた！　これ、本当のことだよ。闇に耳を澄ますと、自然は、不満で一杯だといわんばかりに号泣するんだ。鳥は虚を突く習性があるからね、飛び回り飛び去ると、もう体臭さえ残さず、僕は何処にもいない。僕の鳥葬のあとに拡がっている空虚の大きさ、それはただ黒々としていたのに、ベランダの向こうの夜は、ダイヤモンドを振りかけて、リゾットをすすっていた。いや、そんな音が聞こえていたよ。自然も不幸を囲っているんだね！

彼はあなたを力づけるつもりで、自然の保護者になり代わり、あなたを対称的に小さくしてしまう。誰かに似ている。

——わたし、午後になれば何とか、生活のペースを、まだ、取り戻せるのよ。昔がものものしく、わたしを迎えたりはしない。

——昔がものものしくかあ、よく言うなあ。

——コップがあなたから離れ、逃げて割れる。そばで老人が二人で、話している。

——本当に若さんなあ、化け物の若さんなあ、見ちゃいられませんなあ。

——活発とは馬鹿げたことですね、皿やグラスを床に落として割ってしまう、そういったものでもの彼は立ち上がるが、あなたはしっかり坐ったままでいる。

——わたしは、真面目よ。あなたは、真面目が嫌い？

——すっかりしろよ。刃物のように冷たい手を、ほら、こんな風に、首に当ててご覧！ 目覚めるんだよ、いいか、確かな夢の方へ！

9 ママの記憶が残っているの？

——パパ！ 自分が衰えていくのを見るのって、怖い！

——電話で、いきなり、ご挨拶だな。パパが死に損なっているみたいじゃないか？

——違うったら、わたしが、わたしが何者かってこと？ パパには永久に分からないと思うのよ。

——聞かぬが花かな？ それにしても、此の頃、金を使いすぎるようだな。どうしたんだ？

——何かしていなければ、いられないんです。

——何に使った？ 旅行でもしたのかな？

——ひよっとしたら、わたしが買物をしたのでは無いのかも……………。



——まさか、男と一緒にだ何て言うんじゃないだろうね？

——そう、言いたいところだけど、残念でした。

——では、何が使ったんだ。

——それが分かったら………。

——めったにないことだから、責めてるわけじゃないよ。

——でも、もう、大丈夫。買わなくても、みんな、わたしの持物になってしまいう気がするんです。

——それは、それは、一挙両得じゃないか。

——あのときは、すべてが無性に欲しくなって、早く買わなければと思ったんです。でも、大分返品したんですよ。近頃は反対に興味に合わないものばかり目に付いて、目玉を抉り取りたいくらい。

——女心か？

——気変わりというような、簡単なものじゃないんです。

——それはいい、それくらいの自己瞞着にいます方がいいよ。

——わたしが歩くと、街全体がわたしを取り囲みます。わたしなんか好奇心を持つ街で、本当に需要と供給の法則で品物が売られたり買われたりしているとは、考えられないわ。わたしが、昔、泣いたとき、お乳を与え、お菓子や、玩具を与え、着せ替え人形にして、挙句の果て、わたしを捨てて

いったママみたいに、慈母がいるのよ。

——金持ちのよさを楽しんだこともない、おまえが、もので窒息しているとは、むごいことだね。ものなんて、それぞれ手品の種、気にしない方がいいぞ！

——そうはいかないのよ、パパが思うほど、わたしは単純に生きてはいないの。人間も一種の笛のような声を立てる物でしかない、物も人も全部病気という気がするんです。

——誰だって馬鹿な手探りで、物の間を通り抜けるんだ、誰だって厄介なんだよ。超人的な明朗さを、持ち合わせているわけじゃないからね。それでも病気だとはいわない。まだ物影から人を見つけ出す事ができる。

——ものは、大抵あるところに、どんとあるのよ。わたしの部屋に大陸のようにあるベッドみたいに。ほんとのところ、何故それがあるのかと疑ってしまうわ。みんな、即席で見掛け倒し、とつくになくなっていくのに、即席に生きて見せているのね。

——大陸のような？

——アパートに一人暮らしのお婆さんがいたの。六畳一間にセミダブルのベッドを一つ置いて、もう、隙間なんてないんだわ、その上に坐って泣いていたのよ。子供達がお金を出し合ってプレゼントし、ゆっくり眠って欲しいと言ったんですって。恐ろしいことね、お婆さんは、死んだらそのベッドをわ

たしにくれると喋っていたのよ。

——何を、馬鹿な！ お返ししなさい！ 不気味じゃないか、返す人がいないんなら、捨てるんだ！

——パパの大声が耳に痛い。わたし、此の頃、体の具合がおかしいんです。精神的なものなんですよけど。亡くなったママの、病気の始まりはどんなだったの？

——具合が悪いのか？ 如何してそれを早く言わない。……ママの死んだ時の記憶が、もしかしたら、お前にあるんじゃないかと、パパはずうっと怖れていたんだが……。

——それって、河原のこと？ もしかして、ママは、自殺したの？ ……そうなんだ！ わたしだと思っただのは、ママだったのね！ 分かってきたわ。赤い血が綺麗だと、嬉しがっていた女の子の方が、わたしなんだ。

——夢でもみたか？ 夢は夢、事実からは遠い！ 気にするな！

——そうなんだ！ そういうこと！ でも大丈夫だよ、そんなことでパパを困らせたりはしない。……わたしね、集団検診を受けさせてもらったの。中年や、老年に混じって、面白かったわ。医師はそれほどのもないって。

——徹底的に診て貰うんだよ！ 金は送っておくからな。

——わたしはどうでも、パパの身体はかけがいが無いんだから、大事にして！ わたしにはママはい

ないんだから。

——まあ、それじゃあ、お互い元気をつけ合うとするかな。

——わたし個人としては、そうしたいんだけど。

——誰が妨害するの？ まだ、何か隠しているな？ これでは堂堂めぐりだ。

電話は切れている。

——パパー、助けてよ！

10 救いのないまともさに、乾杯！

予報以上に強い風は、陽光に囲まれ抑揚を大きくして、耳からぼうぼうと吹き込み脳の中の火種を煽り立てる。渦のこちら側、暑気がもう火になる寸前、あなたは煙っている。わたくしに対する、あなたの反発はあるとしても、共感の上に立った反発だから………、そう思ってきたのに、あなたは、

こともあろうに病院の前に立っている。父親の一言がきいているのか？ おずおずと、左右に大きく揺れながら内科外来の待合室に入っていく。

わたくしは怒り狂い、反動のように、乱暴に捕らえた細胞を、組み伏せ、引き寄せ、中に入り込み、うごめく震動で次々細胞を盛り上げる。何故、あなたは、わたくしの賛同を求めないのか？ それは、一種の隷属、あなたのプライドが許さない。

——死ぬより、シャンパンを抜け、ですよ。元気を出しなさい。青い服の女はあなたに言って、口の脇のホクロを指で押える。——死ぬよりじゃなく、死ぬ前だったかしら？

——どちらでも構いませんけど。あなたの声は消え入りそうだ。

——あなただけでなく、みなさん、否定したくなるんですよ。病院に来ると、いいえ、病院に来る前から否定し続けているんです。口がきけなくなっても、そうじゃない、そうじゃない。不思議にその一言だけを話せたりして。そうじゃない、そうじゃない、その言葉は、何時の場合もびたりとあてはまり、どんな言葉よりも、しっかりとした意思表示になり得るんですよ。一番最後に、否定だけがのこるらしいの。そうじゃない。ずっと、首を傾けて、否定したあとの答えを考えながら、病室のベッドで寝ているんです。

あなたは身震いし、周囲を見回す。若いあなたを囲んで、老人達の手が競って肌に触れてくる。あ

あなたは混乱し、拳で胸を叩き、こともあろうに、わたくしに救いを求めて来る。わたくしは怒りを納め、病院のロビーからの後退を始める。身体を屈め、下だけを見て、病院玄関の自動ドアまでバックする。外に出ると、もう、一目散に逃げ捲くる。そうじゃない、そうじゃない、あなたは吹き続ける。わたくしは過去を反復するのも違う、計画された行動をあなたに欲している。わたくしを再生する機構でもあるあなたを、わたくしの未来を可能にするあなたを、むぎむぎ衰弱させる訳にもいかない。しかし、病院で手術とか、化学療法となれば、命取りだ。こうなつては、バリヤを破って一気にあなたにとりつかなければならぬ。

あなたは息を整え、並足に戻り、大げさに振り返る。

——今という時が跳ぶような速さで、走り抜けていったわ。音速、毎秒三百四十メートル、どんな音でも光でも、わたし、簡単にやり過ぎせるのね。

説明を超えた叫び、あなたの腕が二本、あなたの耳にぶら下がっている。耳の中にイヤホンが埋め込まれ、ごぼごぼと、水泡を飲み込む音。これでは耳の内張りが融けてしまう。あれは悲鳴だった。確かにあの時、あなたのママは死んだ。一つの顔が覗き込む、幼いあなただ。わたくしは只の傍観者にすぎない。

——記憶は耳とどう関係しているのかな？ 位置感覚、平衡の補正の他に？

——耳は、退屈な干し貝。声など、みんなごみのように掃除機に吸い取られていくのよ。結局そんな  
る、ほら、なったあ。音楽のおの字も聞こえない。わたくしの好物は、太陽、大洋、カニ、ウニ、エ  
ビ、ガラス、ガス、タニス、テニス、壘のすべて。

——誰が、わたしの判断など気にするものですか。この身体の中のこと、そちらが、いちいち、口  
をだすことないのよ、身の程しらず！

何時かわたくしの自己集中が始まって、あなたはわたくしを噴出させる。

——これでも、わたくしは、怪物を産み出すのに、三カ月はかかったわ。わたくしの気の強い頑張り  
屋のくの字をつくるのに。

あなたの鼻梁の中央、かすかに残る傷跡があつて、十字型に引つ込んでいる。

——わたくしが喜んでいるからって、他人を喜ばせることは出来ないのよね……。

彼は瞬きをしながら、汗ばんだ手のひらで、あなたの手を包む。それはわたくしの手？ ずるそう  
な、または、気まり悪そうな様子で、拘禁を解かれた病人に対するように、あなたを見詰めている。

あなたが歩くと、彼の眼も一緒に歩く、月のように。わたくしには彼が見えても、彼に見えているの  
は、あなただけ。あなたは、病院脱出の助けを借りたことで、今度こそ、わたくしに隷属したと思っ  
ていたのに……。わたくしがどんなに、甘い啗りをあげても、彼とは並べない。

この店から雨は、はっきり見ええないのに、池の周りには、小人のトンガリ帽子型の透明なビニールハウスがポツポツ出現し、中に一人ずつ人を置いて、釣竿を突き出している。降っているのだ。

——改まった時にはわたくし、普通はわたし、甘ったれたり、ふてくされたりした時はあだし、日本語だから言い方は色々あるわ。それなのに、わたしは、わたくしとわたしをもっとはつきり区別したくなっているの。わたしの言葉で考えるのは、何時もわたしという言葉でつくられているのね。

外では、ふつと昔の糸のからくりが見え隠れするように、雨の線が見えている。

——あんな死に方じゃなく、もっと、違った死にもあったんじゃないか……、ああでもよかったのに、こういう方法も面白かったのにと……、ママはわたしに言うのよ。

——へーえ、ずいぶん研究熱心なんだな。でもね、子供を引き連れて行って、自殺するなんて、ママは気がふれていたんだよ。

——わたしだって、こんな風に……、と言いたいところだけど、夢は一杯あっても、現実はきびしいし、死に方は結局、一つしかないし、それに、もう、わたくしは死んでいたんだとしたら、……だとしたら、こうしている者の総称は何なのか、わからなくなってしまう？

——そうか、でも、ひよっとしたら、それを楽しむ手もあるんじゃないかな！

——うん、でも、すっかり、満ちてるみたいでもあるわ？



——変貌する、その、わたくしつて奴が、怖くはないの？

——だから、わたしは、わたくしで、充ちてるって言ってるでしょう！

——わたくしと言う者の正体は何なの？ きみは夢のようにしか白状しない、そのうえ、飛び跳ねて旅に出たいと言うんだから。

——本来、病気そのものは、健康きわまりないものなんでしょう。そうね、とすると、病気の御蔭で元気なわけえ？

——どんな立派な病気でも、病気自身は陰険だから、健康なんてもんじゃないよ。

——でも、意地汚い婆さんのように、長生き、とんでもない長寿、百歳とか、九十歳とか、そんな気もする。

——それじゃ、わたしと、わたくしの自衛の為の戦争だよ。武器がいるなあ、………きみという一国の中のことだから、僕は内政干渉はしないけど。覚えておけよ！ きみは健康極まりない奴なんだってこと！

話している背後で雨が止み、夏が火炎を上げたら、あなたは、両足にそれぞれ相反する方向へ行くよう命じてしまうだろう、きつと。

——実は………。

——実は、という言葉を、もう二十回も！

——言ってしまったえ！ わたくしが、わたしに、地獄へいけ！ 出て行け！ と言っているのよ。

——まいったなあ。僕も、嘘が嫌いな人種ではないが……。

——本当よ、本当なんです！ あなたにはずーと言いそびれて来たけれど、わたくしは、あなたの知っているわたしとは言いかねるところがあるのよ。

——それが、成長か混乱か、僕としても、本当のところを見定めなければならぬって気がする。話したがっているところを、言ってみてくれよ。話すことで良くなることもあるんだからさ。

——でも、何処までも、何処までも、同じ人でいると言うのは、如何いうことなのかしら？

——そうだよなあ。きみ、いいこと言うねえ！

——わたしの身体が、ガラスみたいに透明だったら、あなたにも良く分かって貰えるのでしようけど。でも、興味のある面白いものを見せるといふような、もったいぶった見せ方はできなくなるよ。

池の回りには、何時の間にか透明な三角帽子が無くなっている。

——相変わらず、釣りをしてるなあ、辛抱強く。きみは、何を見てるの？

——見ないのだから見えない。

——そいつ、わたくしって奴が生きているのかい？ 死んだ筈だったのに？

——昔というより、何時か、わたしが中年の女だった気がするの。彼女をありありと覚えている、以

前から、わたくしなんだわ。音というものは光よりずっと遅れるんでしよう、遠雷の響きなんかよりも、ずっと遅れて届くことがある。きつと、何十年も掛かるんだと思うの。

——そいつは、わたしの若さを憎んでいるの？ 内心で？

——わたしみたいな人を憎める筈無いじゃん。わたしはとに角、元気の良い頑健極まりない、チャーミングな奴なんだから！ あなたよ、そう言ったの！

——この世で一番ぶつかり合うのは、自分と自分だよ、どっちも強い。俺って言う奴らの小田原評定は駄目さ、困った時には他人に仲裁して貰うんだな。内部革命を起すに必要な、儀式と考えることもないが、異常と断定することもないさ。

——うん、わたしも、そう思うわ。でも、遺伝はどうかな？

——ガラバゴストマトを知ってるかい？ そこに見つけた現実は全く驚くべきものなんだ。種はそのまま地に落ちても、たった一パーセントしか発芽しない。しかし、この種子を次亜塩素酸溶液につけて、外殻を取り除くと、発芽率は七十パーセント程に上がるんだって。なお、驚いたことに、象亀の消化管を通った種子の発芽率は、八十パーセントに上がると言うことだよ。その種子は象亀の体内に三週間も止まって、硬い皮を剥がすんだそうだ。

——それで、それが何なのよ？

——ある種の植物は、ある種の動物に気に入られなければ思いが届かない。人間においても、そんなことが有り得るんじゃないかな。その、わたくしって奴は、きみを利用しなければ、思いを遂げられない、と言うようなものじゃないかな。そんな、気がする。

——わたくしとわたしが寛いで、次第に居心地よくなっていけそうに思えるのに、或る日、わたくしが抜け出て行ってしまうとしたら、淋しくもあるわ。ことはそんなに簡単なのかしら？ 抜け出て行ってしまうのが、こちらになるのかも？ 共に終わりたくもあるわ。誰も何も損はしない、わたくしはわたくしであるうと、なからうと。

——そうだよ。歴史は死者の山だ、死者で溢れているのに、その上、きみの死まで必要とするだろうか！素敵な冗談として、笑いの種なのね。あなたはそんなわたしと、結婚したい？ それとも、わたくしと？

彼は、口をとがらせ、耳のくぼみをこすっている。

——どっち？ わたくしが、笑ってるわ。婆あめ！

汗の額を手のひらで拭う、あなたの髪が濡れて飛び上がり角になっている。口にフォークを持ってきて顎を引く。あなたの好物は……今までと全く違ってきている。それはわたくしの嗜好だ、貪り食いながら、殆ど透明に近い液、シャンパンを欲している。

柔らかく泡立つグラスを口に当てがえば、暑かった身体の芯と冷たさが、わたくしを巻き込んでゆつくりと合流する。

——ともかく、かりそめの和平に乾杯！

——救いの無いまともさに乾杯！

——気の合った者たちに乾杯！

あなたの細胞の方々に窓が開き、各窓から一つずつ赤い顔が現われる。わたくしはそれらの顔に向かって、ソラ、ソラ、ソラ……と呼ぶ。顔はそれぞれ泡立つグラスを持ち、飛沫を浴びせあい黄色い声をあげる。

——乾杯！

ワイシャツのボタンを二つ三つ外し、乾杯する彼の顔は、上気し、思慮深さの影に好奇心を隠そうともしない。こうして、わたくしは、じわじわあなたを焦がす、あなたの重みになっていく。

あなたは手を挙げ、小脇に挟んでいた地図を取り落としている。彼は行過ぎてからゆっくりと方向を変え、あなたの前で車を停める。彼に預けておいた自転車を車から降ろして、歩道で組み立てる。カーラジオの音楽は一定の間をおきながら、不揃いな古い家並に沿って吹き流れていく。地図はタイヤのスタンプが押しつけられたまま地面にあるが、わたくしには地図はいらない。

——行先は？

彼の乗用車が自転車と並んでいる、自転車は軽く速い。

——あなたの得意な、行方不明の旅よ。

角を曲がると、地球の引力が傾き、あなたも傾いて、枝に刺してぶらさげた小魚のような、街路樹の連続模様が続く。

——何キロ先へ？

——何キロか、何年。

——何年だなんて、付き合いきれないな！

——行先、先というより、後、過去の方、たぶん？

——過去だって？ 時はみんな、けりをつけて来ているんじゃないやあ、なかったかな？

車が自転車の前に出る、自転車が追いつく。声は車の甲羅の上を空滑りする。

あなたは自転車のペダルを漕ぐ、走ることは、眼がくらくらするほど楽しい、彼の車はもう見えない、あなたの自転車は青い波になっていく。天にさわりながら走る。いつさいのものがあなたを運ぶから、わたくしもあなたを運ぶ。遠く過ぎ去った昼、昼の蓋が開き、中身が散らばり終る。

わたくしの声があるあなたの耳を掠めている。あなたは見えないものを追う、見えないから、開ききった瞳孔で、世界をありのまま見る。出来るなら、あなたに希望の幻想を与えてあげたい、あなたは雲の周りを回り、顎を突き出し、空気を食べる。

道順なら、わたくしの中にしまつてある。力の尽きることの無い昼、何時だって道路には、沢山のタイヤが回転していて、自転車の二つのファンを待ち伏せる。

道路は何処まで行っても終わりが来ない、後を追ってくる犬の嬉しそうな声。

いきなり、あなたの背に重い塊が釣り下がる。もう何回か通過していったライトバンが、今度はあなたに、ぴたりとつけている。危険な運転で自転車に擦り寄り、あなたを遊泳感から引き摺り落す。あなたは摺り抜けたり、寄り添われたり、ぶっつけられかねない捨て身で走る、走るだけの空白が一時間にもなる。

車を運転する男の顔……、あなたの記憶と、わたくしの記憶が総動員される。男は信号止めになると窓から身を乗り出して、あなたに、笑顔の首を伸ばす。髪は七三に櫛目を入れられ風にも靡かない。

——好みじゃないわ。あなたは眩くが、わたくしの逆転してみる時のなかでも、その顔は、霞の彼方だ。

逃げて逃げて息絶えそうになったとき、犬はあなたを通り越して行ってしまふ。犬なら可愛いけど……。

道路にガム？ ガムで道路に引っ張られる、ガムで道路を持ち上げながら、あなたはハンドルに身体を密着させ、ペダルを踏む。重くて、靴もペダルも踏み抜いてしまいそうだ。

色々な自然光の中から、眼の絞り一つで、選び出した画面に、あなたは白い雪の中白い人が、白いコートを着て歩いて行くのを見、暗闇の中黒い人が、黒いコートを着て歩いて行くのを同時に見ている。あなたの少し膨らむ頬を、悪い予感がバンと叩く。

キキユ、キキユキキーン。 わたくしはあなたの身体を揺すっている。

……無事よ！ ただ一人、あなたの残骸の中で、生き残っている想いは無い。あなたの脳神経系統



からの信号はぱちぱちしてはいるが、シヨートはしていない。

今、ソラ、ソラ、ソラ、あなたの中で、わたくしのサインが活気を帯びて殖えていく。

顔に当たってくる風が痛い。勝手気俣に手足は伸びているが、体表面がひりひりする。自転車はあなたから二メートル程離れたところに、横倒しになっており、ライトバンは五メートル程離れたところに停まっている。あなたを白い線が囲んでいる、囲む線をわたくしはなぞって一回りする。これは何に？ その凶形から出てみる。白い熊のような？ 人の皮膚の展開図、これでは死んだのはあなただ。交通事故？

道路を猫背になって飛び跳ねていく小人のような男がいる。……子供のいたずらかもしれない。あなたは自転車を立て、注意深く調べる。ライトバンの男が、前の建物から出てくる、何かを恐れているのか、下を見て顔をあげない。グレーのパンツのベルトに、当たった手に雑誌を一冊持っている。——すぐに病院にお連れしますから。

グレーのパンツと、何処にでもある総合誌……。わたくしは思い当たる、ああ、あいつ、あいつが、あなたをつけ回し、衝突したのだ。震えが来る。いい加減にしてよ。

……電車が揺れる度に、亀甲型のベンゼン基が手をのぼし、CやHやOなどに結合する。手は一本だったり二本だったり、ベンゼン環は亀の子になって紙の上を泳いだり、重なって交尾したりする。

昇格試験前、眠気で窓の開ききれない腫れぼったい瞼の下、記憶力も、理解力も遠い。顔を立てると視線がグレーに突き当たって、引っ込む。分子式、芳香炭化水素、合成化合物、次の視線はまたも、グレーの壁。それはパンツで、わたくしの前に近々と身を寄せて人がいるのだ。混んで来たらしく、突き当たって行場の無い視線は、ページの上で縞模様を描いている。電車が止まり、ひと揺れし、頭上の網棚に何かが乱暴に投げ込まれる。ぴくりとし、わたくしは顔を逆さにして網越しに雑誌の表紙を見ている。分厚い雑誌の表紙は、はあ、あれかあ。視線は瞼に戻り、もう一度頁に落ちる。

……翌朝、混んだ電車をやり過ごして駅のホームに立っているわたくしに、挨拶しながら長身の男が来る。見覚えが無い、男は特徴の無いまあ、美男で、何処にでもいると思わせるありふれた風貌をしている。後ろの誰かに？ 振り向いてみるが、無関心にいる何人かが、顔をそむけて立っているだけだ。男は陽気に朝の挨拶をする。わたくしの視線は彼の顔面とまどい、白いシャツを滑り、知己に逢ったようにグレーのパンツにつきあたる。手に持っているのは、総合誌だ。思い当たる、あいつだ……。

ストレッチャーを押していくのは、あいつで、あなたはその脇を歩いていく。わたくしは拒絶反応を起し、歩みを止めたくてぎくしゃくする。

——こんな事故が起きてても、掠り傷一つ負わないあなたは、加害者。女であっても、その位の逞しさ

が欲しいものですわ。

妙な節回しで口走りながら、長い髪の女があなたの脇を歩く。何かのまやかし。不都合があつたら逃げるのよ。

——あなたには、内容のある方だけが持つ重みがありますもの。お嬢さんでも、犯罪から逃げたりはしない。まだお若いのに、見上げたものです。

頭の中がぐるぐる回るから、あなたは肩の間に首を埋める。男の車が故意にあなたの自転車に突っ込んできたのだ、あなたは突き飛ばされ、身体を強打して、ストレッチチャーに乗っている、乗っている筈のだけれど……。

——あなたは、山のような花束も贈り物も、つき返して、思わせぶりの期待など決して持たせては、くれなかつた。挙句の果て、セクハラの現行犯で、警察に逮捕させるなんて。

男はうめき、あなたの目を覗きこむ、執拗に、凶暴に。あなたは恐怖し逃げ出したいのに、スーツケースの三つ乗ったストレッチチャーを何故か押させられている。

——わたしは、まだ、あなたと何にも話してないわ。だから、期待も何も持たせられる訳がないでしょう！ それとも、わたしの頭は傷と血で模様いりなのかしら。

あなたは頭を手で擦ってみる、血はついてこない。後ろに誰かの悪戯した札でも？ ガラス戸を姿

見にして自分を映しても、赤帽みたいに歩いているあなたがいるだけ。背にぶらさがっているものは見えない。男がキューンと空中に吸い込まれたようにいなくなる。

——あの男の方はどちらへ？　あの方を連れ戻して下さい！　あの方が犯人です！

——あの人はいけません、あの人は被害者、重傷を負っているんですよ。それに、執念深いんです、恨みは決して忘れない。侮辱は決して許さない。

あなたはストレッチャーを押していく、病院の廊下を、いくらか赤面しながら動いて行くしかない。

——如何いう事故だったのかしら？　あの方が知っています、あの方はどちらへ？

通り過ぎる廊下のポーカーマシンの前にいるのは、あの男ではない。サボテンの棘のような青い光が出て、コインが飛び出している。女はあなたを、立ち止まらせてはおかない。

——何処までこれを選んで行くのですか？　何故、わたしが運んでいるのかしら？

病室のなかから沢山の呟きや、笑い声や、泣き声が聞こえる。昼だ、昼だとあなたには分かっている。それなのに、闇が白い歯を見せて、自由自在に動く女の口を運んでいく。

——もう少し、お願い致します、兄の病室まで。

——お兄さん？

——ええ、衝突した時に、負傷したんですよ。

——あの男の方が？ 入院しているんですか？

あの男の頭は白い包帯に包まれている、さつきは、白髪なのかと思ったのだけれど……。片腕を曲げているのは、骨折してること？

——素敵な方ね、爽やかなご親切を有難う。時々兄を慰めにいらっして下さいね。ええ、そんな、示談だなんて！ そんな、ええ、それはもう、当たり前のことですけど。

この女は曲者、わたくしの目付きは押さえ込まれ、見ることの疲れで首の骨が痛くなる。

——あの男の人は、わざと衝突して来たのよ。わたしは投げ出されて、身体を打った。あなたのお兄さんは、一足先に逃げたんです。その証拠に、このスーツケースの中、一つはグレーのパンツで一杯、一つは雑誌と本で一杯、もう一つは何かしら？ 人身事故の後で胴に繋がっている足で人並なグレーのパンツを穿き、潰れていない眼で普通の本を読める。そんな生活以上の生活があるかしら。

あなたは言いながら、どうしても、運んできたものから考えを切り離すことができないでいる。手で一つ一つ触って見る、バッグが紛れ込んでいないか？

——こんなに重いものを、一人で三個も持っていらっしゃったの？

——ええ、緊急事態ですもの、あなたのお力添えで何とか。

あなたは女の後ろに立ち、すぐにでも一発で倒す自信に満足し、その細い首と身体を一巡りする。

スーツケースをストレッチャャーから降ろし、下にバッグが潰れていないか見る。

女は広い眼の間を狭めて、スーツケースを開ける。

——知らない間に入ったんですわ、これですわ、あら、これも？

女は年をとった母親みたいな擦り切れた声をあげる。

——わかったわ。三つ目は戦利品、そうなんですよ。

——これも、あなたのもですよ！

女は、花模様の内張りのある、スーツケースの中から、大きな茶封筒を取り出し出している。フィルム  
の映像が重なり合う。あなたに脳か内蔵の写真からくるメッセージを読み取る力は無い。足元に虚空  
が大きく口を開け、黒白の斑に、世界の淵から身を乗り出している肉の島。島と島とが震え合っ  
た離れる。その隙間に、鼻先から呑み込まれていく人物が見える。

何かの具合で、この世界の表面に出ないでいる、未知の大陸。小さな止まり木に停まって、それ  
見ているのは誰？ あなたが眼を近づけるに従って、奥に何かあると信じさせるから、わたくしはフ  
イルムの裏を見る。裏には石油の流れた後のようなきらめきがある。

見る目の欠けた眼を持って、あなたは女を見詰めている。わたくしはその眼に思い切り、ものを言  
わせて、眼で聞く。

……お兄さんの交通事故と言うのは、口実なんじゃありませんか？

女はフィルムに指の跡をつけないように、危なっかしげに顔の前に掲げて、あなたの眼を受けようとはしない。どうみても男よりは年上に見えるわ。あなたは女が首に巻いているスカーフを引っ張りたくなっている。

——何のフィルムなんでしょう？ もう、これは助からない人の何かでしょうか？

——いいえ、わたくしのです。正直言つて、どうしてこれが、ここにあるのか？ 皆目分かりませんけど……。後、六カ月、ですよ。どうせ、言わずにすむことではありませんもの。あら、言えたわ！ こんなことで、普通、全身鳥肌が立つなどと言うけど、ああ、胸に火がついたみたいに、気持がいいことと、言うことは、やっぱり、あなたの方から、衝突したんですね！ あなたは絶望していた。それに間違いありませんね。

女の声が被さってくる。豹変した女は、男に向かって命令する。

——この女を警察に突き出さない！ 加害者は自白したわ。復讐の時がきている！

男は病室の仕切りの向こうで、インターホンに向かって、話している。

——海藻の臭気がする寝具ですよ！ 取り替えて下さい。

——ええ、海苔と、石油の臭いです。……臭気は仕方のないものでしょうか？ なら、本当に仕方

がないと言うことを、説明して下さい。臭気は僕の大切な持ち物に移っています、心まで石油漬になって、わかめのボロを引きずっているんです、弁償して下さい。

男はあなたをつけ回した挙句、衝突してきた。自転車ごと倒れた、倒れたのはあなただったのに……。わたくしも危なかったのに……、怪我をしているのが男だとしたら、どちらが被害者か、加害者か識別する手がかりがない。

この男は、絶対の自信を持って、わたくしがこの男を愛しているものと勘違いしていて、執拗にまといつき、わたくしの会社や家にまで入り込み、わたくしが否定すればするほど、虚言は真実みをおり一人歩きを始めた。計られたのは、わたくしだったのに。それが怖くて、長い間、仕事も放棄し、震えながら隠れていたのに……。

この男はわたくしの弟の通報で警察に拘束されたあと、会社を辞め、後に、こともあろうに、詐欺師になったと面白おかしく耳打ちされたことがある。いくらなんでも、あの誇り高い男が、そんなことで道を踏み違えるなど……。

この男にも、いや、誰もが、自尊心を持っていて、自尊心を叩かれたら、自尊心を護るためになら、何だつてするのだ。恨みは決して忘れない質だと、女はいった。男は復讐鬼になる。

わたくしは、あなたのなかで身を細める。



あ、あ、あの、ぬめぬめとした執拗さで、標的は、今も、わたくしなのだ！

男が振り向いた。

口から出た瞬間、意味を持つことがあったかも知れない声。何時も、わたくしの影の束、光の束でもあった独り言は、今、言葉にさえ、なっていない。

12

野方なみ、騙まし討ちは嫌です

八本の角を持った白い陽が、影に追い込まれて沈みはじめる。雨になるらしい。

——このごろ、わたしは浮かれているなあって、分かっていますよ。快調、何年振りかで生き生きと飛び跳ねている感じ。眼まで晴れやかで、双眼鏡みたいに遠くまで、とてもはっきりと見えています。けれど、それは、呼び出しの葉書を見るまでのことですね。どうして、葉書など下さったのでしょうか。何かの間違いではありませんか？

——それは、よかったこと。

——どうして、よかったなんて……。先生に健康を保証して戴かなかつたら、今度こそ癌になったと確信出来る程、具合が悪くなっていましたのに……。精密検査で、実際は、全く異常のないことが分かって、嘘みたいに気分が良くなっていたんですよ。なのに、葉書が来たと言う精神的圧迫だけで、様変わりに世界が違ってしまうのですもの、とても怖いと思います。

——あなたご自身で、病気でないと信じるのが、本当に、大切なんですね。

——病気ではないとおっしゃったのは先生なんです。病気でなかったから、気分も良くなったという、科学的根拠のあることですね。今のおっしゃり方では、病気ではあるが、病気ではないと信じることによって、病気でなくなる、そんな風に聞こえます。

——そう、思っただけでも構いませんのよ。

——だって、レントゲン写真を、何枚も見せて下さって、何処も悪いところはないって……。わたしが、そんな筈は無い、色々症状もあるのだからとあんなに申し上げたのに……。気のせいですよ、癌は症状のないのが特徴なんだからっておっしゃって、それで嬉しくて嬉しくって、足なんか、ずっと地に着いていませんでしたわ。やはり、おかしいんじゃないやありませんか？ 科学的根拠があるのに、そこまで覆るとしたら、何かおかしいんじゃないやありませんか？

——あなたは、野方なみ、たしかにご本人ですね。

——それとも、ノイローゼがこうじて入院の必要が出来たなんて、おっしゃるおつもりじゃないんでしょうね。病気でもないのに、どうして定期検診が急に必要になったんですの？ あの時、わたしが症状があると訴えていたから？ そうなんですね、それなら分かりますけど、びっくりしましたもの。如何して、この前、そうおっしゃって下さらなかったのかしら？

——神経質ですねえ、精神衛生にもってこいなんですよ、定期検診をするのは……。そうだわ、そんなに具合が悪いのなら、入院なさってみるのも悪くない。色々検査してみても、根本的に気分を良くしてあげたいですね。五階の北でしたら、空いていますよ。早速入院の手続きをいたしましょう。治療を始めましょうね。

——騙まし討ちは嫌です。

——でも、葉書一枚のことで、そんなに不快で苦しくおなりなんでしょう、その原因を究明してみましよう。

——ほんと、あの葉書のせいです。あれを見た途端、もう、人生めっちゃ、めっちゃ！

——気分が悪いのでしょうか！ そんな風に我儘をおっしゃるのは。医師は何時も患者に望みを持たせる為に、言葉を選んで話すのですよ。一時的であるにしても、天国にいるように楽しい日をお過ごしだったなんて成功でしたわ。

.....

——あなたは、お若く見えますのね、とてもお年には見えない、回復力だって大きいと思いますよ。お子様の為にも、長生きなさるように祈りますよ。

——今から、何で祈って戴かなければなりませんの？ わたし、死んでなんかいられません、でも、のんびり入院してもらえません。……あら……あれえ？ わたし、死ぬんですか？ 精神的なものなのに……。この病院では、そんな葉書一枚を使う不思議なやり方で、健康な人を忽ち瀕死の病人にしてしまうのですか？

——この程度なら、よくなります。その点ご心配には及びませんよ。今日は入院の予約をしてお帰りなさい。あとはお家に帰って、ご主人とご相談なさい。ご納得がいかないのでしたら、ご主人にお出でいただきたい下さい……。

——ひどいわ、死期を身内の者に教えたいというような、そんなことを、ぬけぬけとおっしゃって、何病だとおっしゃるんですか？ でしたら、この間のレントゲン写真を見せて、もう一度説明をして下さい！

——……出して下さるう！ 仕方ないわ、別に、隠さなければならぬこともないんだから。よく見て下さい。これ、あなたのお名前でしょう？

——この間だってありました。

——そう、じゃ、同じでしょう！ この間とおなじなんですから。とくと、ご覧下さい。

——これ、もしかしたら、この前のと、違うんじゃない？ わたし絵を描きますから、構図は覚えているんです。黒はもつと大らかに、中央を占めていました。違います、これはこの前の写真と違っていません。あなた、そんな、専門家でさえ、中々読めないものを？ 集団検診の場所も入っているでしょう！ 間違いないんです。我俣を言っていないで、さ、処方箋をだしておきます。

——わたしを神経症にしようと思っていらいらっしゃるのでしょうか、ご自分の手に負えないと、すぐに神経症に摩り替えてしまう。その為に父も母も祖母も手遅れになって死んでしまいましたわ。どんな時だって、神経症と診断するのはあらゆる病名を×印にした、最期の最期でなければなりませんのに。それが、医師の倫理でしょう！

——偉そうに！ まあ、いいか。他の病院にいらっしゃるなら、フィルムをお貸ししてもよろしいんですよ。

——……………。

——どうしたんですか？ 待合室はいっぱい！ 皆待つて待つてうんざりしています。ご自分の身体を他人の物だと言つて憚らないような、患者さんが何で、病院に来ているのか、謎ですね？

——ほんと、謎ですね。さあ、入院手続をいたしましょうね。考えるのはその後になさい！

—— 帰りましたか？ ああ、疲れた。参ったなあ、入院手続して行きましたか？

—— ええ、一応、していききました。大丈夫でしょう、あれだけ抵抗すれば、自分の病状に合わせて、思い当たるふしが出て来る筈ですもの。

—— でも、フィルムが違うなんて、冷や汗をかいたわ。じつと、見ていましたもの。

—— しかし、手続はして行つた、病状が進んでいるんですね。

—— おお嫌だこと。わたしが間違えたわけでもないのに、全く、こんな思いをするなんて。これなんとか、一人はかたがつくかしら。もう一人は、治療を必要としないのだから。

—— 黙っているとおっしゃって、すむことじゃありませんわ、心理的殺人ですもの。

—— 肉体的に健康な人は、精神的にも健康なものですよ。自殺はしません。自分に対しては、どんな場合でも楽観的なものよ。

—— いいえ、病気なんです、先生が直接、そうおっしゃったじゃありませんか。そうなれば、人間は本当に病気になるんです。絶望の末、新しい望みを持ち始める。死という前提があるから、禁じられていたこと、殺人、放火、詐欺、何だつて出来ませよ。若いから、復讐してから死のう、そう思いますわ。思い切りの良いものではないのよ。健康なら、自分が死ぬほどの病人だなんて思う筈がないわ。病気でうめきながらだつて、自分自身の心の抜け道を作っておくんです。うすうす、或いは相

当分かりかけても、誰も分かることを拒否するものなんですよ。

——ノイローゼを蒸溜水とビタミン剤で、治した実績があるからといって、人間の精神構造を余り、見くびってはいけないと思うな。

——でも、仕方ないじゃない。いまさら、どうしようもないんだから。どうして、そんなに絡むんです？別に、責めているんじゃないやありません。ただ近頃の人は、〇×に毒されて、あいまいであることが自然に見えるときでも、きつぱり、決断してしまふんです。わたしは死だと。

——そんな、昔の武士みたいにいさぎよい……………。

13                    あなたは、危険信号！

いまこの道を自転車に乗っていくあなたから見ると、ホテルは葉陰に隠れて見えない。

並木道の柳一本を通り越すと、それは葉陰から出て、白く大きく聳え、柳の数十倍の高さに見え、更

に進むとしだいに低くなり、また葉影に隠れ、並木何本か越すと、越した柳の何倍か高いホテルが現れる。これを繰返しながら進んで行くと、どんと大きく建物が出現して、もうどんな並木も追いつけない高さだ。そのくせぐんぐん高くなつていく空のせいか、建物の高さはまたも沈んでいくように見える。わたくしが見慣れた街を、あなたが行く。ホテルの前は人通りが激しく、何か所かに人垣が出来ている。萌黄色の光の中、片足で平衡をとり、巻きつくリボンを手で払いながら少女が来て、あなたの自転車を掠め、——危ない！——危険です！ 少女は今無事であることが、誰の眼にも明らかなのに、あなたを指さして、何回でも、——助けて！——危ない！ と言いつける。指を震わせ、眼を上げ、髪を振って。——助けて下さい、危険です！

——えっ！ 何ですか？

あなたは問い返すが、返事はなく、爪弾きにされているのか、助けを求められているのか、わからなくなり、その指の表情に首を傾げる。ふんわりとした平手打ちと言う形で、指だけはあなたを指さして、少女はくるりと向きを変え、途端、転倒してしまふ。

——立ち上がりませんよ。黒い石のピアスが、地面に触れるほどに覗き込む女がいて、——失神してきますよ、後頭部だから、どうかしら？

轢死体を置いて、電車が過ぎ去った踏み切りのように、しーんとする。勿論近くには次から次へ



ンジンが走って、音で一杯なのだが、それを消してしまう虚の音がすだれのように降っている。

——失神ということとは？

人を蹴散らすように踵を鳴らして駆けて来た大男が、少女の身体を揺さぶり、人形の臉を悪戯するように、手のひらで少女の目を撫で、たわんだ棒にして抱いて行ってしまう。

——妄想を隠す為に失神するんだと思うわ。あなたがいう。

——失神したと言うことは……。みんな、それぞれ、つむじ風のように見事な結論を下している。

自転車のハンドルに手をおいて、立っているあなたを中心軸にして、ひとびとは回り始める。危険を感じたとばかりに、後ろに下がろうとする者と、その危険がどんな危険であるか確認しようとする者の身動きで、動き方によっては、その危険が爆発しないとも限らないというように、極端な動きを押えながら人々は動き、あなたを見ている。夥しい眼があなたを撫でて通り過ぎる。あなたを見ることは何の意味もないことに違いないのに。あなたはためらっている。誰かの手をとろうにも、誰も手の届くところにはいない、眼に殴打されて、顔のしびれが場所を変えて動き回る。あなたを支えているが、自転車のさえ、みんなと鎖き合っているように思える。凶暴な獣の寝ているのを起さないように、音を立てずに、ゆっくりと逃げる。人間が人間を見て逃げるのに、こんな見方逃げ方があるなんて……。、あなたの身体の中、わたくしになり切れない、あなたのかけらが、或種の舞踊のように震え続ける。

輪が遠のき、人々の残した体臭がゆっくり揺らぎ、形を変えてただようが、遠のいたひとの輪に、まだ眼の煌きが残っている。落ち着くのを、関係ないんだから。

あなたは顔を拭く、見られる痛さにくらべて、柔らかいハンカチの肌触りは傷を保護する安らぎだ。たしかな頼りがいのあるものが、こんなハンカチ一枚。あなたは汗を拭き終わっても、しばらく自転車に寄りかかって、満身創痍の身を癒そうとする。遠巻きになったひとたちは、尚も眼であなたを見、足を地に打ちつけながらいく。それでも徐々に、あなたなどに見向きもしない、別の人々の流れと入れ替わる。あなたが打診してくる。

……危険である原因？ そんなこと、わたくしが知るもんですか！

わたくしはあなたの大砲のような心音なんかに負けてはられないから、あなたの扉にぶち当たり、入り込み、増殖する。

ためらいがちなのだが、無遠慮な言葉が、あなたの鼓膜を押している。

——あなた外国人？ でもないんでしょう。

少女は首を傾げ一重瞼なのに、顔を潰しそうなほど眼を見開いて聞く。

——わたしが何をしたというの？

——何んにも、そうなの、おかしくなんかないわよ。でも、何か違うのね、とっっても違うのよ。

——そんな筈無いわ。

——何と言うか、ほら、例えば、昨日と同じものを食べて、同じ勉強をして、同じ時間に寝て起きて、同じ服を着て、皆と同じ、友達も家族もご機嫌だというのに、気分が悪くてどうしようもない、それは訳のわからないものだから、医者だつて駄目、ああいうもの、あれと同じなのよ。あんたを見るのは怖くもなんともない、だけど、なんか違うのね、違うと言つても、眼が一つだったり、首が後ろ向きについていたりするんなら、安心できるのよ、一目瞭然だもの。それが見えないから、危険なの。見えぬものは一番危険だと皆んな言つたわ。あんたは何か違つていて、警戒心を起させるのよ。あんたは、そのことや、その理由を知っているの？

あなたより遥に背の低い少女は、額に依怙地さを浮かべているが、あなたがするどんな小さな動きにも、前後左右に必ず動く。

——なんのこともか、わたしには分からない。わたしが危険なのに、何故あなたはわたしの傍に来ることが出来るの？

——わたしは冒険好きなの、特別怖いものが好きなのよ。命知らずなんだわ。

——訳のわからない話。見えないものですか？ 見えないものなのに、如何してわたしを見て逃げて行つたの？ 見えないなら見るわけ無いじゃありませんか？

——見えないから見たんでしよう！ 決まってるわ。見えるのに改めて皆が見るなんて、こと、滅多にあるもんじゃないよ。

——今まで、こんなこと、一度も無かったわ。どうして今に限って、ひとに警戒心を起させるの？ 今まで誰も、わたしを警戒するなんてこと、無かったのに！

——こういうことって説明不能なんです。あんたにも、説明不能な何かがあるんじゃない？……。でなくて、こんなことあるわけじゃないよ！

少女の陰に何時ひそんだのか少年がいて、三メートル程飛び退く。飛び出している二つの眼が唇にのしかかり、ひゅーっと口笛を吹いてから横に広がる口、周囲を見、更に二三歩後ろに退く、眉をしかめ、眼を背ける。

——馬鹿ね、怖がらなくていいのよ。近づいてわたしに触っても大丈夫よ。そんな、今、天から降って来たひとを見るみたいに見ないで。何もしませんよ。わたしが何をしでかすことが出来るというのよ？

少年は情容赦しない。

——その女を見てみるよ！

またも新しい人垣は二つずつペアになった眼であなたを殴打する。まるであなたの血が頬から吸い

取られていくようだ。

——やめて下さいと思ったら。逃げるなら、さ、もつと素早くしてよ。わたしを一回りする逃げ方じゃなく、一直線に逃げて欲しいわ。

あなたは拳を握り緊める。突き飛ばされたようにひとは退いていく。誤解だ。誤解とも違う、誤解は解けるけれど、解く鍵がない。敵ばかりだ、本当のところ敵はあなたより強いのか弱いのか分からない。考えを超えたもの。……ひどいことをしているのはあなたたちの方だ。今、その危険をわたしに与えているのよ。

でも、もしかしたら、みんなは、わたしの中のわたくしの存在を嗅ぎわけているのかもしれない。そんなにも、危険な存在として……。

あなたはきゅつと体を引き締める。油断出来ない気がする。片足を自転車にかけ前屈みになって、自転車と一緒に後退りしたり前に出たりしながら、車道に向けて試運転する。脇の下、両足を開き、空気を入れられて浮き上がるように自転車で乗っている。

わたくしを嫌悪し、自分自身とさえ連絡が取れないあなたは、なんだかさっぱり分からないまま、胃からストーンと落ちたい。わたくしの息があなたの息。

並木の柳の枝葉が日毎に伸び、地面にとどき、風にゆすられて葉先が路面を掃くと、役所は首切り

役人を派遣するように、職人を動員して枝葉を短く刈り込んでしまふ、わたくしの街に、あなたが踏み込み、不可解に疲労していく分量、わたくしは元気になる。あなたの息がわたくしの息。

わたくしが無邪気そうに生き生き飛ばしていく。どちらへ行くか、あなたには分からない、どちらへ行こうか、あなたは迷うのだが、わたくしは迷わない。あなたが行く方向を思いついても、わたくしが反対の方向に向かわせてしまう。もう、ペダルを踏む気はあなたにはない。漕がないのに、シュツシュツと鳴って角を曲がって、青信号を見、前かがみになって……、漕いでいくのはわたくし。

あなたはわたくしの見えない肩に乗っている虫一匹、羽を動かしてブーンと飛立ちたいのに、羽を動かすより早く飛ばす自転車に乗って、羽は風にそそげ立って役立たない。ほつといて下さい。漕ぐのを止めて下さい。彫られた道路の粉が立ち上って来るわ。あなたは汗で一杯、物と言う物が汗をかいている、自転車のハンドル、尻の下、足の裏。自転車を止めると車輪の下でアスファルトがへこむ。汗で塗り込められているあなたは、何故か、自分の骨一本犬に啞えられ、逃げられたような気分になる。いままでと同じ実物大の人間として此処にいるのは、自分なのか？ 髪をぼうぼうと振りたて振り回したくなる、鏡獅子のように。両手を突き上げて、上の限界を見極めたい。秋の虫を奥歯や耳の中に入れてある思いだ。自転車を道の端に押し付け、道の真中に、真直ぐ立ちはだかる。負けてはいられないのだ。

——ここに来てみたいと、時々思ったけど、いやなことばかり想いだすわ。わたくしは往来の人が、木から振り落された落ち葉のように見える一瞬が嫌い、車が街の奥から、大きな黄色い眼を飛び出し、大蛇の二つ目にして這い上がって来るのが嫌いだ。

ブラシの毛より硬そうな睫毛で囲まれた、人形じみた男の眼が、鼠のように逃げる。

——ずっと見守っていてもいいわ、わたくしの知人が現れる筈よ、多分、ええ。

あなたの帽子は顎紐で背に負われている。あなたは自分の額に手を置く、陽で熱くなっていて、じりつとくる。額から手を放すと一緒に、男たちの視線が皮膚一枚貼り付けて、しゆるつと音をたてて、あなたから離れていく。重たいアルバムのページのようにならぬ男たちが去って、あなたは午後のおねりの中、足を浮かせて、止まり木をつかむ。サンダルから飛び出している爪を、ペダルより高く上げる。陽は高く、沢山の黄色い光が熱い抱擁をゆるめてくれない。

あなたを警戒して、尼僧は黒衣を靡かせて疾走し、掃除女はブラインドを細めにしてから、コンパスになつてクリーナーを動かす。あとは目的地をめざすだけ。

道を掃いて行く橙色が、拍子をとって踏むペダルの間から来て足に反映する。どこからもごくんごくん自足したような物音が聞こえ、あなたの中に、塩を吹いたお化粧鏡が引っ掛る。

わたくしの、死因を教えてください！

円を描き、真中に点を一つ置くと、あなたは風の背中に乗って、その地点に舞い降りる。点から急いで線を引き、街路をつくり、遠景を粗雑に描き、街の周囲を一巡りして、釣り上げる形をなさない。白は、わたくしの目的地だ。白い垣が何処までも続き、門があり守衛がいて、腰に巻きつけた鞆の中から、ペンと手帳を取り出し、あなたの持物や身体の膨らみを点検する。ここに来て見れば、ごく限られた視野しか持てないから、男の二つの眼によって、あなたは弾き出されかねない。

——面会ですね。守衛の男は当然のように決めてかかる。

——いいえ、面会、そんなんじゃない、わたくしは患者、入院していました。

——入院していたとは？

——十五階の七号室です。亜山ソラ。

年配の守衛が同僚に合図を送り、若い男はパネル上の入院患者名簿に入っている。



——ありません、そんな名前の入院患者はいません。咎めるような大声にあなたは竦み上がる。

——ですから、今ではなく、昔なんです、十年前……。

守衛は人差し指を起こし、人の良い微笑を、ゆつくり大きく育ててから、奥の方を指さし、その冷たい指を、あなたの耳に押しつける。

——失礼ね、あなたは本物の守衛さん？　ここは病院の正門なんでしょう？

あなたは当惑し、悲鳴を上げる。

男の指が活気づいて虫のような、キュキキュキと言う音をたてて、パネル上に、亜山ソラの名を打ちこんでいる。南まゆみと告げなかったか？　守衛の男は一字も間違わずに打ち終わっている。

——何の為に来たのか分かりませんが、頑張りすぎってものですよ。ここはお嬢さんの来るところじゃないんだ。先に行ったところで、担当の先生や看護師さんが、十年前と同じにいる筈ないでしょうが？

——TQさんに連絡してあります。わたくしの訪問について、お電話してあります。

——誰ですって？　TQは役職でして、十人もおりますよ。お嬢さんの連絡した者は、名乗らなかつたでしょう。素通りすることも、全く逢えないこともありますよ。

——わからないのかしら？　わたくしのことは、ほんの些細なこととして、この病院に於いて葬りさ

られたものなんです。この病院にわたくしの臨終の部屋があること、もう、お忘れですの。わたくしは幻影なんかではなく、生きている人間なんですから……。

——ああ、思い出しました。奥さんのことも、お嬢さんのことも、みんな……。

守衛はあなたを子供でも扱うように、片手で押しやる仕草をみせる。

——しかし、些細なこと？ それは危険だなあ。特に、若い娘、それも些細なこととなると……、帰ったほうが無難ですよ。重要な来訪者は予めここに連絡があるんですからね。

——TQさんが何人いるとおっしゃっても、わたくしの連絡したTQさんは一人ですもの、その方が現れると思うんです。

——ま、そうですね、結局、お嬢さんは目を瞑ったまま、その人を見つけることになるでしょうな。

お嬢さん、失礼！ お話し振りでは奥さんのようにも。

男は顔をほころばせ、白茶けた皺を幾筋もつくる。

——何故みんな困るようにして置くのかしら、そんな余地を無くすべきじゃありませんか。わたくしはただ、死因について伺いたいだけなんです。通して下さい。

あなたは、バッグ一個持って門の中へ入って行く。靴の踵に黒アゲハみたいな薄いものが絡まってくる。足を跳ね上げ、手に持っているバッグで払おうとする。

——それはあなたの影でしょう！ 気にしないで中に入って行って御覧なさい、その証拠に消えてしましますよ。

長い石畳を行くと、もう、影はない。白い建物の自動ドアを入ると半円形の受付があつて、女が一人あなたを見て顔を上げる。その後ろ、中央ロビーにはグランドピアノを囲んで、コンサートが開かれています。患者やその家族で、椅子席は満杯、立ち見もいる。とろとろと磨き込まれた床には、実体より鮮明な映像が華やかに動く。あなたは、そのことにこだわって、眼を放せないでいる。

——TQさんと呼んで下さい。わたくしは三十五歳のとき、この病院で亡くなりました。

受付の女は自分の手のひらの中にもう一方の手を突っ込んで、手首をしっかりと握りしめる。

——わたくしには、死の瞬間の記憶が無いです。わたくしは癌でも、癌細胞の勝利の雄叫びは聴いていません。自殺した記憶ありません。わたくしの死因について教えて下さい。それも知らずに生きて行くわけにはいかないんです。

——一気に話し、あなたは立ち眩んだような気分になる。受付の女は額に皺を寄せ、髪をわけ、指を耳の洞穴に這い登らせる。

——あなたの正体は何？ 十年前、三十五歳だったなんて……、それにしては、余りにもお若い。大学生、その位でいらつしやるんでしょう。そんなこと誤魔化しても、誤魔化しきれものじゃない。

——あのころ、わたくしは、生き続けるつもりでいましたから。

——近頃は、余り、そうは思わなくなったのですか？

——ええ、ですから、それを知る必要があるんです。死因を……。

——一体、何を考えていらつしやるの？ 生きていながら、不謹慎です？

——これ以上詳しく申し上げる気はありません。私的なことですから、ことによっては、もう一度生き直さなければならぬような……、わたくしにとつては、致命的なことですから。

時間が混じり合い散乱する。わたくしは間違いないか、どうかを、自問してみる。女の赤いしみをおいた腕がドアを押し、よそよそしい音楽が流れてくる。

——TQに連絡なさりたいのですしたら、廊下を右へ右へ折れていって下さい。そう、そちら、ご用件は切実なんでしょう、そう、お急ぎなさい。その先、ね、四十五歳だなんて、ご自分だって、信じちゃいないのでしょうか！

女はあなたを馬鹿にしたように、笑って、自分の手首を締めつけていた手を放し、今、あなたの嘘か企みを見抜いたと言わんばかりに元気になる。

——ああ、訴えの内容については、伝えておきますよ。でないと事柄を錯綜させてしまいますもの。

——それは、シグナルを乱して、頭の回線を混乱させようっていう、作戦だな！

ちらりと姿をみせ、暫らくして、再び現れた男の皮下脂肪の薄い瞼が、眼球に密着して光っている。その瞼が襞を畳んで徐々に巾を狭め、全開の眼球の中央に光る釣針をおいて、あなたを釣り上げ、見る間に瞼に巻き込んでしまう。

——ここにいらしたのは、何年ぶりです？ よく今までご自分を思い出さなかったものですね。遅刻ですか？ それが、十年！ 死者からの告発とは？ ……とっ、とっ、とっ、と、あなたの足元、足元ですよ、僕の眼鏡！ 壊さないで下さい。

あなたは慌てて拾うが、眼鏡は昼の太陽を直接覗けそうな程黒い。男は身体を揺すり上げる。

——残念だが……、嫌、率直に言いました。あなたのカルテはもう無い！ 保存期限の五年はとうに過ぎていきます。

……嘘ばかり。あなたは錆びた唇で、舌の上に溶けるわたくしの言葉を丸めている。こんなところで、あなたは時の深みからわたくしの数々の過去を掬い上げ、わたくしはあなたのなかを一気呵成に駆け上がる。

——どうして、わたくしのカルテがないのでしょうか。電子カルテなんですよ、消去しても消去出来る筈がない。塵箱に入ったのなら、呼び出して下さい。

——あなたの前提は始めの段階で、はや、崩れているんです。十年前は、電子カルテではなかったの

ですよ。残念でした！ TQだと名乗った男は、内心、凱歌をあげているに違いない。あなたは冷静になる。

——でも、昔のカルテだとしても、十年は保存して置くものだって聞いたことがあります。カルテのナンバーなら、覚えています。065432—8です。

——きみ、三十五歳だって？ 独身？ 別に、死臭もしていないようだが？

事務員の抱えてきた、褐色のカルテが、男の指先で弾かれる。次々照明を当てられていく、ファイルのなかで、癌細胞が育っていく、OP、再発、化学療法、転移。

わたくしは勢力圏を一杯に広げ、あなたを押し退ける。

——最期の入院時に何が起きたのか分かりませんか？ TQの眼が何かを捕らえた、男がカルテにのめり込んで、紙面が見えなくなった。

——気の毒だが、死因は不明です。

——不明、そんな、行き倒れじゃないんですよ！ 大病院に入院していたんです！ 医師の診療記録とか、看護記録もご覧になって下さい、抜け目なく。

——それは、無理！ 無理ですよ。抹消されているんだから………。

——と言うことは、故意に？ 病院の意志によって、そうなりますか？

——さあ、分かりません。そのほかにも、事件が絡んでいるようだから……。

——やっぱり、何かを隠しているんだ、と言うことは、病院側の手落ちで、そうなんですか？ そうなんですね、ソラと癌は共存関係にあつて、運命共同体であることを認識していたんですよ。むざむざ、息の根を止めるようなことは、しません。する筈がなかったんです。わたくしは、ずーと、そのことに嘯みつかれていたんです。

——あれえ、しかし、このカルテは亜山ソラの要請により、すでに開示済みです。九年前。とうとう、馬脚を現わしましたね。他人の名前を騙っても、直ぐにわかるさ。大体、おかしいじゃないか、亡くなった人が、今更、死因を知りたいなどと、矛盾だらけのことを主張して、恥ずかしくはないのか？ 目的は何だ？ この病院の格下げを狙っているのか？ 競争関係にある医療機関の生き残り作戦かな？ それとも海外の、あれかな？ 一体、何処の回し者だ。こうなつては、取調べを受けるか、警察に引き渡すか、精神病院に送り込むか、のどれかだな。どうする？

怒鳴るTQの唇から、無数の泡が飛び散っていき、ふつふつと疼きのようなものが脈打ってくる。興奮しているのだ。

——それにしても、こんな若い女を使って、何の作戦だ？ あの盗難事件と関係あるのか？ いずれにしても面白くなってきたぞ！ きみ、僕の取調べをうけたいなら、手心を加えてやってもいいぞ！

弟と連絡をとってもいい。まあ、暫らく一人で考えてみるんだな。

——九年前、ソラが生きていた？ そのことの方が問題だわ。病院は誰に開示してしまったんです、それが怖い！ わたくしはTQの手元に食いついていく。開示を要請した用紙の下の方に署名みたいなものがあり、艶子、漸くそれだけが読める。

——ソラはきみだったんじゃないか？ 辻褄が合っていないじゃないか？ 化けるなら、化けるで、もっとうまくやって貰いたいもんだな。

TQの去った、粗末な鉄パイプ製の椅子が二脚あるだけの部屋で、あなたの声でわたくしは叫び、あなたの記憶を蔽うわたくしの記憶が穴だらけだ。

軽率にも、わたくしより早く、亜山ソラが圧倒的な細胞の集塊として歩き、その名において生活を始めていたのだろうか？ わたくし以外のところでも………？

ソラ細胞は、OPの時に取り出されて培養されたもので、わたくし同様ソラの最期に立ち合っではない。開示を要請しても、なんの不思議もないのかもしれない。

三方を、灰色のコンクリートで覆われた部屋には、誰も現れない。真昼なのに、ガラスがとても白んで、水滴が一杯ついている。雨？ あなたが指で触れると、向こう側に付着したプラスチックのような粒だ、あなたは一粒一粒を、魔女の水晶の球を見るように覗き込む。透明な粒のすべてに、外の



風景が逆さに映っていて、どの粒にも櫂の大木が映っている。

わたくしは一体、なにをしに此処まで潜入して来たのか、如何してあんなにむきになっていたのか、わからなくなる。病院の責任を追究するつもりが、ソラが生きていることで、追及の矛盾が露呈し、病院の責任を曖昧なものにしていけないか？ あなたは眩き、あなたの中わたくしはたじろいである。あなたを形成している実質と、わたくしを形成している実質との、牽引融合を妨げる何かが存在するのだ。

TQが現れないのは、わたくしの取調べについて、事態は拗れているのではないかと早くここから逃げなければ……。弟と連絡をとつてもいいとは？

あなたが立ち上がると、櫂を映していた水滴が、突然窓ガラスから一斉に身をよじつて下降を始め、道路上を行く虫の背に飛び乗って移動を始める。雨がくる。

地面にはオレンジ色の大きな文字で、立入禁止と記されている。文字の髭先にあなたは靴を置いて、ノートの上を歩く虫のように、一文字一文字で回転する。あなたは北から西にゆるい下降線をたどり、掘り起こされて崖になっている、整地前の荒れ果てた土地を左手に見ながら、その家の庭に入り込んでいく。わたくしが生乾きの木の枝を燃やすと、泡が滲み出し、木肌についたまま自転しながら、鈴なりになったものだったけれど、今、庭のどの木も何故か泡を吹いている。あなたは枝の先で泡をつつく、一つづつ息の根を止めるように。ふわふわひくひくするものを潰し、太らせ……。

瞼の間に太陽をおいて庭の木々を見上げる。どの木も葉を虫に食われ葉脈だけになって、煙のようにぼうぼうとそそげ立っている。夏だというのに、白髪を逆立て、しわがれ声で棒立ちの集団がいて。

——スゴイ！ 若いあなたは恐怖心を押しやり、好奇心で一杯になって、わたくしの心細さを押しさえ込む。

浮いている水草のような蔓草の階段を踏んで、あなたはゆっさゆっさする。ぷんぷんと壁に絡んでいる茎の纏れを解いて、あなたに手繰り寄せられる蔓草は八方で一斉に眼覚めたようにざわざわする。

あなたは蔦草の波に浸り込み、自分の意志によって此処に来ているのか、わたくしの動機によって

此処に連れて来られたのか考えている。昔に騙されない自信と、昔まで騙しおおせる自信を持って、わたくしの家に足を踏み入れる。渦巻いている蔦草の中、ドアに書き付けられた赤い落書。誰の手によって書かれたものか分からない、ソラ、ソラ、ソラの文字を、あなたは慌てふためいて消してしまふ。まるで、あなた自身が書いたものだというように。

柱から剥げ落ちるニツケのような匂い。わたくしは柱に息を吹きかけ、頬を押しあてる。一つの身振り、一つの眼差し、あの頃つけたドレスや、スカート、着せ替え人形のような、少女がいて、父と母が代わる代わる腕をひろげ、その胸に抱き締める。拗ねた弟が、父の上着の裾を引っ張り、高い！高い！を要求する。幸福な家族は今でも靄をまとい、宙ぶらりんのまま笑い転げる。その声が空中でくるくる回りながら、あなたを追い駆ける。玄関、応接間、座敷、仏間、居間、寝室、家中に不連続な記号が、ばら撒かれ、あなたは靴底で埃を押して廊下を滑っていく。子供の頃磨き込んだ廊下を滑り歩いたあの要領で。壁に手を這わせる、スイッチは普通にある、あるのに指がその上で何回跳ねても、灯りはつかない。応接間には百号の無残に破られた油絵が傾いている。一階廊下の終点、西陽の入る明るいキッチンで頭蓋骨を手元に引き寄せるように、あなたは南部鉄瓶を持上げる。鉄瓶の口の奥に向かって口笛を吹き込み、水道の蛇口をひねる。蛇口は、かすかな声を出す水は出ない。蛇口に溜まっていた、乾燥しきって錆び臭い空気が出て行くと、蛇口が受信機であるかのように、声

が華やぐ。あなたはポリウムを極大にするために蛇口を捻りつつける。蛇口から来る声だけでなく、響きまでもが、わたくしを根底から揺すり始める。あなたは蛇口に口を近づけ、唄を口ずさみ、舌を遊ばせ、水道がまだ地下に連なり、街の角々を曲がって水源まで走り抜ける歌声を想像する。

——思い違いをしないで、わたしが愛しているなどと。それが怖くて、それが怖くて、隠れているのに。わたしは女王、目覚めるのは明日……。唄いながら、肩越しに後ろを見る。戸棚の構造が変わっていて、その上を片羽とれた蛾が一匹、埃を払って飛び回る。

あなたは床を靴で引つ掻いて、床の揚蓋をあげる。下は暗くて見えないが、放射されてくる匂いが長い束になって伸びる。

わたくしは陰険な執拗さで地下を点検する。父の出版物や、金庫の入った箱が掘り出された土は、くぼみ一つ残していない。あなたは屈みこみ、ガラスかけ一個を摘み上げ、途方もない激しさで揚蓋を閉じる。指先で血球が膨れ上がると、身体の中、無数の捕縄のようなものが赤い光芒に向かって急いでいく。わたくしはその動きに手の施しようがない。どの細胞も塊も叛乱を起し、あなたが、わたくしを引率していることに対する抗議でいっぱいになる。父や母や、弟を追って、わたくしが息せき切ってわが家の中を駆け回る。盗品はわたくし自身だ。

……ここはわたくしの家、あなたは知らないでしょうけど、孤立していたのよ、一人で住んでい

たの。都市計画に反対し、立退きを拒否して。ついさっきまで、ええ、ついさっきまで、ここにいたの。此処は、今日ではないのよ。

二階は、くしゃくしゃになった、セロハン紙みたいだ。書斎と子供部屋と、客室の区別もつかず、投げ込まれた石ころや、割れたガラス欠けが、踏み躪られた父の蔵書の上に、層をなして積み重なり、風が傍若無人に吹き抜ける。わたくしは夜な夜な都市計画賛成派の攻撃を受けて、ベッドの下で震えていたのよ。あのガラスの割れる音の凄まじさ。

——死ぬ！ 出て行け！ 売女！ 怒鳴り声は、段段、卑猥になって行つたわ。耳の中に指を食い込ませていたの、涙は不思議に出なかった。戦争そのものだったのよ。敗北と、無念の繰り返し。わたくしは父母の遺してくれた思い出の家をどうしても、護りたかっただけに、人間は群れると凶暴になるのね。怖かった！ 今振り返れば、自分達は犠牲を払っているのに、何年もそのまま放置されるのは、我慢ならなかったのでしょうか。生活の問題だったのね。弟は疎開させたの、怖がって、早く手放してほしいと泣いて頼むのよ。早くそうしていたら良かったのかも？ でも、今も、ここに、我が家が存在するという事は、ね、どっちでもよかつたのでは？

クリスマスに弟と、ロメオとジュリエットを演じた、バルコニーは蔓草に覆われて、その姿はない。これが、夢見ていたわが家か？ 絶望と恥が大きな顔で居座っている。

わたくしが塙の中で見つづけてきた、わが家には、水を含んで光る壁と、丸窓、モザイク模様のガラスと、自由に動き回る円柱があった。我が家はあそこにあつて、もう、ここには無い。此処にあるのは、無力に自然に向かつて、権力に向かつて、全部を差し出した白く乾いた敗北の家。今、不思議な縄張りの間を潜り抜け、父母の思い出を必死で護ろうとした娘の遺品として、十年経つても、片付けられもせず残っている。重なったガラス欠けにざくざくあるのは、何時の太陽か？ こんな処で、こんなに増殖して……………。

今、数人の男が何か叫びながら、通り過ぎる。ちびた細い繊維を絡げ合つて……………いや、手を組み合つて近くに來そうだ。

—— 亜 亜、亜山ソラ ソラ ソラ、そう聞こえるにしても、何の危険もない。どんなに変貌していても、此処はここ、逃げる小道や、潜り抜ける穴の一つくらい、わたくしが一番よく知っているのだからあなたが足を置くと、蔓の階段は、アコーディオンのように八方から音を引き連れて、伸び縮みする。嵩だけ大きい空気のように、家も蔓も樹も、ひとつづきの風になり、あなたは足の踏み方を誤つて躓いてしまう。眩暈？ わたくしはあなたと腕を組み、身体を支える。塙に沿つて横歩きをする。扱られた土地に建物の鉄の骨格がめりこんでいる。色分けされ膨らんだ道路が、芝生を持上げる先に、新しいビル群が無表情にそそり立っている。

わたくしはあなたを抱いて、素早く動く。追跡の足音、四方で足音が足音に乗ったり、飛び越した  
り、殺し合ったりしている。

—— 第2部 ——

16 南まゆみは、現れませんか？

—— 如何です。例のひときたんですか？

頃になって、びくつくことはありませんよ。殺した訳じゃなし、……いや、これからのことはわかりませんがねえ。僕だって、殺人犯が死体の数を数えるように、数えていますよ。それが思い当た

るふしがあるんだなあ。名医でも勲章のように死体を胸にぶら下げているんですよ。くよくよしなさんな。

——わたしは殺しなどしていません。正真正銘のわたしの誤診でしたら、覚悟も出来ていますが、こういう間違いは何ともやりきれませんわ。

——はは、ははは、でもやっぱり誤診なんじゃないかなあ、色んな点において配慮が足りなかったんでしょう。そう考えて、覚悟することですよ。

——先生は誤診だなどと、勘違いをしていらつしやいます。別に何かが起っているわけでもないのに、何もしらずに、ちよつかいを出すのは、よしてください。

——そう、先生は何も知らされていないの？ そう言うこと？ なかなか用心深いんですね。医局じやみんな知っていますよ。別に隠すほどのことでもないんだなあ、みんな注意するようになるんですよ。前者の轍は踏まない、これが大切ですよ。

——ほっといて下さい、どんな尾ひれをつけていらつしやることやら。

——しかしこれが又怖い。チームの信頼関係が崩れたら、なんとも大変なことですよ。自分以外のすべてを、疑って掛からなければなりませんよ。試験検査員、レントゲン技師、医師、薬剤師、看護師、栄養士……。それだけでなく、薬品、薬剤そのもの、機械器具の欠陥ミス、疑い出したらこれはま



た、切りもないんですよ。出来るだけ自分で確め、自分の手でやる。それにしても能力も時間も、機構もそれを許さない。どうします？

……………。

——その上一番信用出来ないのが、自分自身ときていますよ、おまけにクランケこれがまたお化けだ、お化けについている家族、これもまた信頼に足りません。それに事務、これも場合によつては、命取りです。その上、医学そのものの未熟、どうなさいます？ 先生、つまりそう言うことですよ。

……………。

——合法的な意味で殺人者なのだから、合法的な意味で詐欺師も許されているのでしよう。まだまだ、人間のストックは持ち合わせているんですから。

……………。

——寿命があるのに死ぬこともないってところか。……………そのかたは他の病院へ行っているのではないでしょうね。ところで、ものは相談ですが、そのクランケが来たら、僕に任せて下さいませんか。先生の悪いようにはしませんから。そう、南さんの場合、楽天的になられるより、悲観的になられる方が、もう一つ危険なんです。

——何か可笑しい、誤診じゃないって申しましたでしょう！ わたしは、間違いを事前に発見し、そ

れ以上の間違いが起らないよう、手配したんですよ。感謝されても、まるで、問題を起した張本人みたいに、扱われるのは我慢ならないわ。診断とは全く違う、機械的ミスなんです。それが、別に、なにがどうなったと言うようなことではありませんのに、こんな些細なことに、首を突っ込むこと無いでしょう！ 何を企んでいらつしやるのです？ 何か、怖いみたい。兎に角、彼女はまだ来ていませんわ。まさか、先生の方に行っているのではないでしょうね？

——考えすぎですよ。

——放っておいて下さい。まだ、先生のお力をお借りする必要はありませんもの。検査を勧めただけですから。

——それでいい、変なからくりをしないで、それで押し通す。

——……………。

——もしかしたら、やはり、誤診じゃなかったんじゃないやありませんか？ そのひとは癌だった、誰も間違いはおかしていない。若くても癌になるひともあるんですよ。

——……………。

——弱気になりましたね、そうですね、何も無かった。それでいいんです。あとはよろしいですか、僕に任せて下さい。わかりましたね、先生はお顔に出ますから……………。

— さあ？ 大丈夫、わたくしで何とかします。

— 南まゆみさんは現れませんか？ 葉書は出したのでしょね。

— ええ、でも野方さんよりずっと遅れて出しましたから。

— やはりシヨックを受けたのでしょうか？ ご家族もいらつしやらないのね。

— もう、亡くなっているのですしたら、自殺だから、遺書を残したに違いありませんわ。

— 遺さなかつたとしたら？

— 死体は見つからなかつたとも、考えられますけど。変死体でも解剖されなかつたのでしょうか？

— 遺書を残して解剖されたとしたら？

— 心配しすぎですよ。テープを持って脅迫にきた男がいたそうですね、何者ですか？

— かなり長身のいい男だった、どうして、あんな若い男が絡んでくるのか、皆目わからないわ。毅然たる態度をとりましたから、大丈夫よ。屋上で一寸した隙をみて、後半の音を消しておきましたわ。

— あれつきり、自分のミスで消したと思っっているのか現れませんわ。

— そんなに、簡単にいくかどうか？ 南さんに、今からでも何とか……。

— そんな、入院を勧められる度に、ひとが死ぬの？ そんな思いつめ方をするものではありませんよ。

——間違いの生じたことを、新聞広告したら、南さんの目に入るのではありません？

——あなただけ善良になりたがる。まあ、復讐とか、殺人とか妙な事件にならないで良かったと言う  
ものですよ。

——亡くなったと断定なさるのですか？ 喜んでいらっしゃるのですか？

——じゃ、どうすればいいと？

——行方不明なんでしょう？

——葉書は戻って来たんですよ。

——どうすることも出来ないじゃありませんか？

——そうね、危険は去った。

——なんの危険が去ったのです？

——わたくし達の危険、そう、はっきり言ってはいけませんの？

——いいえ、責任を問われる事態になったのですよ、そのことがつらいのに。

——ほっとしていらっしゃるくせに！

——テープを持って来た男はどうなります？ 何時、どんなかたちで………？

——消したと言いましたよ。

——それが、何になるでしょう、ひとの口に蓋は出来ませんもの。

——ひとの口は悪くて、何時も噂で一杯ですわ。閉じることなんて無いんだから、何を言っても、証  
拠物件がなければ、相手にされないでしょう。

——世間をそう、見くびることが出来ますか？

——とにかく、いま迄のところ、何も無い。

——ひっそり、ひとりの命が亡くなったのであっても？

——推測でしょう！　ところで、野方さんの方は如何です？

——手術をして、もう、四、五日もすれば、すっかり治ったものと信じますよ。直に退院して働く気  
になりますよ。普通の患者と同じです。問題はありませんわ。

——南さん、旅行でもして、民間療法でも治そうと考えるのでは、ありませんか？

——楽天的だなあ。僕を除けものにするのは損ですよ。

——又、攪乱するんですか？　この執拗さ？

——心配なさらないんですか？

——あなたが考えているほど、患者はあなたのおっしゃることなど、信じていませんよ！

——そういえば、医師自身が、自分を信じちゃいないなあ？

——それは、そうです、でも………。

17 切れ味を、試していただきましょうか！

あなたが、一段毎に高さの違う階段を昇って行くように、躓きかねない不規則な時間割の一日を過してみるのは、他人の虚を突くという目的の為。といって、一歩ずつ違う歩きかたで、一歩は駆け、一歩は立ち止まると言う、小刻みなやりかたは不可能だから、あなたは一人疲れてしまう。

殆どのひとは、日時という枠を持っているから、あなたが不規則と言う野蛮な暮らし方をしていれば、彼等とぶつかることなく、無事でいることが保証される。

あなたには誰にもあなたの足跡の上を歩かれたり、肩に触れたりしないような、脈拍一つさえ不整脈であるような、不規則で歩調の合わない世界で暮らしているつもりなのだから。

それなのにあなたは人を待つて駅の前にいる。駅員の不審そうな顔、あなたを見る見方が次第に大きくなる、始めは左の眼尻に漸く引つ掛る程度に、それが段々角度を増し、まともにあなたを見る。あなたは見られる度に帰りかけ、帰りかけては、又戻る。電車が着く度に駅は一塊ずつ客を排泄し、

僅かな空白を置いて、四五人が付録のように弾き出される。次の電車が入るまでの二三分の間、あなたは居場所の不自然さにどきまぎし、駅員にまたも観察されてしまう。

彼は来ない。男の帰宅時間は無数にあつて、どの時間も、どの時間も、帰宅時間で一杯になるのに、彼はどの時間、どの一秒にも乗つて来ない。

夜の空は地上の光を照り返して、真っ白な雲を空一杯に押し広げ、その上、ポプラが黒くひるがえっている。夜であるのに変に白けて、ひよつとしたら向こうで、舞台の仕掛けが崩れかけているのはという、危惧の念をあなたに抱かせる。高い木から降る白い綿毛が、あなたの額や臉を飾っている。

電車の間隔が延びていき、駅は終電車の最期の客を吐き出している。彼は来ない。見失ったのか、逃げたか。十年間の隔たりで彼のやり方が変わったのか、彼はあなたの前に姿を見せない。

刈り取った雑草の山が、片付かないまま残されている公園広場、暗がりのところどころに人がおり、大柄の男が前の車輪の直径が一メートルもある車を、ゆっくり押しながら広場を横切っていく。顔には炎の隈取の或る紙のお面をつけ、時々口笛を吹いて。

あなたは自分の顔を見たように、どきんとする。この日、あなたはひどく誇張された化粧をしている。化粧などしたこともなかったのに、臉を青で鳥のように隈取り、眼を瞑って眠ったとしても、眼を開けると見える程の大きな眼をしている。彼が見つけたとしても、この顔の言い訳など出来そ

うに無い。からかい好きの娼婦のように、あなたはその車の前に出たり、横を歩いたりする。車がたつき、前に立ててあつた竿から、ぶらりと幕が垂れ下がる。街の光を受けて、太い文字の線と色が風に揺れ、あなたは身体を傾けて、それを読む。

「Z印のナイフ500円！ けんかに負けつづけて面白くない者へ！」 明るいところに出ると、字は白い生地にピンク、ブルー、パープル、幾つもの色でぼかし、黒でくつきりと縁取られている。あなたは仮面の穴を見詰め、あなたを押し動かす衝動に従っていく。仮面は、三角の道化て悲劇的な眼で、絶えず回りの様子を伺っている。あなたは跡をつけているだけで、何処に来たのか分からなくなっているのに、自分をいらだたせることもしない。あなたはわたくしの正体を突き止めるために、わたくしの支配下に移って見ようと決心しているのかもしれない。思いがけないほど歩いて、わたくしは足に重い血行を感じ、あなたの奥に結び目が作られるのを見る。湿った反射光がその小さな三角の眼の穴で光るから、あなたは一瞬、躊躇ってから……。

——これを下さい、ナイフを！ と言う。

——手に取って見ますか？ 吟味しますか？ その挙句いらぬ等と言いませんか？ これは物騒なんですよ。お客さんの手に余るでしょう。

仮面の男は売り手でありながら、あなたの反対側を向いてしまう。後ろから見ると首根っこに振れ



た皺の束になってスカーフが巻きついている。

——これになさい、この方がずつと役立ちますよ！ 男は自分のつけていた仮面を素早く取り外して、いきなり、あなたの顔にかぶせる。

あなたはそれを外そうと必死になるが、眼の穴から眼は外れたまま、張り付いた闇の中から抜け出しようが無い。

——どうしたの！ 取って下さい、悪ふざけが過ぎるわ。

あなたは仮面の眼に自分の眼を重ね、男を覗き見する。前にもこんなことがあったと思う。何時も新品の今とは、いかないのかも知れない。

男は黒眼鏡のレンズをシャツで擦ってから、荷台の上の小さい箱からナイフを一丁取り出して、切れ味を見るときも、脅しともとれる手つきで、幕の中央を裂いてしまう。

——こんな切れ味ですよ、だから、危ないって言っているんだ。

あなたは咄嗟に口を開け、すでに口を開け過ぎたために叫ぶことが出来ない。車の後部に二つある小さな車輪の一つがあなたの靴の上に乗り上げている。あなたは片足飛びで、押さえられている足を揺さぶってみる。漸く靴を脱いで、押さえの取れた足をあなたは取り戻す。裂けた幕の真中を風が通り抜け、幕は人をなぶる狐の尻尾のように揺れている。

——良く切れるよ！

男は出し抜けにあなたの胸にナイフを近づける、あなたの手と唇が強張る。切りつけられたら……  
……。震えるにしては怖しさの不足か、あなたは震えを立ち消えにする。

——さあ、歩いた！ 歩いた！ 車輪が跳ねていく。眼の穴が小さい。何かしら頑なものがあなたの中であって、逃げようとはしない。男が車を止め、幕を引きおろし、遠くから送られてきた牛のようななり声をあげる。暗い裏街を行くが、恐慌のなかにいるらしい激しい言葉が、そここの家に配され、喋り捲られている。前の大車輪が跳ねる。

——僕は今まで、気違いじみた様相ばかり見てきたんだよ。全く訳のわからない誘惑に乗って、馬鹿な目に逢ってきたのさ。しかし、最近は誘惑の方が、僕から逃げていくばかりだ。僕が誘惑を追っかけるような立場になってしまったってこと。どんな誘惑に勝ったとしても、負けたとしても、僕って人間は、今迄の僕以上になる筈がないと分かったのよ。どっちになるかな、勝負は？

あなたは、もう、あなたではないような三角の目と三日月形の黒い口で、腹の坐った声で男に話しかける。

——わたくしが、あなたにどんな期待を持っているか分かります？ 何も見ないでいるよりは血を見たい、そう思っているのよ。見ることが出来るかも知れないと言う期待を持っているんです。バケツ

一杯の湯気をあげている生血を、わたくしは見たことがある。平気でした、バケツに鼻を寄せて臭いを嗅いでも見ましたわ。新鮮でしたから、失神したり腰を抜かしたりはしませんでした。そんなバケツを持って、あなたのお手伝いをしてみたい。

——何だって？ ご立派！ 気遣いかな？ 敬愛を込めて、有難うと言いたい。しかし、この場合、ちったあ不安を込めた言い方のほうが、ふさわしいんじゃないかな。礼儀とかはいらないけど……、僕は僕だが、あなたは誰です？ 仮面はどうやら変な意味を持っていくようだ。仮面はあなたにべールをかけるような、僕の心遣いでもあるってことさ！

——もうちょっと、この身体にも利用価値があるんだけど、そんなこと、構わなくなったわ。早く、わたしのバケツ一杯の血が見たい！

あなたは若さにまかせ、わたくしを差し置いて過激になる。

——口かせが必要だな。もっと聴く、温和に、行きましようや、ここんところは……。

——わたしを年だと思えます？ それとも？

あなたは調子に乗り、両腕を広げ、薔薇色のスカートを翻して回転する。

——さあ？ わたくしは此処に來た目的を思い出し、和らいでいる二人の間に割って入る。

——わたくしは、あなたのお父さんを知っていますよ。今日は車で、あなたのお父さんを待ち続けて

いたんです。あなた、父親の顔を見て御覧なさい、酷薄な口元を見て御覧なさい。思いがけなかった形相が現れるでしょう。美しいお嬢さんを写真に撮ったら、狐が一匹撮れていたと言うような。眼のレンズ次第なんですよ。あなたのお父さんはきつと、何人か殺したことがあるに違いない、いや、殺している。あなたと違ってきちんとスーツを着て、ネクタイを結び、態度も立派であったにしても、必ずその手で人を殺し、それを誇ったことがあるに違いない。黙したまま語らないにしても、自分の発意ではなく、命令であったとか何とか言い逃れるにしても、本当に殺したのだと言う事実、罪の意識さえなさそうだという事実、とても怖しくはありませんか？　あなたは父親と一緒に鏡に映ったことがありますか？　おそらくない。あつたとしたら、父親の姿は無いが、殺人鬼の姿に映っているに違いない。どんな柔和な顔つきをしても、殺しをやった人物でありながら、何の咎も受けずに生き続けている。仮面を被っていたとしても、よく透けて見える時があるものです。父親の世代の背負う暗さだなんて、甘やかしてはいけませんよ。あなたの母親は可哀想に、殺人鬼の子供を孕み、産み、また殺人鬼に仕立てました。そして、あなたの奥さんも殺人鬼の子供を孕み、産み、また殺人鬼にするでしょう。あなたのお父さんを見て御覧なさい、あの酷薄な口元の辺りを……。

——僕の父親ですか？　何故、あなたの待っていたのが僕の父親なんです。偶然に行き逢っただけなのに、何故そんなに結びつくんです。どう見てもあなたは僕よりお若いのに、可笑しいじゃありませんか？

せんか？

——さあ、おわかりでしょう。あなたにどんな期待を持っているか、何も見ないでいるよりは、血を見たいのよ。見ることが出来るかも知れないと言う、期待を持っているんです。バケツ一杯の湯気をあげている、わたくしの生血を見たいんです。あなたもバケツに鼻を寄せて嗅いで御覧なさい。

あなたの言葉だけが往来している小路に、裏木戸を開けて人が出てくる。声を立てずにナイフ売りの男を威嚇している人物と、笑っている人物がいる。

——そうだ、狂っているんなら、幻想や幻覚をいとおしんでやってもいい。ほら、ね、もう、何をどう頑張っているか、わからなくなったでしょう！

男は言って、落着かなげに両腕でハンドルを挟み込んでいたが、手に持っているナイフを高々と翳してみせる。

——お客さん、よく切れるナイフですよ！

なんなら、このおねえちゃん、切れ味を試して頂きましょうか！

櫛の大木の下、あなたは古びた墓と墓の間に何が立っているのを見る。櫛の葉を何枚も何枚も透して届く光は、光であっても漂って、何百年もかかって、老僧の肌に染み込んだかのようにだ、葉陰の外は圧倒的な夏の光だから、そう見えるのかもしれない。それは生あるものとは見えず、かって、生きていたことさえ信じ難い。だからあなたは、無視して老僧の前を素通りしている。八十五、六ともすると、九十七、八になっているのかもしれない老僧はヨーカン色の甚平を着て細い脛を丸出しにしている。ゴム草履の足の指は萎えて長く、枯れた小枝を五本束ねたようだ。

老僧はあなたに近づき、わたくしがお参りしようとしている、墓の前に立ちほだかってしまう。襟元が大きく弛んで、縮れた皮膚が胸のあばら骨にへばりついているのが見える。

あなたは二、三步後退りする。

——駄目です、墓参りはまかりならん。あなたのところは、仏に対する務めを何一つしていなさらぬえ……。

骨と皮の干からびた身体では、何処に空気を含んで、何処から大声を発するのか、音源の正体さえ

掴めない。あなたは面食らって息をのむ。老僧は指を伸ばしたまま、腰のあたりを叩いている。その手つきは地中から這い出したセミの子が樹にのぼり、背を割る営みに似ている。老僧の大声に鳴き止んでいた油蟬が、あたり一杯鳴き始め、呼応して墓石の下でさえ鳴いているのが分かる。あなたはセミの発生機構をヒントにしてその大声を了解する。仏に対する勤めとは何を指して言うのか思いも及ばない。老僧はそのままの姿勢で前に出る。あなたは後退しながら、首なしの石仏に足を当て、すべすべした小石のある池の方へ位置を変える。セミの声は急上昇し、また下降する。わたくしはこの僧を見覚えていて。いいがかりだ。わたくしと仏との関係のいかがわしさの指摘………？

——何故なのでしょう、お墓参りは自由でしょう、何時から、許可が必要になったんですか？ 何をなさるの。それはわたくしの家の墓であたためではありません。わたくしの父がいます、母もいるんです。わたくしだっている筈ですから、わたくしのお墓です。失礼は許さないわ。

——ならん、許さん！

眼もくらむ光の束が、今、丁度そこに落ちる。わたくしの推進力が、遮二無二強くなる、押さえても、前に出たくなくなってしまう。一步前に出る、老僧も一步進む。変質者みたいにむやみやたらに墓に突き進んでいいものか………。

——ああ、思い出したわ。あなたは、何時も家に、庭の薔薇を貰いに来ていたじゃありませんか。あ

の和尚さんでしょう、あなたの鉄の音で目覚めたことだってあるんですから。

その墓石の裏に刻まれていますか？ 亜山ソラ、行年三十五歳、命日はいまから十年前の九月四日です。そう、記されていますでしょう。そういうことを全部暗記していらっしゃるんでしょう！

——そんなものは無い、長い間世の中を見続けているから、誤魔化されはしない。ソラはあなただ。あなたはソラだから墓参に来たんだ。

今、この墓地に風のそよぎがあっても、それはつややかなあなたの頬のくすぐったいそよぎだ。わたくしは心を落ち着けるために、次のそよぎを待つが、次のそよぎはやって来ない。あなたはためいながら、老僧に問い返している。

——やっぱり、気になるんです。仏に対する勤めとは何のことですか？

——要するに、彼岸や盆に、寺にお布施を包むことじゃ。仏は泣いておるわ、せめて、それ、それだけ、子孫の勤めとして、やらなくちゃならん。わしは、ずーと見張っていたんだ。十五年だ。今度こそ、捕まえたぞ！

——ゆすりですか？ 死者の代表としておっしゃっているのですか？ 大元締めとして……？ 勤めを怠れば、死者は迷い、半分蘇るのですか？ それは困ります。わたくしがお布施を包むだなんて……、そんなこと出来ません。わたくしは死んでいるのですから。



——死んだと？ どなたが亡くなったんだ？ 亡くなった場合、先ずわしに知らせるのが筋であるにもかかわらず、わしに知らせずに、誰に……誰に知らせたんじゃ、ものの筋道が分かっておらん、けしからん！

老僧の首に握り拳ほどの腫瘤が、大きくなったり、小さくなったり、ぐるんぐると回転したりする。腫瘤が飛び出るところだけ肌がつややかだ。首にこんなに大きな臓器があったらどうか？ わたくしは、わたくしである誠めを強くする。

老僧はもう一つ踏ん張り、あなたを捕まえ揺さぶろうとする、老僧はわたくしを警戒してはいない。負けないわ、そんなことで負けてはいられないのだ。大きな声で反撃に出ること。それにしても、わたくしが真に蘇ったとしても、本当に逢いたい人とこんな風にしか逢えない矛盾が胸に来る。

——このお墓とわたしとは、縁もゆかりもないんですよ。何時誰が死んだのか、死なないのか見当もつかない。和尚さんなら、ご存知なんでしょう、教えてくださいさいます。

幾分おどけて、あなたは立っている場所をちよつと変えてみる。しおらしく五歩引つ込む。少し遠くなったあなたは日影に入っているのに、老僧は目に手をかざしてあなたを見ている。

——仏に対する勤めをしない気なら、墓を他へ移して貰おう。この十五年この墓を訪れたのは、あなた一人だ。あなたが一番縁が深いということになる。わしにも、あんたは見覚えがある。

老僧は体を振り、侮蔑するようにあなたを見る。

——どうだ、金を出すか、墓を移すか、どちらかにしてもらおう。

墓石の表面を風と光が滑っていき、反射光があなたに映る。

——この墓地は母が買ったものです。あのころの相場では考えられないくらい高いお金を支払ったのでしょうか？

老僧は口をもぐもぐさせながら進む。いま、とても細い木洩れ陽が一本、音をたてずに稲妻のように落ちて、僧の片目をぐしゃぐしゃにする。あなたは不当な辱めを、わたくしが受けていることに憤慨し、この時とばかりに反撃に出る。

——あなたにとつて、骨は骨であつて、他の何ものでもない。霊は存在しないし、何もかも無意味だと分かっているのね。わたし達が骨や壺に抱く怖れを笑っている、笑っているけれど、口に出さない。それを利用してゐるから、骨に囲まれて平気。あなたの命令は命令とはなり得ないでしょう。樹は大きいのだし、その上には光があるのだし、枯れ枝が石と争つても、援軍はどこからも来ない。神も仏も現れない。

あなたのうなじの周りで揺れている長い髪、赤いサンダルの白い脚が、何かの部品が回転し始めたというように、ステップを踏み始める。サンダルは激烈なあの世のものとか、思えない色だ。

——ここは、わしの土地だ、売った覚えは無い。その証拠に、土地の権利書を持っていないだろう。

貸しただけのことだ。

僧の背筋が伸びる。するめの足のような、乾燥した太くて強靱な神経で全身を支えているのだ。くすんだ色の墓地が派手な斑点をばら撒いて、わたくしを急き立てる。

——仏がわたくしを呼び寄せるのを知っていて、待ち伏せしていたのですか？ この墓は大穴、納まるものがないから、わたくしが無断居住し始めるのではないかと、考えたのですか？

——人権蹂躪です、訴えます！

あなたの口から思いがけない言葉が出て、わたくしは首を竦め、竦めた後で肯定し、もう一度首を竦めたくなるのを止める。

——訴えます。

——そうするがええ、そう、出来るもんなら、何とでも……。

あなたはゆっくり歩く、僧は後ろからついて来る。裏門から出ると、僧は長年開いたままになっていて、錆び付いた両開きの扉をギーギー音を立てて閉じる。壊れた錠前を、地上に落ちている有刺鉄線の切れ端を拾って巻きつけ、不器用に捻り上げる。

——訴えるなり、何なり、したいようにしなせえ。……こうして置くからな、もう、一步も入っちゃならん！

念を押ししている僧は指の腹に棘を刺しながら、血の雫の滲む気配も見せない。その手は骨と皮膚の褻が複雑に重なり合い、指先を保護している肉が落ちて、爪の形と関係なく三角に尖っている。

あなたはゆっくりと自転車に乗る、車輪の下、黒いアスファルトに落書の文字が、ひん曲がっている。トンボノバカ。

19 人権擁護局に、訴えます！

——ここでも檀家はダンカと言うのが、正式の名称っていうことになりませんか。

——はあ、そうです、調べてみましょうか？ 檀家、檀中、檀徒とも言う、と。

——何年前、どう言う理由で檀家になりましたか？

——此処にあればいいと、どうしてわかりましたか？

——門から何メートル歩いた時、あなたは住職が立っている姿を認めましたか？

—あなたと住職は何メートル離れており、住職の位置は、その周囲の二物、櫛の木と首なしの石仏と何メートルずつ離れていましたか？

—まあ、我慢して下さい。

—墓参りを妨害されたのは、どんな具合にでしたか？

—通路を塞ぐようにして、あなたをじりじり裏門の方に追い立てるように、歩いたということは……。

—あは、はは、通せんぼをするように、手を広げて追い出されたというわけだ、つまり……。

—手を広げたというほどのことではなく、こう……何となく……肩を張るようにして、じりじり……。

—は、ははは、そりゃ、けしからん。

—墓というもので、寺に首根っこを握られた気持になりましたか？

—あなたは信者ですか？

—信者でもない者に、寺への奉仕を要求しているわけですね。

—何の努力もしないで、金を集めるやり口ですか？

—いや、あの人物は珍しくやっっているんだよ。断食会を開いて相当な犠牲を払っている。赤字だと言

っていますよ。だが、水だけで赤字になるものでしょうか？

— さあ、どんなものでしょう。

— 氏名、年齢を。

— 南まゆみ、二十一歳。

— 亜山さんでは、ないんですか？ ソラさんでしょう！ 電話でそうおっしゃった。そう簡単に名前を変えられては、困りますね。

— 亜山ソラ、四十五歳。

— またまた、ご冗談はやめて下さい。お気持ちは分からないではありませんが、総て、秘密にされますから、ご心配いりませんよ。

— 死んだ時なら、三十五歳でした。

— お母様ですか？ あなたのことを、お聞きしているんです。

— それなら、二十一歳。

— どうも、こんがらがりますな。

— 暑さのせいですか、あの住職も暑さのせいで頭がくらくらしたと、言っていましたな。

— 待って下さい。順序を間違わないようにして下さいよ。ええと、もう一度、住職がこの墓を何処

かへ移してしまえ、と言ったんですね？ 裏門の扉を挟んで言ったんですか。

——お墓の前？ 困りますね、また、お墓の前の場面に逆戻りしては。お墓の前で言ったのか、歩きながら言ったのか、門のところで行ったのか、頭の中でよく整理して述べて下さい。混乱しては書けませんよ。

——悪かった、仏の前で懺悔した、そう、住職は言っていましたよ。何と言っても九十五歳だそうです。九十五歳なら、何を言っても構わないのですか。仏の前で懺悔すれば、ことがすむのでしょうか。わたくし達の誇りは？

——たしかに、その通りです。只老人だから、昔のしきたり通りしないものがあると、合点がいかないんですよ。悪い人間じゃない、九十五だから、合点のいかない部分があるんですよ。

——普通の人が生きていかなければならないように、あの世でも金があるのでしよう、多少納めてみる気はありませんか？ ……管理料を……そういう気持になれませんか。

——実のところ、永眠って言っても、年々歳々払らうものを、払わにやらんらしい。ただではどうも。人間、誰でも死ぬんだ。意地を張っていても、墓に入らにやらん。どうかな。

——入るのでしょうか、わたくしもですが？ 入っていないのでしょうか？ もう、死んでいるのに……と言っても生きていますけど……。

—— ははあ、内面は複雑ですね。……まあいいだろう、自発的に気持ちよく金を出せるようになるまで、仕方ないんじゃないか。

—— それで、あなたは、具体的に如何して欲しいのです。

—— あの、そんなひどいことを言つてはならないと、こう、厳しく。

—— 厳しく？　そうか、ああ、勿論、住職には厳しく言つておきますよ。しかし……。

—— 死者を侮辱したり、墓参を妨害した場合、何と言うか、罰金とか、懲役とか決められているのでありませんか？

—— そう、おっしゃるが、此処は裁判所ではないので、罰することは出来ませんよ。とにかく、お墓を移さなくてもよいように交渉しましょう。懺悔したのですから、住職に対して、ざまあみろ！　つていう態度はとらないようにして下さい。

—— 誰に懺悔したかつて？　仏にですよ。仏と言うのは、本堂にある仏像でしょうな。だけど、なにしろ、九十八歳、老い先短いのです。

—— ……？

書記の男は新しい用紙の真中から大きく渦巻きを描き始める。内から外へ拡がり、外から内に吸い込まれ、動きつづけて止まらなくなる。激しくペンが動き、綺麗に丸く、輪はみんな等間隔。あなた



は眼を背ける。これは催眠術にかける動きよ。わたくしがノックすると、あなたは立ち上がり優雅に座りなおす。

渦の紙は破つては捨てられ、紙屑籠に溢れ、落ちかかっている紙屑の上に投げられ、紙屑の皺に次の紙屑の皺が引つ掛けて、辛うじて床に落ちない。

——ところで、本当に、あなたはご本人なんですか？ いや、はや、本ところ……。

あなたは調停員の男から、顔を背け、いつ何時、下に落ちるか危うい様子の紙屑のなりゆきを見、それがあなたの命に拘りでもするみたいに、

——ああ、あつ、落ちる！ 声を上げ、すばやく、屑入れに手を添える。

——わたくしは父母に逢いに行くように、墓参をしたんです。逢いたいと何時も思っていましたから。あの方、和尚さん、慾が深いんです。だから死ぬのが怖いんです。修業が足りないんです。

——あなたよりもですか？

書記は渦巻を描くのを止め、あなたに質問を発しながら、紙を丸めて屑籠に捨てるが、紙屑は他の紙屑を引き連れて床に落ちる。

——あなたよりもです。

あなたは暫らく考えて、比較する相手を摩り替えて答えている。

——まあ、これ位でよろしいでしょう。あなたの言い分は分かりましたが、まだこちらとしても、判断出来かねるところもある、相手の言い分ももう少し聞いた上でいざれ連絡しましょう。帰ってよろし調停員はぼやけてきた顔をあげて、すっぱり言い、靴を鳴らして一気に立ち上がる。

——しかし、厳密な意味では、まだ………人権侵害事件として受理されるかどうかは、これから検討される筈です。大分時間がかかりますから、そのおつもりで。

書記は取り繕った声でつけたす。あなたは前のめりのかたちでサングラスをつける。

——仏に懺悔して下さったのでしょうか。それなのに、何故まだ受理されないの？ ああ、分った、清書が大変なんでしょう？ きつと！

じつと見据える書記の重苦しい眼を、あなたは笑顔で跳ね除ける。

——こういうところって何だか可笑しいと思わない？

空は本当の空で、わたくしの思い浮かべる太陽は回るが、あなたが紛れ込んで行くのは天体ほどに大きい温室のようだ。

しっかりとした夜景の上を、もう一つの夜景が震えながら飛ぶ。左側の窓ガラスに右側の夜景が映って、ダブっているのだ。バスから降りる。匂いが突風のように来て、あなたの鼻を突き飛ばしている。曲がり角はホットドッグの匂い。あなたはわたくしと声を合わせる。

——そんな、匂いの曲がり角は、風で飛ぶわ。目印にはならない、犬ではないのよ。

前に行く女の声が、あなたの耳介にぶつかって跳ねるから、もう一度聞こえる。わたくしは髪ばかりになって宙に拡がり、あなたは大地を震わす大股になって、女の脇を通過する。丁シャツの伸びた襟首、あとを歩く少年の、不完全そうな鎖骨の間で接着剤の臭いがしている。

あなたは街を突切って真直ぐに歩き、街を囲んで四角に歩く。どのドアの向こうでも、あなたを待っているような、そんな気がする。

——此処のひとたちは中流なんですよ。そこで、何をしています？ あっちへ行つて頂戴！ あっちへ、早くつたら早く。このあたりは、此の頃ついていないんですよ……盗品を投げ込まれては、窃盗犯。子供を連れ込まれては、誘拐犯。死体を運び込まれては、殺人犯。爆弾を投げ込まれて、地獄行

き。中流だから妬まれているのね。若い人がうろろうしていたら、すぐさま、110番されてしまいますよ……さあ、早く逃げるのよ！

老婆は体を派手に揺すって、まるで自分が石垣であったかのように、嵌り込んで見えなくなる。

あなたは街角で逡巡しても、結局、わたくしの方向だけを護って吹いて行く。口の周りに赤く黙している謎をおいて。

——ご主人は不在です。留守のものですから、何とも……、はい、それはそうですが？

中年の女は当惑したように、ふくらみの無い胸を、両腕を交差させて締め上げる。

——何やかや、理屈をつけて来るものには、ご用心ですよ。ええっ？ ご主人ではなく、この、わたしにですか？ あなたの弟さん、わたしがその家の使用人だったですって？

空気の深みがこの辺りでぐくと増し、覗いている魚は口角しか出さない。

——あの家、薦のからまる家の住所も、父の名も、母の名も、弟の名も、家の間取りも、その他どんな詳しいことも。それを言えるということは、ね、そうでしょう！ 弟は何処にいるの？ あなたは弟に依頼されて、カルテの開示を要請したんでしょう？ わたくしはそれを返して欲しいの。

——あなたは、お若くてそんなに可愛いのに、どうして、あの方をご存知なの？ あなたがあの方である筈なんて、絶対にあり得ないのに……。あなたは、誰？ あの方が、あなたに話した？ ま

さか、そんなことが……。死んだ人が話すわけ無いんだから！

女は口尻をゆつくりと下させる。

——教えて頂きたいんです。あの人は何で亡くなったのですか？ カルテには何とあったのですか？  
もしかしたら、ご覧になっているのでは……………。

あなたは裏木戸の僅かな隙間から女を眺め続ける。女は暑いのに、襟を立てて木戸の隙間よりも肩を狭めていく。

——あなたは どうして、あの方そっくりのお召し物を着ていらっしやるの？ いいえ、そっくりじゃないけど、同じ趣味だわ。あなたは何もかも承知の上で、わたしに何か暗示をかけようとなさるのね。あなたはあのかたの、何なのかしら……………？ こんなところでは、回りの人の目もあるし、やはり、困ります、お引取り下さい！ 困るのはわたしの方です。早く帰って！ ……それでもなおと、おっしやるのなら、猫のように、庭の中に潜り込みます？ そう、といっても、庭の……………。女は押し殺した用心深い声を出し、左右に素早い視線を走らせると、闇の中に吸い込まれるように、見えなくなる。あなたは女を追って庭の中へ踏み込んでしまう。脇から潜入したわたくしには、この家の全容が見えてこない。使用人の手引きで、他人の家に入り込むのに問題は無いのだろうか？  
——弟さんは、始めのうち、本当のことなど、生年月日さえも、わたしには教えて下さらなかった。

わたしなんか、女の数にも入っていないみたいに……。

——艶子さん？　ね、そうなんでしょう。

わたくしは押えがきかない。十年の年月が、女を容赦なく脱水機に掛けても、目印の、鼻の脇のほくろだけは、中央に産毛をおいて、変に黒々と生氣さえ帯びているのだ。女は相当なショックを受けている筈なのに、もう、既に秘密に加担しているかのように、多弁になる。

——でも、あの方にしても、弟さんにしても、孤独で、どんなに危急のときであっても、この世でただの一人の援軍も現れなかった筈ですよ。あの二人は、他人には全く興味がないんじゃないかと、そう思っていましたもの。なんというか、そう、お高く止まっているというか？　内気かどうか？　他人の顔なんて、ほんとは見たこともない。それなのに死んで十年も経った今、何処から、あなたは現れたんです。それも、ご本人の名まで騙って……。

女の口は動きつづける。——何を？——誰から？——頼まれて？　ぽきぽき話を折り、半分を口のみこみながら。

——何をそんなに、堂々巡りなさるのか分からないわ。教えて下さらないのなら、わたしをご覧になっていて。わたしが、まだ、水玉模様に見えるにしても、わたしはソラ！

女の広がった、しかし、荒れ果てている視野の中央を、あなたは姿見にしてあなた自身を驚かせる。

女とあなたの眼の格闘が始まる、目を先に離したら負け！

わたくしは、あなたの中でソラをこね、ゴム状に引き伸ばす。胸をどきどきさせ、正体を口から押し出し、もつと、手袋を裏返しするやりかたで、全体を外へ。

——貴方が、ソラさん？ 死んでいることを、生きているというのなら、生きているんでしょね。そうですよ、本人に聞いて見たのなら、とことんご本人に聞いてみればいいことじゃありませんか。

ええ、生きているのなら、あなたに話したのなら。ソラさんがあなたなら、聞くことなんてない筈ですよ。わたしの方が、お聞きしたいくらいです。

あなたの耳は青い翼になって吹きちぎれそうさ。

——わたくしはOPで取り出され、ソラの最期に立ち会っていません。わたくしの記憶から、欠け落ちている部分を埋めたいのです。不明の部分があるから、開示された記録を見たいのよ。弟が開示を求めたと言うことには、それなりの理由があったのでしょうか。あなたは、それを聞いておられたのではないかと……………。

——それなら、窒息死！ 原因は不明とありましたわ。

女は無造作に言っただけ。

——窒息死だなんて？ 何故？ どうして……………。そんなことは断じて、許さない！

あなたは後の言葉を飲み込み続ける。あなたとわたくしを、逆しまに見て、女は愕然とする。

——…ソラさん！

——あなたは、知っているのね、弟から聞いたことの総てを話して下さい。弟は今、何処にいます？  
先ずそこから話して下さい。

——今は、アメリカにいらつしやいますよ。癌の病理研究をされているとか……。それはソラさんに勧められたとお聞きしました。何もわたしから、お聞きになることもないのでは……。弟さんはご自分がついていて、こんなことになってしまったと、気の毒なほど落ち込んでいらつしやいました。

………始め、ソラさんが癌だと分かったとき、弟さんは、日本で屈指の専門病院に入院させたいと願われたそうです。それなのに、亡くなられた前日は休日で、大病院にありながら、まるで孤島に置き去りにされた想いだつたと。いくら待っても医師は来ない。当直の医師をと頼んでも駄目、鎮痛剤を、睡眠薬をと頼んでも、主治医に厳禁されているからと、何もしてくれない。ソラさんは一睡も出ずに苦しみ抜いた。こんなことなら、孤島にある方がずっと増しだと、そのうえ、こともあろうに、医療ミスです……。

——医療ミス？

あなたも女も、わたくしの怒りに煽られて呼吸困難に陥っている。



——ええ、朝方。よく、朝まで耐え抜いたね、先生はもう直ぐいらっしゃるよ。と弟さんがソラさんを褒めてやると、とても嬉しそうに、にっこりされたそうです。その直後だったと……。

——続けて！

わたくしは、女の逡巡を遮るように、腕をあげる。何の為に苦しみぬいてきたのよ。心の底で、瀕死の白鳥がじたばたするから、苦い胆汁が逆流してくる。

——若い看護師が、痰の吸引を始め、ああ、舌が邪魔だなどと言うものですから、弟さんは、何か押えるものはないかと、パニック状態になったと。でも、そのときは、無事で、ほっと胸を撫で下ろしたといえます。ところが、二、三分ほどして、ソラさんが掠れた声を出したんです。弟さんは、二度目の吸引を阻止するつもりで、——また、吸引するんだって、どうします？ と、ソラさんに問いかけたそうです。ソラさんがまだ、意思表示もしないうちに看護師は、ソラさんを丸ごと奪い取るようにして、又も、吸引をはじめたのです。管を引き抜いたとき、ソラさんは口も睨も閉じていました。瞬間、痰がとれて気持が良くなったのかと、弟さんは思われたと。それが、最期でした。……ソラさんはもつともつと生きるつもりでいたのに、その一日一日がどんなに大切なものだったか、その無念さを想って……泣いていらっしゃいました。お姉さんが大好きだったのですね。というより、愛していらっしゃったのですよ。ソラさんは、それを知っていて、奔放な生活をしていらっしゃるよう

に見えましたけど、本当は他人に心を許したことなど、只の一度もなかったのではないかと……。

一瞬、時間が停止し、わたくしは失神したのかもしれない。他人に、軽く見透かされている。これが、死後でなければ、立入り禁止の、このふわふわした部分に、無神経に触れたこの女を、わたくしは惨殺していたに違いない。いまだって、死後だからと、完全に割り切ることなど不可能に近い。だって、わたくしは生きているのだから。

女の頬骨の上、突っ張った皮膚に、夜更けの庭園灯が光っている。

——……もしかしたら、弟は、その為に……、わたくしが、永遠に生き残る道を、選択したのでは……？

——それは、どういうことですか？ どういう意味？ もしかし……。

——何か思い出すことでも？ 何か事件があったとは？ 盗難とか？ 弟は、それについて、何か話していませんか？

——いいえ、そんなことは、お聞きしていません。あの病院はひどい！ 弟さんはそうおっしゃってはいましたけど……。医師不足看護師不足のひずみは、とうとう、こんな大病院にも現れ、医師は責任を回避して、総てを後送りにし、看護師たちは、夜、優しい仮面を剥ぎ、乱暴で凶暴でさえあった。耐えられなくなって、味方を探し、弟がない！ 弟がない！ とソラさんは叫ぶ。する

とベッドごと看護師に引き回される。何の説明もなしに、いきなり、病室から、廊下へ、見ているのは天井だから、目が回ってしまふ。ソラさんは混乱してまたも叫ぶ。殺される！ 殺される、助けて！ 助けて下さい！ ベッドは廊下から、処置室や、看護ステーションに行つて、放置される。弟さんは看護師にひどい扱いをさせない為に、ソラさんを護るために、夜の付き添いを申し出たと。そんなお話は伺いましたけど……………。

——あの病院でソラは手術を受けたんです、ソラから取り出されたものは、何処に？ 何かトラブルがあつたとか、話してはいませんか？ 病院が謝罪したとは、お聞きになつていないのですよ。あなたの身体中の柔毛が直立している。あなたは沈黙を守り、気丈にわたくしを支え続けている。あなたを支配している純情無垢な心根が眩しい。

——病院が謝罪などするんですか！ みんな末期癌のせいにしたんですよ。あの家を役所に引渡す醜の人が何人も何人も来て、何かトラぶつておられるようでした。返せとか、訴えるところで。弟さんは、できるものなら、やつてみる！ 訴えるのはこっちの方だと、笑つておられましたけど、それがなんなのかは……………なんとも……………。

突然、暗闇から、何ものかが飛び出して、庭園灯を引き倒した。何かの犯罪に巻き込まれたのでは？ このあたりは犯罪にさらされていると老婆は言った。ヤクザか、国際的犯罪集団か？ 嫌、この家の

主が戻って怒っているのかもしれない？　あなたは素早くテーブルの下に位置を変える。頭上を密度のある黒い蠢くものが影を引き連れて跳ぶ。この臭いは？　五メートルは跳んだと思う。女は訓練の行き届いた運動選手のように、大きく飛び退いている。闇の中、眼だけがペアを組んで、派手にきらめくから、あなたの縮み上がった顎がきりきりと音をたてる。

——猫を怖れていては、この家では生きてはいけない。あら、思い出したところだったのに、とんだ邪魔が入って……何か、そう、ゲームみたいな感じで、思い出したわ、弟さんは、忘れるな！　何かあった時には、そう、おっしゃったんです。

——SR 850、 S850、 ソラ 777 と……。

荒々しい黒い手が女の口を塞いでいる。わたくしは絶句する。あなたはテーブル上のジュース缶を掴み投げつけると、夜の街に駆けだしていく。追っ手を警戒して、わたくしが足をもつれさせる。もしかしたら、命中したのでは？　もうすぐ、追っ手が来る。手に持っている缶の揺すれる音が、あなたの泣き声に合致し、ジュースは柔らかな唇であなたの舌を吸い込み、舌の裏側から、あなたに流れ込んでいく。あなたの呑み込んだジュースが、言葉のしぶきをあげるから。あなたは、その言葉を復唱する。

——SR 850、 S 850、 ソラ 777。

ひっそりと、ふんわりした危なっかしさ、もとの口に戻れない声のように、ソラは浮いている。この部屋は生命をスチール製の台の上に示しながら、それについて説明しようとはしない。台の上、四角の培養壇に封印された、そのものの上下を時間が分れて流れ、小さな渦一つつくらず、また合わさって流れ続けるのを、あなたは見ている。

頭のとっぺんから少しずつ前に、あなたは傾いていく。

——この生命に対して人間の尊厳を感じますか？ 何を話しかけているのか分りますか？

自分の洋服のなかのことであるような、その四角に封印されているソラが、わたくしに生き返ってくる。自分の秘密の部分に巡り逢っているのだ。

あの、はれぼったい目、大きい口、捲れた唇の先が届いている鼻、ピアスの穴、わたくしが鏡の向

こう側で、ガラスに顔を押しつける。

それは角の丸い四角だ。厚みで六面体だけれど……、見るのにきらきらする目はいらぬ。細部が少しずつ見えている、この顔には慣れてる、そう思う。わたくしがこの顔を見るのは習慣のようなものだ。

あなたは四角の中に何を満たしているのか見ようとする。わたくしにはあの中に、充ち切った記憶と、満ち足りなかった記憶とがあつて、見えてくる細部はとも全部にはなり得ない。

わたくしは現在美しく若い、はつとして引き下る。あなたは乾いた目で眺めている。四角の四つの角に手足を見ようとする、短い手足が、いや、角があると言うべきかも知れない。僅かに手足を思い浮かべることが出来るのにほつとし、何処から生まれてきて、どこへ、どう言う風に行くつもりかを聞きたくなる。あなたは半分ベそをかいいて、笑い声を立ててしまふ。検査員が部屋に入つて来る。

——笑い声は邪魔になるんでしょうか？

——そつと笑おうと笑うまいと、関係ありませんよ。でも音に対する反応は多少あるんですよ……、あつてもなくても、まあ、本質的には変りないでしょう。

検査員は荒っぽいことを、さも優しい心の持ち主であると言わんばかりに、ゆつくりと言う。

——まあまあ、お掛けなさい。腰掛けて御覧なさい。

少し分ってくる。あなたは歩数を数えながら、四角いソラに近づく。冠座型に並んだほくろは妙な角度で眼の谷間にある。四角いソラとわたくしの間で、言葉なしで通じる総ての符号。そこでそうやっていて、死んでいないと言い得るのか？　ここでも、わたしの中で生きているの？

そのほくろを顔として、わたくしであるソラ。

あまりの思いがけなさに、笑ってしまった反動として、永遠にわたくしが生き続けることを願った弟を想い涙ぐんでしまう。馬鹿ね、甘ったれなんだから。

わたくしはソラで昔のソラと良く似ていて、わたくしであるあなた。あなたとわたくしは若々しさを誇りながら、似ても似つかないものでもある。あなたはソラの株を見出して、深い同情を込めてそれを見ている。

わたくしは、あなたの口を開けて泣き、指を喉に持っていくと、限りも無く深く生きていると感じる。涙の顔を手で擦ると、夢を見た後のように、弾力性の或る頬がけろりと手のひらの中で新しくなる。

ソラを融かそうとする涙が頬の上で、ころり水滴をつくり水滴は寄り集まって、蓮の葉の上の朝露のように銀色になって転がり落ちる。その頬、これを全的に所有しているという輝かしい感情がわたくしに来る。まだわたくし、つまりソラを浸透しきれないでいるその部分を、わたくしの製作物であ

るソラに、手渡さない唯一の現実として頼りにしてしまう。蛹が蝶になるような咲き開く陶醉が、涙と共に拡がる。

あなたは火傷しそうなほど熱いものを、絶え間無く分泌しているのに、頬には涼しい水滴を止まらせて、あなたはソラを頼りにし、ソラなしには立ち行かないような、矛盾した魔域に捉えられる。これは何？ あなたの頭を狂わせようと言うソラの最後の悪意が込められているとも。

——今日は、何年、何月、何日かしら、旧知に会った記念の日なの。

——旧知？

——雑誌のグラビアで見たことがあるのよ。SR 850 あの時はおショックだったわ。

部屋の中に霧が立ち込め、室温が低くなっている。

——ここでは、みんな日々の境界を、うかつに過してしまうのですよ。そんな些細なことは、厳密に考えない方が間違いない。いずれ、どの日も、明日や昨日であるのだし、今日なんてしよつちゆう今日なんですから。

検査員があなたを振り返った。あなたはむきだしの肩を、幾分狭めて腰掛けています。

——不思議ねえ、そうあると言うことが、誇るべきことなのねえ。

白いソラは薄っすらと眼を開く、中には白目しかない。



— だから、何の値打ちもないものを置くみたいにはいかないわ。

あなたは屈託もなく軽やかだ。

— 共同生活をしていく上で、想うのだけど、わたしにも良心がある。そう思うだけでもとても楽しい。

— そんな！ 共存共栄とはいかないのよ。

— ほんとよ。でも、それがなんでしょう。このひと？ いま、薄っすらと眼を開けたわ。眼を開けていたって、何も見えないのでしょうか。

— 静かに寝息をたてているときと、いない時があるみたい。

— 寝息を立てている時だって、片目の開いていることが多いのよ、きつと。

— 記録してみるかな？ 感じ方の問題だけど。

他の見学者が何人かいて、騒々しくなる。

— 記録すべきことではありませんよ。プライバシイですから。

検査技師はノートとペンを結び付けた紐を振り回し、鉤型に曲げた中指で速度を調節しながら、肩から膝迄、風車のように回転させる。

— 蟻が顕微鏡の下を歩いています、このベコニアはいけませんよ。良く見ればアリマキでいっぱい、

このせいで蟻がでるんです。鼠算なんてものじゃないね、処女生殖なんでしょうか、もう、殖える殖える。

——SR 850 は癌細胞なんですよ。見えないのにベゴニアはいりません。初めての見学者は時々こういうことをする。持ち帰って下さい。

これから、培養される壇の口に差し込まれた管から、食糧が送り込まれるのを、あなたは拍子をとって見ている。ガラス管のなかをぼたぼた薄紅色の流動食が落ちている。

——甘いものが好物だってほんと？

——猫舌だってほんと？ 熱に弱いんだって？

あなたは四角いソラに触ってみたくなる。触ってみたら、空気や光と同じ位、実体も堅さも持っていないのかもしれない。実際にはどの程度に、ソラ細胞があなたと拘っているのか確める為に。

わたくしに対して誰かが、恐ろしいものの言い方をしている。

——これが何だと言うのよ。見えないものなんて怖くもない。

わたくしは何も言わないことに慣れて、小さな木椅子に坐って、四角いものを見ている。片目のあいた細く白い澄み切った眼に、わたくしは何の表情も浮かべてはならない。この部屋に見えるものは、慰めの無い身体ばかりだ、あなたの開いた掌を叩く。SR 850はそこにある、ソラの名は記号化

されて。わたくしは隠れている。わたくしは誰にも見られない、それなのにわたくしだけが実体を持ち、SR 850 の核心もわたくしになる。ソラという固有名詞？ で結びつけられている近さと遠さ、ソラの欲望が一杯あなたの顔に反映している。

ソラの四角に不敵な爪が見える、視野の深さを……。何オングストローム……。何千オングストローム迄。細胞レベルから分子レベル迄、良く見る。膠原繊維、細胞膜の発芽、ウイルスのもつれ、勿論DNAの枝分かれなんかじゃない。わたくしはそれをもつと良く見たい。

——電子銃をぶっ放せ！

——フィラメントの寿命が終わっているの？

丁度、小石を水面に落した時のような同心円が、何度でもあなたの視野の中央に来てしまう。わたくしの好奇心に、四角のソラは恨めしげに爪を見せる。縦の筋が深く刻み込まれ、痩せて指の長い、放心したピアノストのように、白い鍵盤の上に取り付いている。美しさ、若さ、老い、総てを犠牲にして。死の苦闘も、生活している陰鬱な心もない。最も弱々しい時の剛直さなのか、最も力強い時の弱々しさなのか。爪であることの不敵さ。途方に暮れてしまう、わたくしは生きていても、死んでいるとも確信不能だ。

——妙なことね、救わなければならない人を、救っているということになるんでしょうか。一寸そう

とも言い切れないみたい。

——それはないな、これは、展示用だが、ソラ細胞は、株分けされ、このほかにも、S 850 ソラ 777 など出荷されているんですよ。癌の生態研究や、治療技術の向上、治療薬の開発に、予防にと、貢献しているんです。その働きは目覚ましいものです。これはUSA製ですが、日本にも支社が出来たところ、だから、多忙を極めています。学生さん、一寸出てきますから、あとを頼みましたよ。ねえ、こういった長生きもいいでしょう、どうです！

年配の検査技師が、あなたの顔を覗き込んだ。

——何とも不思議ね？ 弟は、こんなかたちで、わたくしが生き続けることを願ったのかしら？ でも、何だか分かって来たわ。彼は、あの病院で培養中のわたくしの癌細胞を奪って、医療ミスとの交換条件にしたのよ。命がけで、きつと……。

——寝ぼけて、なにを、いつてんだか？ いいですか、失敗してチーフに怒られないようにして下さい、わかりましたね。でも、いいことを教えてあげましょうか、ソラは日本名なんです。すごいことです。ソラっていいよねえ、そう思いませんか？

いなくなるときは、いつも、足もとから始まって、全身がいなくなる。

あなたは椅子に坐ったままだ。自分自身の秘密の場所に一人でいるのと、そう違ったことではない。

一つのところにいるのに、SR 850、わたくし、あなた。

あなたは雑誌を手にして、晴れない表情でいる。シュウシュウという寝息がしないか？　あなたはソラの苦労を背負い込んでいるのだ。溜息をつき、四角いソラの壇の表面に指を押しつけてみる。

——わたしだつて誰にも起されなければ、眠り続けるしかないのかもしれない。あなたは古い家に、たった一人で住んでいたのね、一生をかけても、弟さんのほかには、愛する男の一人にも巡り会えなかった。意地悪な男や、意気地なしの男ばかりだったのね。

あなたに同情され、わたくしの癌細胞としてのプライドが疼き始める、勝ちつづけること、生き続けること、ソラに負荷されたこれが個性だ。わたくしに愛されているなどと、思い違いをしないで欲しい、それが怖くて隠れているのに、わたくしはソラ、目覚めるのは明日。

あなたの手で撫でられている透명한培養壇は、角の丸いプラスチックの首を擡げる。わたくしは懐かしさで一杯になる。

——わたくしを覚えていますか？

——ソラソラ、ソラ、うようよしているものの列が、横ざまに裂けて、そっくりだわ！　ささやきが、ささやきを呼んで拡がってしまう。

とっさに、何が起ったのか分からない。あなたの右手にまともに爪が突き刺さっている。四角いソ

ラが、襲いかかった？　あなたは声を立てることも出来ないでいる。

その小さな爪はあなたの手を掴み、猛禽の爪や牙のように力強い。良く見ればそれは肉眼では見えない爪でありながら、鉄槌子を食い込ませ、引き千切ろうとしても、どうにも動かない。四角いソラは見違えるほど一変した冷やかな視線を、その片目からあなたに投げかけている。

あなたには意外であり、どうする方法も見つからない。確かに、ずっと、わたくしが親しんできた気質とは全く違っているソラ。わたくしの方があなたになじんで爪や牙を忘れ果てているのかも知れないさあ、放して欲しい。

——わかつてやっているのでしょうか？　言うことが聞こえるんじゃない？　反射的な掴む力だけが残っているというの？　一つの意志表示のもとに共に働いていた筈なのに、これは何故？

もがけばもがくほど食い込みは一段と強くなる。感情を示す顔も身体もただ四角で、開いた俣になつていた片目も閉じ、唇も小さい引つ掻き傷ほどになって結ばれている。それはわたくしの、関知しなかつたほどの気力を表している。極端に縮んで硬い爪はわたくしの企みと違う、控えの世界のことなのかもしれない。

——これは、わたくしに対する愛着を意味しているとも言えるの？

あなたの同情を、侮辱ととったのかもしれない。これでは誇りをもって生きていけないと、そう、

言っているの？ 四角に封印され、封印を施されたため、冷された情熱が、そんな引きつった援けの求め方をするのだろうか。

——いいえ、いいえ。わたくしはいう。

誰も聞いているものはいないから響き渡る。いいえ、いいえ。そんな言葉が最もよく通じ、通じながら効力がなかったような気もする。

硬い爪、白い指が氷のようにあなたを冷たくしている。何処からも血は流れ出ない。

——わたくしが、こうしていられるのは、何かあなたに、危害を加えた御蔭ではなかったろうか？ そう考えてみても構わない、ええ、そう考えてみてもいい！

これが思いやりのある言葉？ おもわくの外れた言葉だ。

——痛い！ 言っていることが分かっているんじゃない。聞こえているんじゃないの？

あなたは片手でその手の骨組みをはずしても構わない、全力で引き千切ろうとする。あなたの力は刻一刻消えていくようだ。ブザーを押そうにも手が届かない。片方の足を思い切り後ろに引き、ぐつと引つ張る。四角い身体が台の上のレザーシートまで従えて下に落ちるぎりぎりの縁にいて、ぐらりとぐらりとする。わたくしは今までベッドから落ちたことがない、従って四角いソラも落ちない。

あなたは繋がっている手で、辛うじて落下を食い止めている。あなたは息を切らし、身体を振じ曲

げたまま一休みしなければならぬ。あなたはそのまま、SR 850 を黙殺し、眠っていることにしたくなる。眠っていて眼を覚ませばすむと言うものでもないだろうけれど。白い毛布を広げ、四隅に手足を覗かせて封印されているのはあなただ。

あなたは忍耐する、忍耐しているだけの暇が、あるのかどうか問題だが、あなたは眠りから落ちる。四角いソラはあなたにぶら下がっている。四角いソラの身体は台に密着していた状態から開放されると、ふいと浮き上がり軽くなる。あなたは右手にぶら下げた小さいソラを左手で支えて廊下にする。……わたくしが生活し続ける限り、このソラに怨恨や復讐があるのだとしたら、今のうちに正しい死を四角のソラに与えてやりたい。

ひとの足音を聞き分け、隙を見て廊下にする。階段を一気に駆け降りていく。持っている四角いソラの片目が、薄い輪を描き、寝息をたてて狸寝入りをしている？ あなたは走っている。走って、(無用の者の出入りを禁ず)の張り紙のある部屋に入り込む。上から差し込んでくるおぼろな光うんのか、宝石をケースに置くように、ソラを置きたいのに、向きが食い違って握られている腕が裏返しだ。

ふいに荒々しい足音がとまる。ドアが開く、グレーのパンツが見える。今度こそわたくしは叫ぶしかない……。投げ出された雑誌……。この暗号、わたくしの視界に一つの空洞が抉られている。

まだ、あの男に狙われている。グレーのパンツ+雑誌、出会って以来それしかなく、記憶のなかどん



な顔も持ってこない。

——いまさら、そんな破れかぶれの様子をするなんて。

——何のこと？

グレーのパンツを穿いている男は、男の数ほどいる。雑誌を持ち歩く男も、数え切れない。

——どうしてこんなところに運んできたんです？

男はあなたの腕を掴んで、大きく開けたドアまで引っ張る。四角のソラはぶら下がってしまう。あなたは眼と頬を真っ赤にほてらせ、身体の輪郭を廊下の明るさに晒している。

——ああ、ことは、そんな風になっているの？

男はグレーのパンツの腰に複雑な皺を寄せ、四角のソラを抱きかかえる。だからあなたは逆手をとられて、身体を一捻りして、掴まれている腕の下を潜り抜けなければならない。外見では、あなたが奪い取られた救命具に必死にしがみついて離れない形だ。

各室の中から、器具のぶつかり合う音や、水音がする廊下で、鰐を抱えた少年と擦れ違ふ。それを追って、ガラス瓶を両手に持った女が走って来て、擦れ違いざま、

——赤ちゃんがお悪いの？ と声をかける。あなたには思いがけなくて、足を男ともつれさせ、男の靴を踏みつけてしまう。踏みつけたことで、あなたは妙に心楽しい。

三つの身体がびったりくっついて進んで行く。掴みつづけて決してゆるまない爪、白い細い爪があなたの心の中で印象的だ。この間にも加減をするという人間らしさを欠いた爪の締め付は、歩くリズムで更に痛みを脈打たせ、血をにじませ、手首から小指に赤いものを滴らせる。あなたは重荷を包含して、男と並んで素直に庭の石畳を踏んで行く。わたくしには、こんな辛抱をしていなければならぬのが、次第におぞましくなる。しかしおぞましきも、わたくしと関係のないあなたのものとして、遠ざけてしまう。機械化してしまったグレーのパンツの伸び縮み、その皺、パンツが空気を含んで張りつめ、次には萎んで、男の足を取り巻いている。

——早く歩いて下さい。死んだではありませんか？

——でも、わたしがやったんじゃないんです。そっちからとりついて、如何することもできないんです。洋服なら切り取っているのですが。

——これでは、あなたの手を切り取るしかないな。

内へ籠った男の声は、パンツを膨らませ、また、皺々にして中庭を横切って行く。別の建物に別のグレーのパンツの男がいて、パンツの男同士でこそこそメッセージを交換し、何時の間にかパンツの男が消え、新しいパンツの男に四角いソラがリレーされている。ドアが一つ近づいて来る度に……：この中で何を？ あなたの手に震えが過ぎる。彼がこんなに何人もいるの？

次第にあなたの手は四角いソラと、一つに溶け合って眠り始め、足は別の世界の振り子にぶつかった

ように不揃いになる。

男にあなたの手が切断されようとしているのではないかと疑うが、わたくしは麻痺した柔らかい道をとおって、あなたのなか若々しく充血し、怒張した床を見ている。

いきなり襟首をわしづかみにされ、引つ張られる。あなたのブラウスはぴりぴり縫い目から千切られ足首を払われ、地面に後頭を打ちつけられる。髪が掴まれる。髪は根を張っているから、その響きが、一続きの頬の皮まで揺さぶっている。筆り取られる。

その痛みで足がよじれる。悲鳴を長引かせる喉。

打たれている肩や背から電流のようなしびれが来る。丸たん棒よりも重く、厚い、その腕の力はなんだらう。平然と頭を挙げている男はあなたよりも遙に細い華奢な指になって、フィルターが焦げるほど煙草を深々と吸って、倒れているあなたを灰皿にする。

痛みは少し残っていても、暴れ回っていた悪魔が去ったと言う、安堵感があなたに来る。シャボンの泡を千切って投げ終わった後のような、洗われた思いがわたくしに来る。

——悪魔は行ってしまったのね。それとも、悪魔はあなたなの？

男はいらだたしそうに身体を振る。

——何も変っていないさ、注射一本打っただけだから。

——悪魔と言うのは、生存本能といったもののなの？ この痛みを拭ってくれたのは誰？

あなたが眼を周囲に向けると、総ては生々と跳ね回るようだ。

——こんな時は急いではいけない、苛立つても駄目。

男は白衣からグレーのパンツを覗かせて行ってしまう。身体の内から冷え、わたくしの頭はやけに冴え冴えとしている。

——これはわたくしです、いいえ、これはわたくしでした。

あなたの背の羽根はくしゃくしゃに畳まれたままだ。徐々に皺を延ばし、背は開き、閉じ、又開いて閉じる。

——まだ人間は原始的な発達段階にいるのよ、一人で人間の知識の全重量を支えることなど、とても不可能。孤立しながらこんな場に対そうとするなんて、精神的にも肉体的にも無理と言うものよ、可能だと思うのは、極端なエゴのせいじゃないかしら。

——あなたが果たして、わたくしと釣り合いのとれるほどの人間なのかどうか？

あなたが坐っているレザーシートの縫い目がはつきりと見える。此処に置かれたのは悪魔に蹴られて離陸するように、身体が軽くなったせいかも知れない。レザーシートのふつつつ開いた縫い目の穴を一つずつ辿って見る。

— ねえ、わかるでしょう？ 銘々、自分の屍体とだけは対面しないという、奇蹟を持っているからこそ、こうしていられるのよ。

— それは、どういう意味？ 一体 SR 850 は如何したのかしら？ 屍体になったの？

— あなたの吐く息が進み、跳ね返っては戻って来る。海に投げ捨てても投げ捨てても波が打ち上げても、屍体が、あなたの頭に浮かんで消える。

— わたしの内部にひそんで、一体何をもくろんでいるの。

— あの時、あなたは放心状態にいたくせに。わたくしはあなたの中で歌っていたのよ。

— 涼しい顔をして？

— いいえ、わたくしは一生に一度くらい、現実とびつたり符合する夢を見ているの。

— 夢の言葉は、逆なのかしら？

— わたくしは色んな声に耳を傾けていたわ。……うまく出来ているモバイルのように、バランスを保っていること。……二人で繋がって暮らせば安心よ。私達、開かれている方の顔を読むしかないじゃないの、なんて。愛情の不足や栄養の不足だと思っただろうけど、そのうち、一方が一方を、ブレスレッドか、ハンドバッグのようになぶらさげて歩くよ、だなんて。わたくしの見ていたのはスポットライトの円形のなか、ひそひそ話はそこからなの。

——それぞれ説明して頂けるかしら。

あなたはいかにも悪戯っぽく、楽しみを先に延ばして、口をゆるめ、周囲を訝りながら、窓から窓へ移動させていた白い視線を手繰り寄せる。耳を澄ましてさえ、ことりとも物音が無いのに、急に心臓、それが此処に。

——ああ、静かね、こんなにも身近かにソラがいる。でも、見るために反り返っても、逆立ちしても理解出来そうにないわ。でも、ソラははっきりと、確かにいるのね。何か不吉な、わたしの命に背くことに思える。

あなたは見たものを突き放す。だのに手は前にもましてそれに掴まれている、握られている手が意味を持って来ているのだ。右手で身体を支えようとすると、肩でシートにめりこんでしまう。動転、右腕はどろんと重く持ち上がらない。右はあなた側のものではなく、あなたと触覚の繋がりの無いソラのもので、尚更大きいあちら側なのだ。足は何処にも届かない。

廊下で足音がし、何者かが現れる、その時、あなたの反応の仕方は？ この有様では、返事を避ける方法しか思い浮かべそうに無い。あなたの活力源になっていたあなたのなかの液体が流動するのを止め、ヘドロ化してしまう。そのことだけに限るならば、わたくしにとって好都合でもある。しかし、希望に満ちたというには、蔭のある焦燥感、苦しさのある鬱屈した青年期のような気分を、わたくし

は持て余してもいる。

生暖かい流れがあなたの肌を滑っていく。電球が煙りで半分に分れ、半欠けのまま対になって空気の中を前進する。

——何をやるのよ、ひどいわ、わたしの口に煙草を突っ込んでしまうなんて。

煙草を突っ込んだ男は、さっきあなたを灰皿にしていた男だ。

——世界中の口に煙の入る時刻だよ。火はついていて、さあ、深々と吸いなさい、火は見る間にきみに近づいて、情熱の管をつくる。

——もう、そこに落ちて煙っているわ。

——身体がどうなろうと、煙草を吸う自由を奪うわけにはいかないんだよ。

——時代に逆らってまで、わたしには丸焼けの自由が、あるというのね？

男は煙草を拾い、口に咥えて火を確め、パンツに灰を落としながら、あなたの口に嘴のように移し変える。

——おいしそうに吸っているじゃない。手つきだって大したものさ、何年前から吸っているの。

あなたは息を吸い込む、気管から肺へと煙が転がりあい、分解し、まとまって、むせている。

——はじめてだから……………。

あなたの声は塩辛く内気で。煙草の火は床に燃え移り、死ぬあなたと、生き残るあなたに、生き捲くるわたくしと、死に捲くるわたくしを包んで、本当に、死を免除されているのかもしれない者たちの、微小で無限大の世界に組み直されていくようだ。

22

わたしの、叛乱！

あなたはひとりで風を起し、わたくしは臆病風に吹かれている。機械油と鉄錆びと塗料の匂い、時々鉄骨を叩く響きが耳に来る。あなたは巨大なクレーンの鉄組に足を掛けて登って行く。紅白に塗り分けられたクレーンの先端についている、苺のような赤色灯が行き止まり。あなたが動き止まないから、赤い灯も動きやまない。わたくしはあなたと一緒にいながら、監視人のように、ただ、見ているばかりで、あなたの手足をしっかりと押さえておく方法さえ思いつかない。わたくしは疑う、日夜働きづめで来たのに、あなたの動悸一つ呼吸一つ、未だに支配する力を持ち合わせていないのではないかと。



さつき、ふっと、あなたに燃えあがるような熱気を感じたが、今、熱い流れがクレーンを登って行くのがわかる。登りながらわたくしに瓦解感がある。わたくしの今は、あなたの身体のかなか、ここであなたを大死させては、わたくしはあなたのなかのほんの壊れ易い泡に過ぎなくなる。わたくしが悪いんじゃないのよ。悪いのは癌なんです！ ソラは死を持って余して、散々物を投げたり、喚き散した後で、笑窪を浮かべて、恥ずかしそうに言ったものだ。同じソラでありながら、わたくしが、その癌であることの矛盾を如何すればいいのか？

わたくしが癌である以上、あなたに害を加えるのは、あくまでも、わたくしであつて。あなたであつてはいけないのだ。増して、あなたがわたくしの生命を絶つことなど、事態は本末転倒ということになる。あなたの死命を制する立場にいることは、わたくしがあなたを愛していることだ。天災や事故や、医療ミスからあなたを護ること。それなのにあなたは一筋縄ではいかない。

あの赤い灯のあるあたりの空間は、何ものも自由に動き回らせる筈だが、あなたはクレーンの先に行くほど、黒い空間に閉じ込められてしまうだろう。蜘蛛の糸を伝つて、地獄の血の池から天国に昇つて行くように、あなたは行くけれど、あなた自身が下に落ちなければ、下に血の池などありはしない。今あなたが何を考えているのかわからない不安は、あなたの脳神経にわたくしと繋がらない回路があるということ？ わたくしは、あなたの彼との恋いを夢見ながら、あなたの細胞に対するくぐも

った戦いを止め、彼の手を握る。

彼はちよつと息をついて、わたくしに身体を寄せてくる。あなたが彼に、——どうしたの？ 変ね。と言うのに、わたくしは、——何でもないので、ただ、ちよつと、と言う。あなたは独り足早に風を起し、火山のように燃え、やがて紫色に変わる夕空に、くの字型に頸を伸ばし怪獣のように立っている大型クレーンをめざして歩き出している。くの字といつても、一本は百六十度、一本は百十度くらい、それぞれ角度を変え、海岸線に並んで、尖端にはどれも空にはじき出されたルビーのような赤い灯を光らせている。それを見上げ、あなたは土台の巨重を持った鉄の塊を周って歩く。わたくしはそれがあなたの本当の散歩というものかどうか分からなくなる。

確かにあなたは鉄の骨組みを登って行く。あなたは泣いている。足場を失って片足が空中に輪を描く。膨らんだ背に服が持上げられて、ウエストが割れ、裸の肌が覗いている。

流れ星が落ち、かわって、下からさまざま色が浮き上がる。眼が流れ星を求めて彷徨よい、あなたは一休みする。ひとまず磁気によって鉄骨の棧に釘づけされたというように。わたくしはあなたと一緒に流れ星を眺めている、眼や口は水平線または地平線の高さにある。背に囁れ声、あなたはびっくりしない、びっくりするのはわたくしの方だ。首長竜の赤い目のような赤色灯が背に回り、荒々しい鼻息を吐く。

——下に落ちてしまうわ。こんなことに全力をつかいきるなんて、骨折り損というものよ。

何かが怒っている、しゃがれ声が聞こえる、あなたは手足を汚している、食い込む鉄骨、鉄の罫は素手に怒りを掻き立たせる。しびれが全身にくる。何を考えているの、どうしようというのよ。あなたにわたくしを抹殺するような動きはさせない。絶対させない。ソラは生き続ける、それが彼の意思なのだから。

妙な力が、あなたの舌に手を伸ばして押さえている。声はいらないし、今はない。内から働きかける徒労。……止めて下さい……、如何してこんなことを、こんな大それたことをするの、永遠の宙づりは嫌だ。第一空なんてもの、ありはしない。空に手で触ったことも、抱かれたこともない。ロ―プと滑車が鳴る。誰かが来る、エンジンの手を取り振り回し振り上げ、振り下ろす。あなたは必死に鉄骨にしがみつく。右手はどうなったの？ バランスを崩して回転する。

——危ない、だから言ったじゃないの、こんなまねをするんじゃないって。

わたくしの警告は理性に働きかけているのか、感情に働きかけているのか分からなくなる、必死だ。

あなたを地上に無事に引き降ろす為の働きがどんなものか、十年も頭を使ったことが無かったような気がする。空も、海も陸も境界を外して黒だけが自由に動いている。ここがどれくらい高いところか……：……まだ地上から来る光は薄められてはいない、黒が拡がり動く分だけ、光は、けばけばしく狂っ

てくる。

——あなたは、あなただけじゃないのよ、わたくしなの。あなたを中から征服し尽くそうとしているわたくしは、生きているのよ。殺人者であっても弁明は許される、わたくしはあなたに説明してあげなければいけない。

手のひらから、ちくちくする棘を含んだ汗が滲み出てくる。あなたは眼を空に彷徨わせ、ネオンにさえ眼を止めない。最も有効なわたくしへの反撃、あなたは被害者ではなく加害者になる。考えて見ればあなたは何故、あれほどまでに無防備だったのか？ 自分を護ることをしなかったのか？ 放棄したとも、わたくしには思える。あなたはわたくしを憐れんでいたのか？ だから、わたくしと一緒に戦ってくれたのだ、あまりにも優しすぎるから、その反動としてこんなところに追いやられている。

脂っこい鉄の膚にあなたの胸のくぼみまで押しつけられ、汗と鉄が混じり合う。摩擦でブラウスのボタンが全部とれていて、胸に海風が入り込み、塩を残し、体温を奪って吹き抜ける。いまは落ちないでいるけれど、その内、磁気嵐が来る、ほら来た。永遠の宙釣りなんてあり得ない。

あなたの指が空の嘴に触れる。ジェット機だ、ほとんどすれすれに飛ぶ。翼をぐらりと傾け、車輪の房を突き出して、轟音に世界中が裂ける。あなたは雲のそばだ、海岸線、海、または空に向かって巨大なロボットの腕が伸び、その上にあなたがいる、尖端の赤い灯がはばたく。蝙蝠が逃げ惑って、

あなたにぶつかって落ちる。弾丸みたいにきて、あなたの頬や口のあたりで身を翻す。あなたの腕に蝙蝠の翼が触れ、あなたが泣くと、蝙蝠の鳴く声になり、鳥寄せ？ をしている。あなたは味方を求めている？ 登り切れないし、落ちきれない。本当の風と、生きものをつくる風に、あなたの髪は渦巻いている。

わたくしはあなたの眼になる。あなたの眼が高飛びをする。あなたの剥き出している腹筋が鉄に均等に引っ張られて、丸い臍があなたの動くたびに出入り隠れたりする。それが命がけだ。あなたを攻撃してくる蝙蝠。わたくしは内部で増殖するのを今は止めているから、誓って言う、今は止めている。あなたのあなたとして死にたいと言う欲求から、身を護るのに必死だから。いいえ、あなたがわたくしを喰い千切る。あなたはわたくしを理解していない、あなたは瘤だらけだ。下に落ちても此処では海に届きはしない。下は鋼板やつるはしや、シャベルや、ボルトや仮構のパイプ。その向こうに丁字型の海と棧橋。ジェット機が着陸姿勢のまま、誘導灯に導かれてクレーンを掠めていく。キューン見えないが、滑走路は此処なのだろう。高さの分からない海の、深さの分からない空に空港があつて、あなたはジェット機のタラップを降りる。降り切らないうちにタラップが回る。下であなたを見ている人物がいる、黒い杭のような。顔に蝙蝠がばたばたつき纏う。此処はタラップではない。ジェット機のエンジンから噴出す気体と一緒に爆発する音。クレーンの滑車が鳴り、ロープが滑り、その腕の

向きをぐいぐいと変える。腕の骨組の尖端にいるわたくしは震えあがるが、わたくしの震えあがることとが、とりも直さずあなたの震えあがることになっていない。それは困ったことだが、同時に救いにもなっている。あなたはまた、しっかりと腕で鉄骨を押え、足をかけ、顎を棧に乗せて空を見ている。わたくしはあなたの助力を必要としている、こんなふうには……と行って、わたくしが揺り動かそうとすれば、あなたを直ちに投身させることになるだろう。果てしない自問自答をする。わたくしがあなたと彼との親密さに水をさした？ ……それが気に入らなかつたの。あなたの思考力は靄のなかだ。今のわたくしのやり方を考え直して見なければならぬ。

——嬉しかったわ、それがあなたのお気に召さなかつた？

そのことに全く気づかなかつた訳ではない、でも、自殺するなんて。わたくしが体験から身体に語りかけ、向こう見ずな好意をあなたの彼に示し、結果としてあなたの不快をかつたのかもしれない。不快と言うより、絶望的な何かを……。どんな力があなたを、こんな堅い危うい高さに押しやっているのか、考えるだけで胸が痛い。

わたくしが新しい青春時代……：……自虐的でない嗜虐的な青春に浮かれ過ぎていたともいえる。笑窪も眼も足も、ごく自由に靄のなかだ。柔らかい形に、足は顔に、眼は陰部に、笑窪は臍に早や替わりする。あなたの持つていない種類の魔力をわたくしが持つているなら……：……。二度目の若さを生きる

ためには、およそ、想い出とか経験とかいうものは死んでいるとみななければならぬ。あなたには物事を有りのまま見る率直さがあり、率直に対する冷静さがあった。それなのにこんなところに押しやられている。わたくしからすれば、それこそ、経験も永遠もない危険なのだけれど、ほんの一齣を生きたあなたにすれば、自分自身で在る為の莊嚴な儀式なのかも知れない。もう、あなたは動かない。ということは、投身の為の秒読みに入ったということか？

——助けてください！ 自分から死ぬまでもないのよ、もうすぐあなたは死ぬのだから……。九、七、三、一、〇。助かっている。ゼロを過ぎたのに……。

——あなたが下に落ちたら……。ね、下に降りて行きましょう……。わたくしの負けだわ。わたくしよりあなたが強い。いい娘だから、降りましょう、そろそろと……。

不敗のわたくしが敗北を告白することになるとは……。幸い、というより、不幸なことに、わたくしとあなたを結ぶ神経系統のどこかに故障がきているから、なりふり構わず、あなたに助けを求めらわたくしの醜態を隠し、わずかに対面を保っているようだ。

ザザンザンザンザズズズ……。海岸線に沿ってまたジェット機が近づいてくる。あなたの顔や胸の汗が一気に凍りついて、ジェット機の響きでひび割れて行く。港の船の灯りがあなたより上にあり、ころころ太って転がって行く。

甘いかなな空気が流れて、ここにスポットライトが当てられている。つむじ風、上昇気流、ぎざぎざ、首に帆を張り、背骨を押し倒して横滑りする。赤い埃と、一緒に動いているものがある。山蟻か尺取虫、鳥の羽、あぶら虫。クレーンの尖端の赤色灯は甲殻の上の眼のように冷たく坐っているが、角度が少し違って来ている。あなたは首長竜の頸の骨を並べ直すようにクレーンの首を撫でる。ここは水平になっていないのではないか？　あなたは立ち上がっている。眩暈がし吐気が来る、足元で地上が回転する、何度でも。

——そこから、動いちやいけない！　動くな！

下は人で一杯、助かったと思う。わたくしはあなたの中の暗がりにいる。今になってみれば、むしろ常々被害者であるより、加害者である方の陥り易い被害妄想だったという気もして来る。

——わたくしを混乱させる為に、あなたは此処に来たの？　それともわたくしがあなたを混乱に陥れたの？

あなたの内部、まだわたくしに侵されていない整然と並んでいる細胞は、一つ一つリズムに従って脈打ち、列を一糸も乱そうとしない。あなたもわたくしに対抗する気になれば、免疫力やエネルギーを駆使して、闘いを挑むことも出来た筈ね。

だとしたら、今だ！　わたくしはあなたの細胞の列をかき乱し喰いつき、助かった喜びで殖えつづ



ける。もう、迷ったりしない。一羽ずつ小鳥を捻り挙げて料理する、あの要領で、美味しさと、叫びが一緒になる。

滑車が回り、ロープの鍵に網が吊るされ、その中に誰かがいて、此处を目指して釣り上げられ、まるで、空中ブランコから落下する軽業師を、引き寄せるように、あなたを網の中から抱き取っている。丁度突風が来て、あなたの顔に命中する爆弾のように爆発し、サーチライトに照らされたまま万人注視のなか、ふたりしらずと降りて行き、それが一見ある種の変わり者の結婚式のように見え、無事着陸し、これほど豪勢な愛の告白を受けることなどないとか、何とか、言われるにしても、わたくしはもう知らない。あなたを激しく突くと、あなたの細胞の一つずつが炎をあげて、わたくしの生命に成り変っていく。わたくしは勝利の快感に酔うことしかない。あなたとの共存など夢のまた夢。あなたの叛乱にあつては、総べてお手あげ。

静々と降り、無事到着したところが水上であろうと、それが運良く水上のボートであろうと、そのボートには漕ぐべきオールが無かったとしても、もうわたくしは知らない。あなたが、釣られた魚のようにふらふらし、くちから針を外され、座り込んだボートが実は水上飛行機で、水を蹴立てて助走し、空に再び舞い上がるうとも、わたくしは知らない。あなたの気まぐれと一緒に、あなたと共存共栄の外界を信じない。上昇気流に向う大気のなか飛んでいくその点を、見送る人たちとわたくしは違

う。ばたばたするな、宇宙は畳んでおけ。

わたくしの下を雲が流れ、空が点になり、わたくしが空になって、あなたと言うちっぽけなものたちを見ているのだと考える。あなたはもう、転覆したいかだのようだ。

しかし、あなたのなかで、わたくしは丸腰でいる。夜なのか、昼なのか、昔もいまも、あちこちで逆立ちしている。もつとはるか、あなたの総べての期限を呑み込んで、わたくしはただ熱中する。あなたがわたくしであるために。幸福でへとへとになりそうなほどに……。

23 赤い扉と、グレーのパンツ

夢のきれぎれが一つに繋がる時、わたくしの知らない以前のわたくしの、うまくすると、ソラ以前のわたくしを思い出せそうな気がする。それはまだあなたの夢が色濃く混入するのを勘違いしているのかもしれない。あなたの内部で支配権を広げた、わたくしが実在しているのに、改めてあなたが眠

っているのか、わたくしが眠っているのか分からなくなる。

——好奇心が強すぎたから？ わたしはあなたの罨に落ちたのね。

——罨？ そうね、そういう言い方も出来るかも知れない。可哀想だけど、あなたの世代の優しさや、育ちの良さが救いだわ。

——でも、このままでしたら、わたしの寿命が来るまでに、あなたは退屈死してしまうでしょう。お気の毒ね！

——わたくしは、あなたをそんなに長く引き止めはしない。

——悪いけど、わたしは、わたしなの。此の頃は忘れそうになっているけど、わたしは今までわたしで生きて来たのよ。まだまだ、何年も生きていられる年齢なの。その気になれば、七十年も、百年も生きていくかもしれない。

——そう、そんなあなたを自慢に思っているわ。わたくしの誇りよ。死ぬまで生きていられる、その気持が嬉しい。

——掴まれているのは、あなたではなくて、わたしなの、わかって欲しいわ。あなたに驚掴みされて、時間を無駄に費やすなんて……。わたしは、もう、妙なものと付き合うのは嫌！ 何故わたしだけがこんな目に逢わなければならないの。わたしの関知しないところに、導いてきた責任はあなたにあ

ると思う。

——責任ですって？ 身体の中で、あらゆるものが調子よく作動していると思っていたのに……。

あなたの好奇心で此処迄きたのよ！

——あなたは、完全に自分のものである場所を、本当に持っているつもりなの？ まあ、いいわ。思うだけのことから。とにかく、時間なんです、出て行って下さい！

——あなたはクレーン事件で何かを悟ったの？ あなたに起っている現実を、あなたが知るのを妨げているのが、わたくしなのよ。わかる？ 出ていけだなんて、あなたが、わたくしに言えると思ってる？

——ソラさんでしたわね、ソラだなんて、男性的なお名前ね。中性的と言うのかな。

——まあ、どうして、わたくしの名を、改めて、さんづけで呼ぶの？ わたくしが、わたしを扱いかねているのかな？ とりあえず、そう考えてみる。あなたはわたくしだけわ。クレーン事件のあとでは、もう、区別してみる事なんて無くなったのよ。どこまでも区別したかったら、あなたの子供の頃の話をなさい。夢をみてもいい、過ぎた時間を遡り、揺り籠から、情けなさで泣いた、母親の子宮のなかに戻ってもいい。一個の卵細胞にまで戻ることだって出来る。とりもちに捕らえられたような想いでいるより、それがあなたにふさわしいわ。

——わたしは惑わされているの？ だとしても、物事をありのまま見る観察力はあつた筈よ。突然は

つきりと、見事な頭の働きが来ると思うわ。何もかもわかって来た気がする。

——なにがわかって？ わかったからって、確信を突くものとも思えないわ。あなたは岸边の変ってばかりいる湖だったけれど、いまでは蜃気楼が居座っているのよ。

——あなたはわたしを機嫌の良し悪しの無い人間だと勘違いをしていたみたい。穏やかで戦うことを知らない、たかを括っていたのね。だから、わたしがクレインにでも登れば仰天してしまう。

——あなたも、やるもんだと、感心したわ。でもその為には進んでしまった。ほら、あらゆる音の中から、他の音を超えて聞こえてくるわ。ソラ細胞の沸騰。わたくし自身の急激な展開。自分で自分を破壊するような声をつくることもあるのよ。

——なんでそんなに血も涙もないことを、言い切れるのかしら。癌なんて静かに進行してこそ、怖いんでしょう。そんな、おしゃべりな癌など怖くもなんともない。

——あなたがひねて、外に出てしまい、窓からこっそり家のなかを覗き見た時、家のなかは、ずっと昔から、あなたがいなかったように見えたでしょう。まるで一度もそこに坐った者などいなかったというように、冷たそうに、薄っすらと、埃さえ乗せて、あなたの椅子は片隅に押しやられていた。みんなも、あなたなど、この世に存在しなかったみたいに団欒を楽しんでいた。思い出すでしょう、だからあなたは自分のなかを覗いて見るのが怖い。あなたは約束などしていないわね。どこにいるこ

とも約束したことなど、かつて、一度もありはしないのよ。

——元気はいいみたいね、でも、あなたは何なの。どう見ても情ない過去しか持っていない。社会に背を向けて、何時も脅えて隠れていた。生涯で心を通わせられる男性の一人とも出会えなかった、それが悪いなんて言ってるわけではないのよ。それをもう一度なぞってみたら、生きたことになるのかしら。わたしは、もう、あなたに同情することを止めたわ。これからはわたしの為だけに、一生懸命に生きるの。ほら、リズムをとる、両足から踊り出す、歌いだすのよ。四方八方、十六方に、碎け散る汗が、ちくちく肌をさすでしょう。

——あなたがその動きを止めないなら、赤い血の筋の入った飲みもので喉をうるおし、あなたのなかで反吐を吐くわ。

——そんな、ひどいことを……………。

あなたは言葉を失っている。過激過ぎたかもしれない。でも、わたくしはソラ細胞、侮辱されて、ただの善人でいられるわけがないのだから。

——あなたは、わたしの熱気で首をすくめ、融けたバターになる。わたしは固定されている手を取り戻して振り回すの。わたしの赤い肉の間に、何時か、あなたの屍体が発見されるわ。ざまあみろよ！——いまあなたは土台がないみたいに不安なんでしょう？ 夢との切れ目がいないのね。身体を振って

も、それは生命の息吹きなんてものじゃない、動くのは止めなさい！ 誰も誰でもなくなる時がきつと来るのよ。わたくしを誰でもないと思うこと、こだわりのない夢を見ること。わたくしにはそんな時がなかったのね、それで苦しんでいたのに。

——あなたは逃げ出すわ。癌細胞が砕けて、細かなぐちやくちやな、かけらになって、それでも名前はソラ。生きている別の人間に飛び込んでいく。世の中には、途方に暮れて口をあんどり開けているひとはたくさんいるわ。

——さあ、どんなものかしら？ 暗闇の奇蹟を待っているのよ。そんなに動かない方がいい、わたくしが、本当は、あなたを愛しているなどと、勘違いをしないでほしいの。それが怖くて、隠れているのに。動くのは尽きない消えないあなたの若さが、そうさせるとも言うの？ 新しいわたくしの若さが育っているのよ。いや、譲歩してもいい、わたくしじゃない、あなたかもしれない、勝ち誇った二肉<sup>ニニク</sup>体<sup>タイ</sup>的に制することが出来ても、夢想は勝手に太って行くから、わたくしの手には負えなくなるだろう。そうならない前に早く、思いは一点に吸い寄せられる。リンパ液のなかをもっと早く、もっと早く、洪水のときの流木のように流れたい。あなたはわたくしに追いつけない、わたくしはあなたを捕まえない、あなたはあつちこつちで身をかわしている。

——縫ってもみんな藁でした。リンパ液がざわめくから、わたくしは手を伸ばしきれない。

細長い足が回転ノコのように瘤を喰い千切る、グレーのパンツはピントを合わせたように浮き出してくる。わたくしには、しばたたく目がない。ただの散光空間があるだけ、水浴をしようとして空にぶつかる、衣服が投げ飛ばされ、背骨をくすり乳頭をくすり、顎に飛びつく空気塊。そこに足をもぐらせる地面はない、根こそぎ内臓が放り出される。

あなたの組織の部屋部屋に、赤い扉があつて、どの扉の前にも、グレーのパンツが控えている。扉を開け、わたくしはパンツの前に立ちふさがる。パンツはいきなり捲くし立てる。——何とも止むを得なかったのであつて……いや、確かに愛していたのに、心ならずもこのような、思わぬ結果になつてしまつて、全く自分が信じられないくらいだから、どのよういきみにとられたとしても……しかし、そこを何とか、曲げてよろしく取り計らつてもらいたいので……。わたくしは口に啞えている煙草の火をパンツの口に近づけ、パンツは慌てふためき、火と一緒にわたくしにキスをし、火の熱さに赤い口輪を開け、叫びながらわたくしを抱き締めたまま倒れて、ショック死する。次の赤い扉の前に立っているグレーのパンツは、この事件をつぶさに見ていて、——やったのはきみじゃないか、見ていたよ、常々僕を責めているきみだが、いま、絶体絶命なのはきみの方であつて、僕はなにもしていない、命が惜しいなら覚悟をきめるべきだ。ああ、僕は一部始終を見ていたけれど、黙つてあげ、匿つてあげるから、僕を許すべきだ……。パンツは赤い扉の鍵穴に、ピンを突っ込んで開



け、不法侵入のみだりがましきで、ベッドカバーをめくるから、わたくしは大声で助けを求める代わりに、一挙両得というか、一石二鳥というか、——人殺し！ 人ごろし！ と叫んでいる。その次の赤い扉の前に立っているパンツは聞きつけ、廊下から飛び込んできて、持っていた合鍵の束を投げつけ、——このろくでなしが！ この、ろくでなし野郎が！ 興奮のあまり襟をぎゅうぎゅうと握じ上げるから、ベッドのパンツの顔は見る見る赤から紫、青に変わり、息絶えてしまう。わたくしは、ほうほうのていでそこを逃げ出し、次の赤い扉の前のパンツに突き当たり、——あなたなんだわ、殺人犯はこの人よ！ と見当違いの大声を挙げる。いま、殺しをやったパンツは、慌てながらわたくしを追い駆けてくる。わたくしは直に自分の立場に気づいて立ち直り、——みなさん、このパンツが殺人犯です！ と言いながら、そのパンツを指差し、パンツ同士で組みつく。あらぬ濡れ衣を着せられたパンツは、殺人をした。パンツの頭を殴りつづけ、——この、こんちきが、こてんばてんに、のしちやうぞ！ と必死で殴り続けてとどめをさしてしまう。わたくしは震え上がり、——やっぱりあなたが人殺しなんだわ。といい、——何を言う、きみが殺されそうだから、助けてやったんじゃないか、俺がこんなに愛しているのに、つつんばかりして、さては俺を殺させようと、罠をかけたな。とパンツはわたくしの襟を掴み、振り回し、——サツが来たら、俺に助けて貰った、そう言うんだ、わかったな！ したらきみの今までの裏切りも棒引きにしてやる、という。わたくしは髪がざんばらになるほどに頭

を横に振って、——あなたが殺したのはわたくしの本当の夫なのよ、わたくしの一番大事な人なのよ！  
パンツは慌てて逃げるのに、次の赤い扉のパンツに顔を見られないように、後ろ向きになっていき、  
丁度かがみ込んで鍵穴を覗こうとしていたパンツの尻の上に尻を上げるようにして倒れるが、突き当てられたパンツのポケットに入っていた薬物が飛び出し、廊下の真中に飛んだのを、見逃さない。百万は下るまいと素早く値踏みし、拾い逃げするから、盗られたパンツはもう一つのポケットからピストルを取り出し、取って逃げるパンツをいきなり撃ち殺し、薬物を奪い返し、わたくしを振り向き、動くなど言い、手を挙げるわたくしにピストルを突きつけたまま、じりじり歩くが、丁度次の赤い扉に来たところで、勢い良く扉が開き、はずみでピストルの筒先が向きを変え、暴発し、パンツ自身の胸を打ち抜いてしまう。開いた扉から、やはり、グレーのパンツが出てくるから、——あなたが殺したのよ、あなたがいきなり扉を開けたから、こんなことになったの、どうするの。と言うと、パンツは、——刑務所に入るのは何ともないが、家族の気持ちや、慰謝料のことを考えると、死んでお詫びをするしかない、丁度死にたいと思っていたところだ、これで死んでも原因をあれこれ詮索されることもあるまい、と言う。

わたくしは困って、——実は、死んだこのパンツは殺人犯、自業自得、あなたが殺したなんて責めて御免なさい。わたくしは今、このパンツにピストルを突きつけられていたところ、あなたの御蔭で

助かったのよ。自殺するなんて思い止まって下さい。と言うが、パンツはどうしてもきかず、——あなたの命を助けたことが、なんでこのパンツの命と引き換えに出来ようと言って、ピストルを拾い上げ、有難そうに手のひらに置いてから、パンツの胸に押し当てて引き金を引いて死んでしまう。——良かったわ、わたくしはずっと、あなたを殺したいと思っていたんだもの、こんなパンツのどこが良いのか十年考えても分からなかったわ。といい、わたくしは荒々しい勝利感に浸ってしまう。

わたくしは取り調べ官に、——ほら、見て下さい、わたくしには注射のあとなど一つもありません。無縁だわ、どうして得にもならないことをするのですか。あのパンツはわたくしの恋人で、とても優しい人なのに……。と言うと、涙が出て止めどなくなり、——これで仕事が終わったわ。きっと、これは、嬉し涙だと思う。

あなたの眠りの重みが、わたくしに加わって来る。わたくしがわたくしの重さを感じていいものだろうか。わたくしはあなたの現実の身体に重ね合わされてはいるが、完全にわたくしの欲望をいつぱい持った自分の姿を追い駆ける。

——いくらゲームでも、顔も見えないで殺すなんて、無謀だわ。とあなたは言う。

——どの男にも、顔なんて無かったのよ。グレーのパンツが顔だったから、見ても見ても見えなかったわ。

わたくしはあなたの生き残りの細胞に鞭を振るい、あなたのゲームの設定に悪意をみる。良心があると喜んでいたあなたも、保身のための最期の戦いを挑んで来たのかもしれない。

24

永遠の命！

真綿にくるまれたような感じがゆっくり消え、掴まれていた手が、止まる寸前の振り子の拍子をとっている。

周囲は天井迄、透明なガラスで覆われている。息をのむ。もとのもくあみ？ ガラスの鎧を着て寝込んでいるような、いま、ガラスの鎧の冷たい反射と、潜在する生命であることに疲れてわたくしがいる。天井は高いのに、立ち上がったら頭がぶつかるとか、違うと警戒する。

あなたはいない。右手を静かに動かしてみる。わたくしは透明なガラスで四方を囲まれたボックスのなか、受話器を持ち、自分の名を告げようとしてとちっている。

——わたくしです、わたし。

彼は声を聞いただけで、わかる筈なのに、今に限って分かつとしない。

——どなたです？ わたくしつてだれです。だれもがわたくしだからなあ。僕の友人ですか？ それとも……………。

ガラスの外から一度も眼をそらさずに、わたくしを見ている男たちがいる。同類の人間同士お互いに冗談をいい、同じ笑い方で笑い出しそう。幼い姉妹が身体に腕を回し合い、男の隣り、同じ高さに堅い膝を四つ並べている。わたくしは一歩前に出て身体を電話台に押しつける。周囲のどこからも探り出せない、生物とも、無生物とも、機械とも言いかねる物が、受話器に映っている。

——わたくしじゃわかりませんよ、もしかしたら、電話番号が違っているのではありませんか。

透明な壁を挟んで国際電話の順番待ちをしている男の水晶玉のような眼にいきなりひびが入る。これでは胸に、水しぶきを当てて風に吹かれているみたい。四肢がわたくしに逆らうように狭いボックスのなかで動く、ときほぐれる紐のような思いだ。どんなに離れていても、電話に時差などはない。

——わたくしは、入り組んで縫い合わされた、皮細工みたいに、随分変わったのではないかしら。だから、あなたに、わたくしが分からなくても、怒るわけにもいかない。あなたを責めないのは、わたくしがまだ、社会に出ていない気がするからなの。明日からこの足と手で希望を掻き集める、そんな

人生を肯定してもいい。それが、あなたの望みだったのだから。

——分かったよ、ソラ！ わたくしなんていうから、わからなかった。ソラだろう？ ねえ………どうかしたの？ でも、本当は誰？

眩暈が来る。透明な壁は襞をつくって、わたくしの背けた顔を挟み込む。

——まだ、独りっきりでいるの？ 独りがそんなに楽しいの？

——ソラ、ソラだ！ 生きていたんだね、バンザイー！ いや、生きているのは分かっていたさ。

バンザイー！ バンザイー！！ ソラが戻って来た、戻って………。

ボックスの外か、受話器の向こうに、音量の定まらない盛んな拍手があつて、喘ぐように調子を上げ、救いを求めるように落ちこむ。

ガラスのドアを執拗に押し開こうとする誰かがいる、わたくしはそれに逆らつて振り向きもしない。

わたくしは、少し近づこうとするだけなのに、彼は必ず後退するのだ。それでも、わたくしを見詰めるのを止めない。わたくしは、その、物言わぬ言葉を信じて、じっと、耳を澄ましてきたのだ。

——黙っているのは、怒つたの？ 電話を切つて、すぐに此処に来て下さい！ 逢いたいなあ、迎えに行きましようか？ そう、なら、待っているから………うん………。

潜水から戻って来たように、さえずる明るい物音で耳の中がいっぱいになる。わたくしを押し出す

電話ボックスの扉が、次の順番の男を閉じ込める。わたくしは興奮気味に身体を真直ぐに立て、確固とした足取りで歩いて行く。頭の方から、手足の先迄、自分のものとして実感できている。わたくしは電話ボックスから反対側へ、ゆっくりと空気を移動させる。曇っているのに歩いているわたくしの上には、陽だまりがあつて、急いでも急いでもこの陽だまりを振り落とせそうにない。足裏や小指の先迄、陽ざしが行き渡っている野生動物のような思いだ。

足音が軽くなり、不規則にバウンドしながら、タイトスクラムを組んでいる、考え深げな人々の足の間を通り抜けて行く。大気のなか、わずかな日の泡を見詰めながら歩く、自分にまつわる直径二ミリの泡を選んで、それを絶対に追い越さないように気をつけて。

シオルダーバッグの紐を押え、腕を組むと、肘が野良猫にでも触ったように、皮と別の固い命をぐりぐりさせる。慌てて、腕をどすんと落してしまう。身体が別の品のようにわたくしを驚かせる。予感できる鼻、呼吸は溢れ出る言葉になる。孤独のない自我、白い服の女学生が行く、知っているわけでは無いが知っており、かかわりがあると思うとある。友達、そうなのだ。やや興奮している為か耳が痛い、耳の内圧と外圧が違っているような。鼻を掴み、息を吹くと、痛みが消える。——フン。途端大気が唇を動かし、わたくしに話しかける。その言葉の意味は？ …… i M A N i M i M U Y A M ……。電子辞書を引いて見なければならぬと思うほどに、わたくしはそれに拘る。これはど

う言うこと……眼を瞑らずにいては……耳をふさかずには……こたわっても辞書のありかさえない出せない。いま、こんなにわたくしが幸せな気分であることは、あなたが、どうかあったか  
らではなかったか？ そのことに突き当たる。陽だまりはわたくしを抱いてはいるが、陽だまりが慈  
しんで来たのはあなたで、わたくしは引離された想い出しか持っていない。

陽だまりが優しくわたくしを抱き直すと、呼び戻されたようにあなたが戻って来る。

あなたは無表情、何時まで、わたくしに左右されない未来を描いていけると思っているのか、わたくしを敵として対しているのだ。敵、いいえ、もはや、そうはならないと思う。わたくしは、あなたの主要部分を押えた、もう、すぐ、全身を奪い取る。

幸福を意識した途端、切捨てた筈の、あなたへの同情心がまたぞろ頭を擡げてきて、わたくしがソ  
ラ細胞そのものである現実まで、わたくしが、ソラそのものとして否定したくなっている。あなたは  
クレーン事件で、わたくしをパニックに陥れた後、——わたしが悪いんじゃないの、悪いのは、わた  
くしなんです！ と。幾分恥ずかしそうに、頬に笑窪を凹ませて囁いたものだ。わたくしも、闘病生  
活のなかで、感情の起伏が激しく彼を散々困らせた後で、同じ言葉を吐いたのを忘れてはいない。――  
ソラが、悪いんじゃないんです、悪いのは癌です！ と言うことは、悪いのはわたくしであり、癌  
だということになる。ソラ細胞であるわたくしは、癌であって、ソラではないのか？ ソラ細胞であ



るソラと、本来のソラとはどう違つて来ているのか？ わたくしが、体内だけでなく、全視野を持つているのは、単なる癌ではないと言うことでは？ もともと、三つ四つ穴の空いた皮袋を引きずつていた、透明人間であるわたくしに、形などなかったし、居場所だつて、体内だったり、体外だったり、癌を置き去りにして天空まで拡がることだつてできた。しかし、命となつたらそうはいかない。命には死が必ず来るのだから。わたくしは癌細胞、癌のプライドに掛けても、勝ち残るのだ。彼はソラが癌でもいい、生き続けることを願つたのだから。わたくしはソラ細胞であることで、限りもない力を得た、今度、目覚める時は、女王になる。もう、震えながら隠れたりはしない。

あなたの周りには鳥の蔭がいっぱい、この世に本当はないほどの、荒涼とした影を引き連れて、何処に行くのか、何をするのか分からない。それは、変貌の張本人であるわたくしを臆病にさせる。幽霊の魔力にあつては、どうにもならないと思う迷信深い人のように。

体をしなわせ、移動して行くあなたの姿は、すぐ人目をひいてしまう。人々はあなたの協力者である目つきで道を開け、目つきの中に何等かの気配りを走らせる。あなたの通り道を開けて後退りをするにしても、後ろにある他人の足や、物売りの台にぶつかる慌て方で。あなたは頬の膚をざわざわと動かし心もち蒼ざめて、商店街から大學のキャンパスを横切り、古びた建物の階段を、鳥影を背負つて昇つていく。

——どうしたの？ ひどい格好！

何人かが声をあげる。あなたと並ぶのは彼だ。あなたはわたくしを意識して、彼の方を見ない。日焼けがボタンの外れている胸から、ゆったり覗いている彼に、あなたは背を向け、きっぱり動いて席をとる。あなたの心もとない骨が力なく揺れて、身体のみかでブランコをし、誰もいないブランコのように揺れて自然に止まる。低い仕切りの上、青灰色の鉢植えが並んでいる。騒々しく占領されている円形のテーブルを高々と越えて一つの椅子が来て、あなたの隣りに割り込み、彼が坐る。

彼があなたに何か囁いた、なんと言ったのか聴き取れない。苔が生えて痺れる舌。

——あれえ！ 変なの、急に生き生きしてきた！ 顔色が良くなって来たぞ！

——ほんと、そうなら、嬉しい。でもどうしてそうなるの？

言われても言っても、あなたは同じ表情を保ち続ける。

あなたの冷気のマントのなか、彼の笑い声が陽光のように入って来ている。わたくしには見分けのつかなかった、あなたの周りの人たちが、次第にそれぞれの顔つきを持った人物として改めて大写しになって現れ、わたくしはそれを初めて見る人間として、わたくしの嗜好によって選択し直そうと思う。

——彼はあなたなんか、すぐに消え失せるって言ったわ。

——違う、違う、スタートの間違いを正せ！ そう言ったんだよ。

彼は観念したかのように、手を宙に開く。

——わたくしが消え失せるのは、こうなつては、もう、奇蹟に近いけど。どうかしら、彼はあなたの、意向次第だと言っているのよ。わたくしは死に損ねたのね、色々研究して、結局、医療ミスで殺され、でもこうしてあなたに盗りついている。友達は若い人ばかり、明るく大きな目、すべすべして傷つくことを求めている額。とても危なっかしい軽々しさ。

あなたはうまくわたくしの過去と、未来の間で懸垂をしている。だからわたくしは、今度こそ迷わずに行くとこまで、行けそうな気がする。

何人かが異様な熱心さでわたくしを見ている。あなたは包装紙、微笑を浮かべようとすると頬がびんびん鳴る。

——きみが、僕らを見捨てる、皆が心配しているんだ。この連中は自分自身にしがみつくと、そんなやりかたしか持たないから、きみが信じられないのだろう。

わたくしの唇が自然にほころびてしまう。

……わたくしが一秒後にあなたに心中を迫ったら、あなたは如何するの？ 一生がそっくりまだあるつもりなんでしょう。

これは彼に対するわたくしの脅し文句。はっきりした声で、見捨てるなどと言われては困ってしま  
う。きみはそろそろ自分独りで、自分自身を管理しなければならぬと思うよ。きみは、病気なんか  
じゃなかった。健康そのものなんだからさ。

——自分って誰のこと？

わたくしには、まだあなたを憐れむ弱さがあつて、つけ込まれている。

彼の他に、心を許せる一番親しい人として、あなたを愛する気持ちを太らせ、わたくしの外のあな  
たではなく、わたくしの中のアナタとして育てようと思う。その為にはもう少し時間がいるのもし  
れない。

——あなたはわたくしを忘れる、わたしはあなたを忘れる。いずれそうなるわ。

あなたが言う。

——どうして、忘れることができるのかな？ 一方できみの記憶を僕に掘げながら、忘れるだなんて、  
やっていることと、要求することが、ちぐはぐなんだから。

——わたくしをあなた自身だと思えば、あなたはわたくしを忘れてしまえるわ。

会話がどんなにこんがらがっても、わたくしは平気。

——僕がきみ自身だと思うようになったら、自分を忘れることになってしまう。

——自分を忘れる、そうよ、幸せとか言うものは、何時もそんなものなんでしょう。話さなくても、分かるようにしてあげられると思うわ。

彼が眉と眉の間を擦っている、片側の眉が一センチも下がっている。きつちりと張った瞼の面積の差がいい。どう見ても、弟の顔に似ている。

——鏡を見るときだけ、平らになるのよ、一日二三秒のことね。

あなたは彼の眼の前で中指と親指で、空気を弧を描いて引き揚げてみせる。彼はわたくしすれすれにいる、それがどうということはないのかもしれない。真横にも後ろにも人がいるのだから。改めて、わたくしらしく、ゆっくり慣れることにしてみる。独立した人間として彼に近づく。その他にわたくしの進む道はないのだから。

——わたくしの口があなたの口の中にある以上、あなたの口が彼の口の中になければ、わたくしの口は彼の口の中に入れない。

——キスのことを言っているのね、どうやって彼の気を引こうかと考えているんでしょう？ 新しく生まれ変わるのなら、もっと、理想を高々と掲げたらどうかしら。彼のことなど見向きもしないで。

——ジョークよ、ジョークもわからないのなら、髪に手を入れて、頭を支えていなさい。彼の話に耳を傾けているように見えるわ、皆には……………。

彼は肘をどっしりとテーブルの上に置き、コップの周りに指を巻きつけたまま、わたくしを見ている。わたくしは、ぼんやりとした眼差しや、若者らしい呑気な言葉をつくる練習を始める。

——眼が痛いので、チムチム、テテ、テ。パムパム、トト、ト。

あなたに指図されなくとも、わたくしは静かに、そのものずばり、あなたの輪郭をはみ出して、大きくなるだろう。わたくし自身が新しい夢であるほどに……。

わたくしはソラ細胞、あなたと一緒に葬られても、ソラの乗り移るべき、後続部隊は控えているのだ。ソラ細胞の誇りに掛けて、勝ちつづけること、生きつづけること。わたくしは癌そのものとしての死を、あなたに与えなければならぬ。

あなたは首を傾げる。

——口に入れたものの持つ、全エネルギーのどれくらいを、あなたは利用しているの？ 効率がいいのでしょうか？

わたくしは首を振って言葉を小さくする。

——ほら、甘いものが、蛍の発光の原動力なのだから。

黒板の上を走るチョークの音によって、何かの妄想に結びつけられ、それぞれが何かに耐えている、

教室の中で、わたくしだけが開放されている。

(…………… パパ、この手紙の裏側に重大な事実が隠されているのだと察してください。最近わたくしは……………、こうしていても、話の意味を消そうと消そうとする力が働いています。果して文章として成り立つかどうか……………?)

ノートに動きのときれた、ボールペンが転がる。目覚めさせようとして背を叩くのは誰？

——眠ってなんかいないわ。

……………それは、まるで、郵送されたプレゼントのようにやってきました、病院から帰って、気落ちしていたときでしたから。始めは陽気に、彼女の正体に半信半疑でも、彼女に同情し協力的でさえありました。彼女の名は、巫山ソラ！……………。依然としてわたしのなかに影を落とし、いいえ、存在しているでしょう。こんな場合、父子の関係がどうなるのか？ こう考えて下さい、娘はもう、完全に巣立ってしまったのだと。

ソラをあなたの娘として、愛して下さる必要はありません。ソラに愛されることにでもなったら、パパの命取りになってしまいます。そのことをお知らせしたくて、ソラの手を借りてこれを書いていきます……………。

わたくしは、もっとぞっと、寒気のある快楽を求め、身体の筋の一本一本を震わせようとする。手

が引っ張る。

……それは、ソラ細胞！ ソラの魂！ ……いいえ、ソラに限らず、わたしもまた、どんなことをしても生き残る性悪な細胞またはウイルス、そんな楽天的な思いもします。

わたしのなかでわたしを乗っ取るソラと、ソラのなかでソラを乗っ取るわたしと、どちらが勝利するか？ わたしの音信の有無によって、パパにはその決着が分かると思います……。

わたくしは急いで紙をくしゃくしゃにする。誰が彼女に、戦う意欲を与えたのか？ ぺたぺた、引っ付いて開かない管。滲む液の薄赤い色、古い肉体が新しい心の活動に耐えられないのか、新しい肉体が古い心の活動に耐えられないのか、分からなくなる。動悸が椅子の背で鞠つきをする。わたしは書いたところを指先で擦ってみる。

……ソラが全く抵抗しなくなったのだとしたら、わたしは彼女をどうしたことになるのか……。わたしは音をたてないように、ことを運ばなければなりません。でないとソラが何もかも台無しにしてしまうのではないかという危惧に襲われてしまうのです。パパ、いずれにしても同じことなのですから……。ただ、ほんのちよつと……)

あとはもう、二人の女の闘争を物語る、引っ掻き傷のような、どうにも読めない記号が続いている。

黒板を消している教授の髪の薄い後頭。講義が終わり、一斉に皆の首が勝手な方向に動き、彼と誰



かが、こちらを見て立ち上がる。わたくしに後ろ向きについている、もう一つの首はあなた。彼の行く方へわたくしも行く。髪が眼に入ってくる、彼の視線が目尻から動いていき、後ろ向きの方のあなたの視線と結びつきたがっている。頭にのぼる循環と、肢に下がる循環系との間に、輪切りのような隙間ができ、上は悩み、下は歩くことに熱中する。

ところどころ人が群れている公園、お下げ髪を結び直して動きつづける十本の指、潜水中の魚、葉巻の煙が葉巻大の目袋の上で一休みしている、巨大な顎、みんな光に融けている。彼の与えてくれた時間がいとおしくなる。

わたくしが、わたくしの合図を無視し、あなたのふりをしている。彼のパンツにわたくしの膝がぶつかっている。秘密を隠したり告げたり、わたくしは彼の肩に頭を逆さに載せたり、地上を鞠のように転がったりする。彼は決して驚いたりはしない。跳ねて戻ると、彼の腕はわたくしをひと巻にし、次のひと巻きであなたを抱いて歩いて行く。

——わたくしが嫌い？　好き？　すれ違う老人がわたくしの言葉にぴくりとして立ち止まる。手を胸のあたりで擦り合わせ、老人はまた歩き始める。

——人違いでした、ごめんなさいよ。

手が抜けてしまうほど懸命に、しかし、するりと、あなたは彼の腕を掬り抜けている。

わたくしが御影石のつるつるの表面を素通りすると、グレーのパンツが二本、四本、五本、同じ表面を素通りする。明るい墓地公園。墓の中はからっぽ。わたくしの遺骨がどこに葬られているにしても………。覚えの無い思いにあなたが持上げられる。

絶えずあなたの足音がし、彼の足音より強く早くなっていく。雑誌の間から手紙を取り落としていく。

——手紙よ。あなたは素早く拾い上げると、グラビア写真の間に丁寧に挟みこむ。

——好きだと言ったのに……。

彼は何故いまに限って、そんなにはつきりと言うのだろう。激しく靴が動いていく。引き締まった足に、後から後から光が来る。墓地の外れに柵があり、その先は眼に沁みる空ばかりだ。

——そこまで！

わたくしは叫ぶ。舌に風が転がっただけで、声は出ない。

——もう、そこまで！

あなたはスカートを翻し、軽々と柵を越えて立っている。こうなっては、黙っているしかない。わたくしは怯えてしまう。あなたは、ゆっくりと、重心を前方に移動して行く。

ソラ、ソラ、ソラ、ソラ、ソラ、ソラ、ソラ、暴発した花火のように、青い空が、ソラの文字で一杯になる。

わたくしは叫ぶ、ソラ、ソラ、ソラです！ わたくしはソラ！ 目覚めるのは明日！

—— マツハ何というほどの超スピードで、列車が下を通りましたよ。

—— あの女が柵を跳んだのは見ました。たしか見ましたけど、跳び込んだのは見なかったなあ。あの女が跳び込むのだと思って、眼を覆っていましたからね。

—— でも、そこまで！ という声を、わたし、はっきり聴きましたよ。……若いカップルなら、向こうへ、歩いて行きましたけど？

完